

中山間地域の人口移動と少子化に影響を及ぼす要因
—宮崎県椎葉村を対象として—

東京医療保健大学大学院看護学研究科博士課程

日高 未希恵

目次

第1章 序論.....	1
1.1. 少子高齢化と人口減少.....	1
1.1.1. 現代日本の少子高齢化・人口減少.....	1
1.1.2. 非大都市圏から大都市圏への人口移動.....	2
1.1.3. 中山間地域の少子高齢化と人口減少の現状	3
1.2. シビックプライド	5
1.3. 目的.....	6
1.4. 本研究の調査地の概要	7
1.4.1. 宮崎県椎葉村の概要.....	7
1.4.2. 椎葉村地区別の人口構成	7
1.5. 本研究の構成.....	8
図表	10
第2章 中山間地域でありながら人口減少率が低く出生数が多い地区の特性.....	18
2. 1. 諸言	18
2. 2. 研究方法.....	18
2.2.1. 調査地.....	18
2.2.2. 調査内容と調査手法	19
2.2.3. データ分析	21
2.2.4. 倫理的配慮	21
2.2.5. 用語の定義.....	22
2. 3. 結果と考察.....	22
2.3.1. インタビュー内容のコード化、Included terms の形成、Sub cover terms への分類、および Cover term の形成	23
2.3.2. Cover term から Domain の導出	34
2.3.3. Main theme の導出	40
2. 4. 結語	41
2. 5. 研究の限界.....	42
図表	43
第3章 中山間地域の社会文化的特性および住民のシビックプライドと人口移動・少子化との関連	49
3. 1. 諸言	49
3. 2. 研究方法.....	50
3. 2. 1. 研究デザイン	50
3. 2. 2. 調査期間	50
3. 2. 3. 対象および調査方法.....	50
3. 2. 4. 質問票調査内容.....	51
3. 2. 5. 分析方法	52

3.2.6. 倫理的配慮	54
3.3. 結果	55
3.3.1. 基本的属性	55
3.3.2. Uターン者・Iターン者の居住移動歴等	57
3.3.3. 「中山間地域振興尺度」と個人属性、人口移動あるいは居住地区の少子化との関連	58
3.3.4. 「シビックプライド尺度」と個人属性、人口移動あるいは居住地区の少子化との関連	62
3.4. 考察	66
3.4.1. 中山間地域である椎葉村の暮らしの現状	66
3.4.2. 「中山間地域振興尺度」と個人属性、人口移動あるいは居住地区の少子化との関連	68
3.4.3. 「シビックプライド尺度」と個人属性、人口移動あるいは居住地区の少子化との関連	70
3.5. まとめ	73
3.5.1. 「中山間地域振興尺度」と個人属性、人口移動あるいは居住地区の少子化との関連から得られた知見	74
3.5.2. 「シビックプライド尺度」と個人属性、人口移動あるいは居住地区の少子化との関連から得られた知見	74
3.6. 研究の限界	75
図表	77
第4章 結論および今後の展望	101
謝辞	105
引用文献	106
Appendix	113

第1章 序論

1.1. 少子高齢化と人口減少

1.1.1. 現代日本の少子高齢化・人口減少

2015年国勢調査(総務省 2015)によると、わが国の総人口は前回調査時(2010年)に比べ約96万2千人縮減した(図1-1)。日本は現在先進諸国の中で最も高い人口減少率を示す国であり(増田 2014)、社会の成熟に伴う人口減少(自然減)は近代以降、日本人がはじめて直面する時代変化である。また合わせて進行する少子高齢化とともに、世界に先駆け少子高齢化・人口減少社会に直面している(梅崎 2018)。

現代日本の人口減少は1970年代半ばに始まった少子化に由来する。1950年代半ばまでに多産多死から多産少死をへて少産少死にいたる人口転換を日本は実現した(門司 2014, 梅崎 2014)。1950年代から1970年代前半までの約20年間、合計特殊出生率(Total Fertility Rate:以下TFR:15歳~49歳の女性の年齢別出生率の合計値で、一人の女性がその間に産む平均の子ども数を指す)は人口置換水準すなわち人口が世代を超えて維持される為に必要な値の2.1周辺で安定した時期が続いた。しかし1974年より再び低下を始め、1990年代に起きたバブル崩壊後、TFRはさらに低下し2005年には過去最低の1.26となった。2006年以降はわずかに回復したが、その数値は1.5以上になっていない(内閣府 2019)。低出生率が續けば人口構造が高齢化にシフトし、出産可能年齢の女性人口が縮小し出生数が減少するという少子化の罠に陥る(Lutz et al. 2006)。わが国の少子化の直接的な要因は婚姻率の低下と晩婚化・晩産化の進行にあるとされている(岩澤 2002, 大塚ら 2012, 石井 2013)。また近年の日本の出生率の低下は未婚化・晩婚化・非婚化の影響と指摘されている(岩澤 2015)。

日本では少子化及び人口減少に伴い高齢化も進行した。2022年以降、いわゆる団塊の世代が後期高齢者となることから、老人人口およびその割合は増加することが見込まれており、2060年には高齢化率(65歳以上の老人人口が総人口に占める割合)が約40%という世界に例を見ない高齢化が超高水準に至るものと推計されている(内閣府 2019)。少子化とともに高齢化が進行すると相対的な労働力人口(15歳以上人口のうち、就業者数と完全失業者数の合計)減少による税収不足などの社会的資源の縮小と高齢者を支える年

金や医療費等の社会福祉に関連した財政負担など社会的コストの急速な増加が同時に生じる。労働力人口減少は経済成長を鈍化させ、また年金や医療、介護あるいは生活保護といった社会保障制度は労働力人口が支えることで成り立っているため、現状の制度設計のままでは社会保障制度の維持が困難になることが見込まれる（大淵 2002）。2065 年には若年層ほど人口が少なくなり、年少人口（0~14 歳）は 898 万人（10.2%）、生産年齢人口（15~64 歳）は 4,529 万人（51.4%）となることが推計されており、現役世代 1.3 人で 1 人の高齢者を支える社会の到来が予測される（国立社会保障・人口問題研究所 2017）。

1.1.2. 非大都市圏から大都市圏への人口移動

人口減少は国内各地で同時に生じるものではなく、まず非大都市圏で進み次いで三大都市圏に代表される都市部へシフトする（加藤 2018）。そのため、人口減少（人口増減率）は都道府県よってかなり差が見られる（総務省 2015）。

わが国においては 20 世紀後半以降、非大都市圏の人口減少の原因として非大都市圏からの人口流出が注目されてきた（江崎 2018）。1950 年代後半から始まった高度経済成長期に農山漁村を中心とする非大都市圏の人口が急激かつ大量に大都市圏へ移動した。その結果、大都市圏ではインフラ整備が追いつかず、交通渋滞や通勤ラッシュなどの過密化が問題となった。過疎化はこうした過密化の対語として『経済社会発展計画』（1967 年 3 月 13 日閣議決定）の中で初めて用いられた造語である。1970 年代前半には大都市圏と非大都市圏との所得格差の縮小により非大都市圏から大都市圏への人口移動は急激に減少し（繩田 2008）、過疎化も鎮静に向かっていた。しかしながら 1980 年代中頃より非大都市圏から大都市圏への人口流出が再び顕著となって以降、現在も非大都市圏からの人口流出は継続し、次第に転入超過は東京大都市圏におけるもののみとなった（作野 2006, 2018）。2015 年の国勢調査の結果によれば、2010 年と比べて人口が増加した都道府県は沖縄県、東京都など 8 都県のみであり、子供が生まれない地域つまり年間出生数が 0 という自治体も出現している（総務省 2015）。

非大都市圏の人口流出はその数の減少だけに留まらない。そこに含まれるであろう若年女性人口（20~39 歳）が減少することでその地域の再生産性が低下し、人口減少の負のスパイラルが生じる（増田 2014）。また天野（2019）は、都道府県レベルで子ども（0~14

歳) の人口変動と再生産年齢 (15-49 歳) 女性人口とが強い相関関係を示すことを指摘している(天野 2019)。

都道府県間の人口移動の相当部分は就職や進学を契機とした若者の移動で占められる(大友 1996, 江崎 2007, 林 2018)。非大都市圏では賃金、安定性あるいはやりがい等の点で良質と言える雇用が不足していることから、若者が相対的に良質な雇用を求めて大都市圏に流出していることが社会減につながっている(江崎 2007)。一般的には非大都市圏から大都市圏に移動するのは女性よりも男性が多く、さらに大都市圏への定着性は男性より女性の方が高いことが示されている(内野 1984)。地域の年齢別構造は過去の人口移動に依存し、また性比(男性人口の女性人口に対する比)は高齢になるほど平均寿命の男女差を反映して小さくなるため、若年人口の流出が続いている高齢化が高くなっている地域ではより性比が小さくなりやすい(丸山 2018)。2015 年国勢調査ではわが国の性比は 94.8 であり、市町村レベルの性比は中部地方以東の東日本よりも近畿地方以西の西日本の方が低いという傾向にあり、特に九州ではその数値は小さい(総務省 2017)。また若者の人口移動の結果おこる地域の性比のアンバランスが未婚率や出生に影響を与えるとの報告もある(原 2009, 工藤 2015)。彼らがその後も大都市圏に住み続ける場合、それは将来の非大都市圏の人口減少につながる。若者流出による人口減少は労働力人口の減少と消費市場の縮小という需要/供給の両面から地方経済に負の影響を与えている(総務省 2017)。非大都市圏における定住人口の減少を抑えるためには良質な雇用を増やし人口流出を止めるとともに、大都市圏からの U ターン・I ターンといった人口流入を増やしていくことが求められている。

1.1.3. 中山間地域の少子高齢化と人口減少の現状

世界に先駆け少子高齢化・人口減少が進行する日本だが、特に中山間地域の持続可能性について懸念が強まっている(国立研究開発法人科学技術振興機構 研究開発戦略センター 環境・エネルギーユニット 2019)。中山間地域とは農林統計上用いられている地域区分のうち中間農業地域と山間農業地域を合わせた地域を指し(図 1-2)、中山間地域の人口はわが国の全人口の約 1 割に留まるものの、面積としては国土の約 7 割、耕地面積と農業産出額はそれぞれわが国全体の 4 割を占め(表 1-1)、食料生産の場と

して重要な位置づけである（農林水産省 2017）。しかしながら中山間地域は、傾斜地が多いなど地理的・地形的に立地条件が厳しく、一般的にアクセスが不便な地域である。中山間地域では人口が流出するとともに、そこにとどまつた人々の高齢化が進行し、2000年代に入ると縁辺集落の小規模・高齢化が一層顕著となり集落の消滅にも注目が集まるようになった（大野 2005）。そこではこれまで顕著であった社会減に加え、再生産年齢人口の縮小に伴う出生数の減少および規模の大きい出生コーホートが順次高齢期に突入していくことに伴う死亡数の増加により自然減が大きくなることから、今後人口減少の更なる加速は避けがたい状況にある（西岡ら 2002）。増田は進行する非大都市圏の人口減少を「消滅可能性都市」という概念で表現し（増田 2014）、わが国の 896 の市町村がこれに該当すると述べている。2018 年 4 月 1 日現在、中山間地域が含まれる自治体 1180 市町村（中間農業地域と山間農業地域とで重複している市町村を除いた市町村数）のうち、817 市町村は過疎地域に指定されている（農林水産省 2019）。過疎地域とは、法的には過疎地域自立促進特別措置法（第 2 条、32 条、33 条）の規定に基づき、表 1-2 に示すように人口減少率、高齢者比率、若年者（15-30 歳）比率のいずれかと財政力要件がともに基準に該当する市町村であり、中山間地域を含む全市町村の 69% が過疎地域に該当する（農林水産省 2017）。中山間地域では鳥獣害、草刈りや除雪の負担、不便な交通、農林業の担い手不足あるいは耕作放棄地の増加等の多くの課題が存在する（国立研究開発法人科学技術振興機構 研究開発戦略センター 環境・エネルギーユニット 2019）。

国立研究開発法人科学技術振興機構研究開発戦略センター環境・エネルギーユニットは、「中山間地域の持続可能性の維持・向上に向けた課題検討報告書」で以下のようにまとめている。「人口減少といった課題に対し、中山間地域の振興のための政策は、これまでおもな産業である農林業の生産現場強化と効率性を重視した高収益農法の導入推進とが主要なアプローチであった。しかし、人口減少が起因する生産性の低下や地域が持つ多面的な機能の低下といった課題に対する農村地への移住・定住を促進する施策も並行して進められており、今後は『人々が中山間地域に住みたくなる』ために必要な方策が重要視される」（国立研究開発法人科学技術振興機構 研究開発戦略センター 環境・エネルギーユニット 2019）。また江崎（2007）は、非大都市圏出

身者の生涯移動に関する指標、例えば県外への流出率、流出率のうちの U ターン率あるいは定着率などに着目し、自治体への人口流入促進策のためには仕事以外を生きがいとできる暮らしやすい地域づくりが必要であり、そのためには豊かな自然環境の保全あるいは地域社会の絆や伝統行事の維持・発展が重要であることについて報告している（江崎 2007）。しかしながら、これまで中山間地域に受け継がれる豊かな自然や伝統文化などの地域資産、その継承活動、さらにそれを通した地域社会の繋がりなど地域固有の社会文化的側面から中山間地域の人口移動や少子化について検証した報告は見当たらない。

1.2. シビックプライド

近年、自治体では定住・交流人口の確保に向けて、住民の市民としての誇り（civic pride）に着目したまちづくりが注目を集めている（牧瀬 2019a, 2019b）。シビックプライド（civic pride）の概念は、「郷土愛」という言葉とは異なり、「時代や地域に関わらず自己決定、文化アイデンティティ、市民権、所属の概念と結びついている」（Collins 2016）と整理されている。郷土愛は「生まれ故郷」に限定されるが、シビックプライドは、生まれ故郷でなくとも住んでいる都市に対する市民が誇りを持てばそれがシビックプライドとされる（牧瀬 2019b）。

近年、「シビックプライドを持つ住民は、まちづくり・地域づくりの大きな資源になる」という考え方のもと、シビックプライド醸成のための取組を進める自治体も多い（伊牧瀬 2019）。例えば、伊賀市（三重県）では、「伊賀市シティプロモーション指針」（伊賀市 2018）の中で①定住・U ターン 人口の増加、②参画意識の向上、③市民による情報発信の増加が期待される、としてシビックプライドの醸成を政策目標の一つに掲げている。他にも栃木県足利市、大阪府尼崎市および長野県上田市などの自治体が定住・交流人口の増加などの効果に期待を寄せ、住民のシビックプライドの醸成を政策に取り入れつつある（足利市 2016, 尼崎市 2015, 上田市 2018）。

牧瀬（2019b）は、「自治体が指摘するシビックプライドのメリットはまずは定住人口の維持がある。シビックプライドが高いほど、人口の流出が鈍化すると言われている。そして、シビックプライドを持つ人々の口コミ効果により人口の流出を防ぎ流入もえると

も指摘される。次に、シビックプライドが高いほど住民の参画意欲が強まるとも言われている。そのほか多くのメリットが指摘されている。しかしながら、自治体が指摘しているシビックプライドの効果が科学的に立証されたわけではない」と述べている。これまでの研究では、伊藤（2017）がシビックプライドの尺度開発を行い、年齢と「参画」意識との間に正の相関関係があることや「愛着」→「参画」→「アイデンティティ」という意識の影響関係を示唆している（伊藤 2017）。しかしながら、これまでシビックプライドに関する知見はまだ十分に検討されておらず、シビックプライドと地域の人口移動や少子化との関連について検証した報告はない。

1.3. 目的

日本は世界に先駆け、少子高齢化・人口減少社会に直面している。現代日本の人口減少は晩婚化および晚産化による少子化に由来し、非大都市圏では大都市圏への若者層中心の人口移動により人口減少が加速度的に進んでいることはこれまで述べた。非大都市圏の中でも中山間地域が含まれる市町村はすでに約7割が過疎地域に指定され、取り巻く環境は一層厳しい。中山間地域を含む地方域の少子高齢化・人口減少の進行に関しては、未婚化、晩婚化あるいは晚産化の影響による少子化のみならず都市域への人口移動が大きく関与しており、どの自治体も対策に取り組んでいるものの、現在のところ中山間地域へのUターン者、移入者の増加といった定住の増加にむけた効果が得られているとは言い難い。

こうした背景をふまえ、本研究ではマクロ（日本の全体状況を把握するために全国・都道府県を対象にする）的な視点ではなく、ミクロ（課題解明にふさわしい都道府県・市区町村を対象にして地域的状況を把握する）的な視点で、中山間地域の人口移動や少子化との関連が以下に示す2つの因子に存在するとの仮説の検討を第1の目的とした。

- 1) 中山間地域に受け継がれる豊かな自然や伝統文化などの地域資産およびその継承活動とそれらを通じた地域社会の繋がりなど社会文化的な地域特性

- 2) 住民が持つ「市民（として）の誇り」を意味するシビックプライド意識

今回新たに得られた因子の構成を整理したうえで中山間地域の人口移動および少子化との関連を明らかにし、人間の「生き方」に深く関係する現在の人口特性（大塚ら 2012）に

について、生物学的な視点と文化的な視点を重ね持つ人類生態学的手法から地域の実情に即した少子化・人口減少対策への示唆を得ることを第2の目的とした。

1.4. 本研究の調査地の概要

1.4.1. 宮崎県椎葉村の概要

調査地は宮崎県東臼杵郡椎葉村（以下、椎葉村）である。宮崎県はTFRが全国の中でも長い期間高値を維持している県であり、2018年の宮崎県のTFR（1.72）は沖縄県（1.89）、島根県（1.74）に次いで全国3位である（厚生労働省2019）。その宮崎県の中でも椎葉村は近年下降傾向はあるものの高いTFRを維持する地域である（図1-3）（表1-3）。宮崎県は県土の約9割が中山間地域を占め、椎葉村もそこに含まれる一つの自治体である。宮崎県北西部、九州山地の中央に位置し、総面積は537.29km²（東京都23区部は621.8 km²）で、その96%を山林が占める。標高1,000mを越える峻険な九州山脈に抱かれ、村内には傾斜地が多い。10カ所の自治公民館区（以下 地区）が村内の山間に点在し、約1200世帯、約2,600人の村民が居住している。それぞれの地区が一つの自治公民館（宮崎県、鹿児島県などに特有の地域自治組織）を通し、地域末端までの連絡体制が確立されている。基幹産業は森林資源を活かした農林業である（椎葉村2019）。

日本の三大秘境の一つと称される椎葉村は、平家落人の里として、源氏と平氏にまつわる地名や伝説が多く残された地で日本の民俗学発祥の地としても知られる。現在でも独自の文化を維持し、神楽（神を迎えたたり、災厄を祓ったり、神と共に楽しむために神前に奉納する舞楽）、臼太鼓踊あるいはひえつき節をはじめとする民謡あるいは民話等、伝統文化を継承している地域である。また森林と農地とを循環的に利用し環境と調和した伝統的な農法である焼畑農法が日本で唯一継続して行われている（椎葉村2019）。

椎葉村内には高校がなく、若者は中学校を卒業すると進学のための離村を余儀なくされる。他の地方域と同様、若者は高校卒業後もそのまま都会に定住する傾向があるため、再生産年齢層が減少しそれに伴って年々出生数は減少傾向にある（図1-4）。

1.4.2. 椎葉村地区別の人口構成

1995年、2000年、2005年、2010年、2015年および2018年の「椎葉村住民基本台

帳」をもとに 10 地区別の人口動態を概観する。

各地区の 2018 年の人口ピラミッドを図 1-5 および 1-6 に示す。全地区で生産年齢人口が流出し出生数が減少する農村型ともいわれるひょうたん型がベースとなった形を示している。

1995 年の人口を 100 とした場合の 2018 年の地区毎の人口比を表 1-4 に示す。全地区で人口減少が進んでいるが、減少比は最大値 75.3、最小値地 38.0 と地域差がみられる。

2018 年のデータを基に各地区総人口に占める年少人口（0～14 歳）、生産年齢人口（15～64 歳）、高齢者人口（65 歳以上）それぞれの割合をみると、老人人口割合が 5 割を超える地区が 3 地区みられた（図 1-7）。

2018 年のわが国の性比は 94.8 であるが、中部地方以東の東日本よりも近畿地方以西の西日本の方が低い傾向があり、宮崎県の性比も 88.9 と低い（総務省 2019）。しかしながら椎葉村は宮崎県の中でも性比が 100 を超える唯一の自治体である（2018 年 10 月 1 日現在）（宮崎県 2018）。2018 年の各地区的性比を総人口（図 1-8）、15-64 歳で構成される生産年齢人口（図 1-9）および再生産年齢にあたる 15-49 歳人口（図 1-10）の 3 区分に分け、それぞれ図に示す。高齢化がより進んだ地域では総人口性比は低値になりやすい（丸山 2018）との指摘通り、総人口の性比は人口減少比が高かった A 地区（84.2）と J 地区（85.4）において宮崎県全体の性比数値（88.9）より低い数値を示している。15-49 歳人口性比については 0 を示す地区が存在し、総人口あるいは生産年齢人口（15-64 歳）の性比と比較して大きい性比を示す地区もみられ、性比のアンバランスさが確認できる。

1.5. 本研究の構成

第 1 章（本章）では、研究の目的と日本の、特に中山間地域での少子高齢化・人口減少の概要について述べ、さらに本研究の調査地である宮崎県椎葉村の概要および現在の人口構成について述べた。

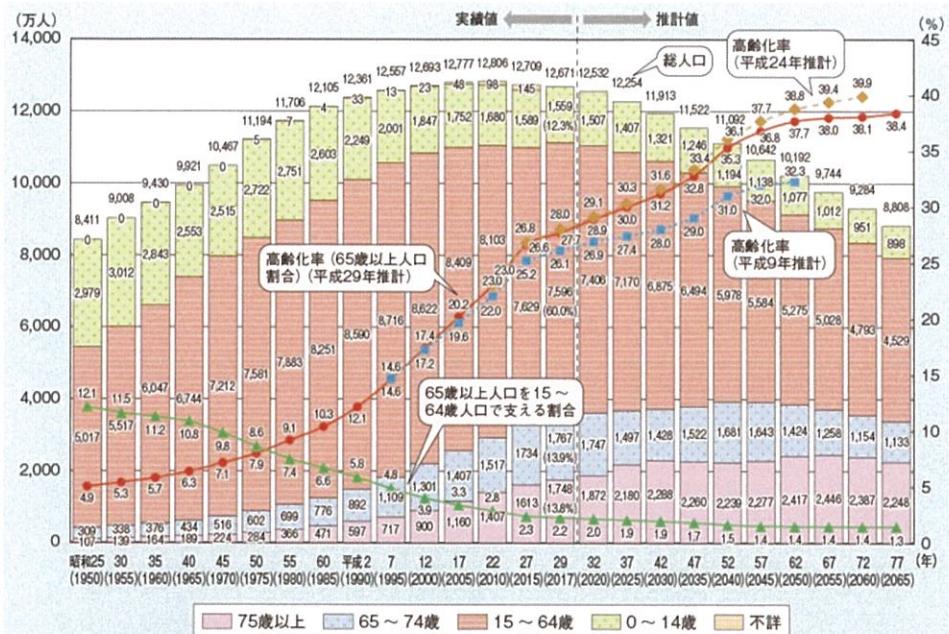
第 2 章では、椎葉村内で人口減少率が低く出生数が多い地区の地域特性について、エスノグラフィーにより質的に検討する。そのうえでそこに受け継がれる豊かな自然や伝統文化などの地域資産、それらの継承活動およびそれらを通した地域社会の繋がりといった社会文化的側面が人口移動や少子化などどのように関わっているのかを質的に検討した結果を

述べる。

第3章では、椎葉村の19歳以上の者（2427人）を対象とした質問紙調査を実施し、第2章で得られた4つのDomainを用い中山間地域振興尺度の開発を行ったうえで、中山間地域振興尺度と既存のシビックプライド尺度（伊藤 2017）と人口移動および少子化との関連を検討する。

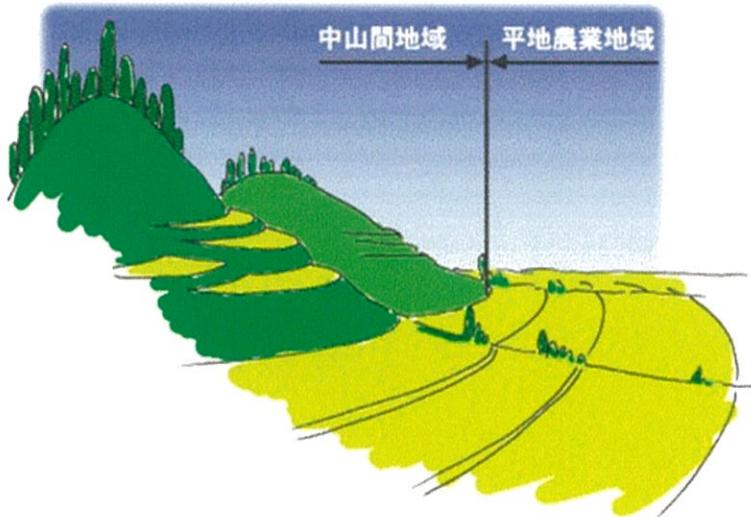
第4章では、以上の結果を総括し、今後の展望について述べる。

図表



資料：棒グラフと実線の高齢化率については、2015年までは総務省「国勢調査」、2017年は総務省「人口推計」（平成29年10月1日確定値）、2020年以降は国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成29年推計）」の出生中位・死亡中位仮定による推計結果。点線と破線の高齢化率については、それぞれ「日本の将来推計人口（平成9年推計）」の中位仮定、「日本の将来推計人口（平成24年推計）」の出生中位・死亡中位仮定による、推計時点における将来推計結果である。

図 1-1 日本の人口構造の推移と将来推計 （内閣府 2018）



(農林水産省 2019)

図 1-2 中山間地域と平地農業地域

表1-1 中山間地域の主要指標（平成27年）

区分	単位	全国	中山間地域	割合
		(A)	(B)	(B/A)
(ア)人口	万人	12,709	※2 1,420	11.20%
(イ)総土	千ha	37,797	27,409	※3 73.7%
(ウ)耕地	千ha	4,496	※2 1,841	40.90%
(エ)総農	千戸	2,155	953	44.20%
(オ)販売	千戸	1,330	566	42.60%
(カ)農業産出額	億円	88,631	※2 36,138	40.80%

資料:農林水産省統計部「2015年農林業センサス」(組替)((イ)、(エ)、(オ))

農林水産省「平成27年耕地及び作付面積統計」((ウ)の全国値)

農林水産省「平成27年生産農業所得統計」((カ)の全国値)

総務省「平成27年国勢調査」((ア)の全国値)

※1 農業地域類型区分は、平成29年12月改定のものを使用。

※2 「(ア)人口」、「(ウ)耕地面積」、「(カ)農業産出額」の中山間地域の値は、農林水産省農村振興局地域振興課が独自に推計。

※3 「(イ)総土地面積」の中山間地域の割合は、旧市区町村別個票データから集計した合計値に対する割合。

(農林水産省 2019)

表1-2 過疎地域活性化特別措置法による「過疎地域」

基準指標	指定地域を含む 市町村数
[1]S45～H27年の人口減少率が32%以上 [2]S45～H27年の人口減少率が27%以上、高齢者比率(65歳 [3]S45～H27年の人口減少率が27%以上、若年者比率(15歳 [4]H2～H27年の人口減少率が21%以上 (上記のいずれかに該当) [5]財政力指数0.5以下	817市町村

(農林水産省 2019)

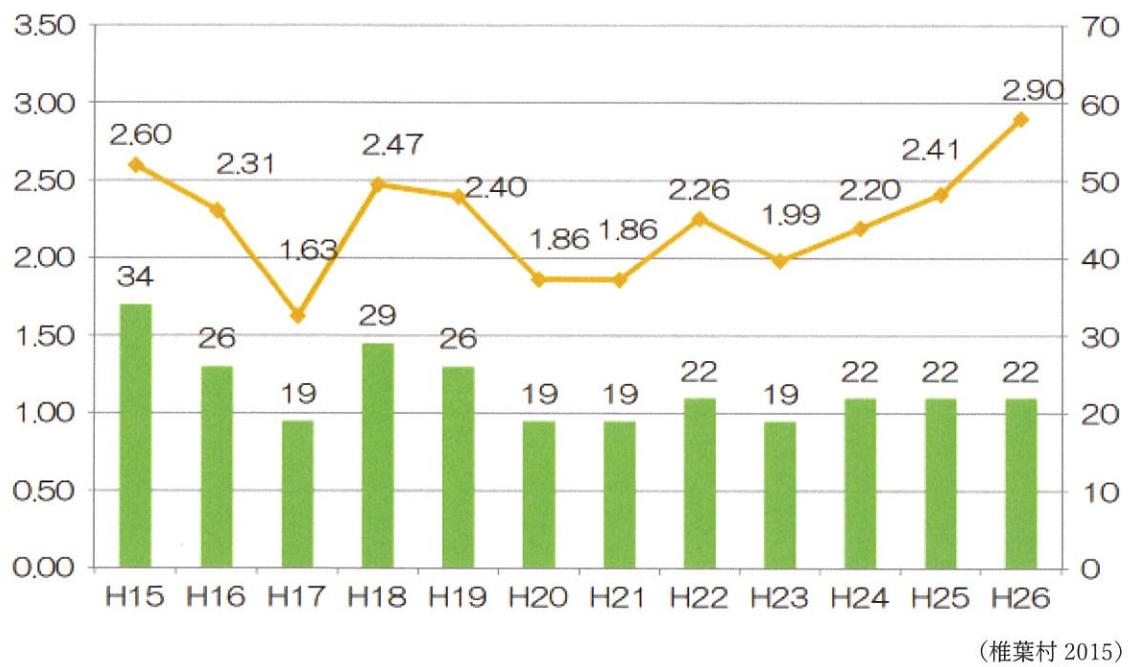


図 1-3 椎葉村における合計特殊出生率および出生数の推移

(椎葉村 2015)

表 1-3 全国 TFR と椎葉村 TFR (ベイズ値) との比較

公表年度	2002年	2007年	2012年	2016年
全国TFR	1.32	1.34	1.41	1.43
公表年度	1998-2002年	2003-2007年	2008-2012年	H24-H29年
椎葉村TFR ベイズ値 国の公表値	2.22	1.96	1.82	公表なし

ベイズ値： 二次医療圏のグループの出生状況を情報として活用し、これと各市区町村固有の出生数等の観測データを総合化して当該市区町村の出生率を推定した値

(厚生労働省 2017, 椎葉村 2015)

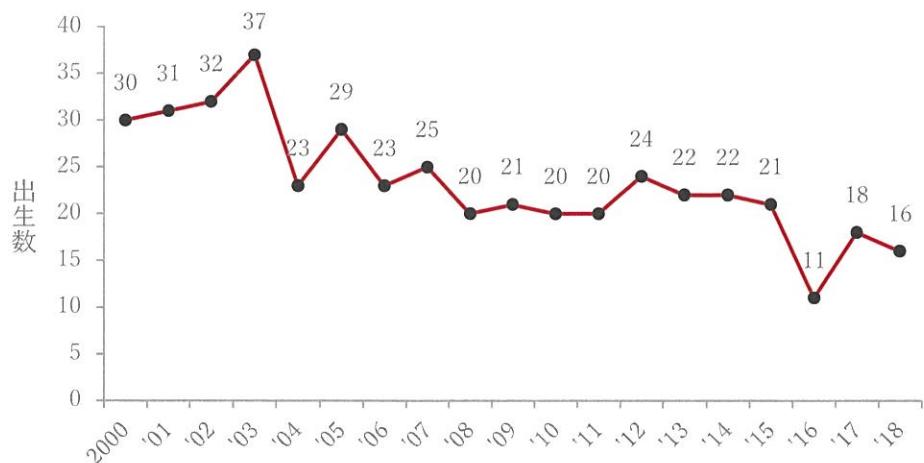


図 1-4 椎葉村における出生数の変化

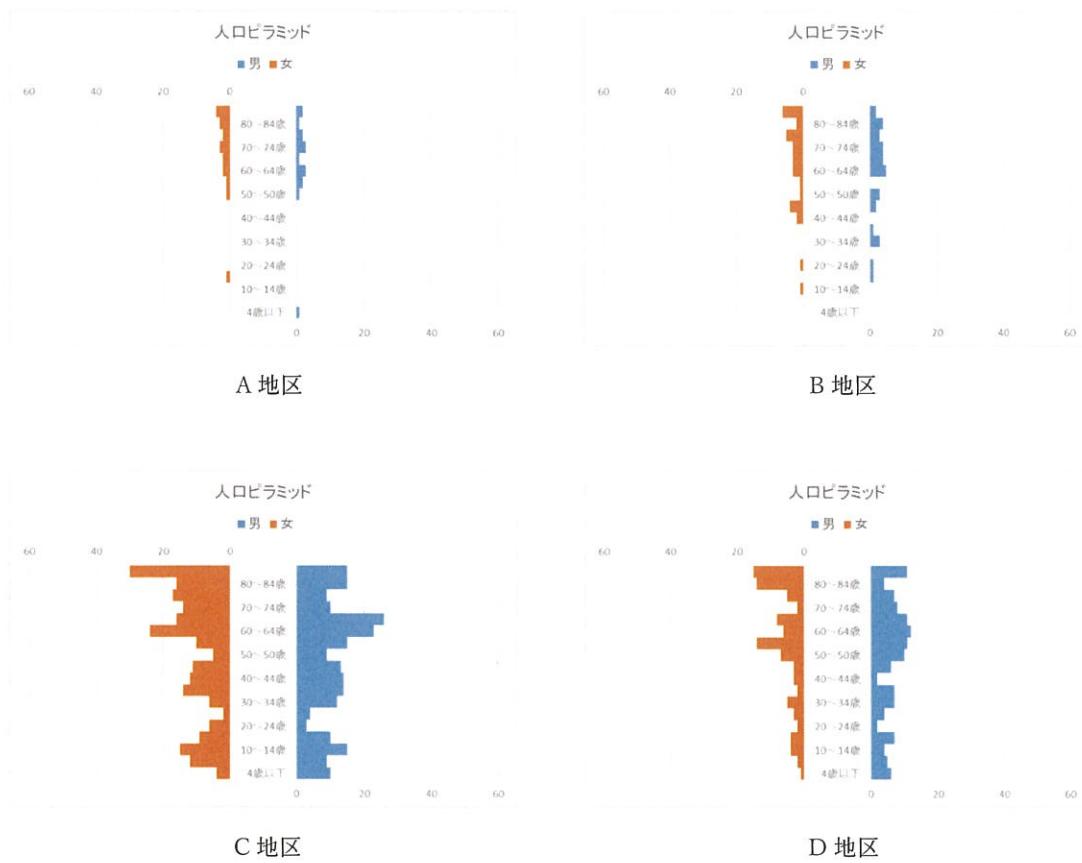


図 1-5 地区別人口ピラミッド（2018）

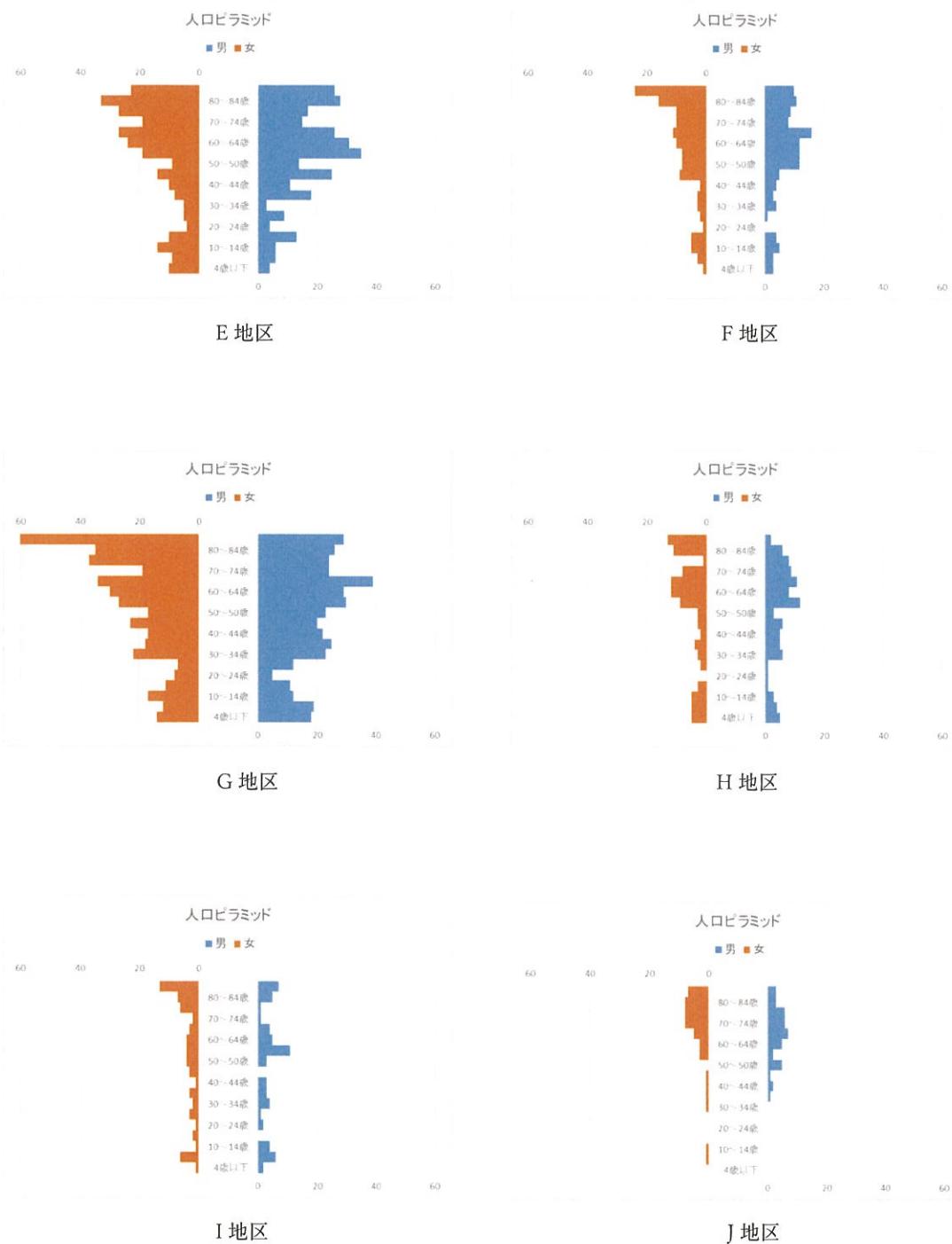


図 1-6 地区別人口ピラミッド（2018）(つづき)

表1-4 (地区別) 1995年を100とした場合の2018年の人口比

自治 公民館区	1995年 人口数			2018年 人口数			1995年と2018年の比較※		
	総数	男	女	総数	男	女	総数	男	女
A地区	92	44	48	35	16	19	38.0	36.4	39.6
B地区	98	43	55	65	33	32	66.3	76.7	58.2
C地区	596	304	292	449	226	223	75.3	74.3	76.4
D地区	364	189	175	224	124	100	61.5	65.6	57.1
E地区	962	491	471	561	291	270	58.3	59.3	57.3
F地区	426	200	226	253	122	131	59.4	61.0	58.0
G地区	1100	549	551	801	391	410	72.8	71.2	74.4
H地区	334	167	167	197	96	101	59.0	57.5	60.5
I地区	181	90	91	128	62	66	70.7	68.9	72.5
J地区	203	99	104	89	41	48	43.8	41.4	46.2

*1995年を100とした場合の人口比 (1995年人口/2018年人口) ×100

自治公民館区別人口割合

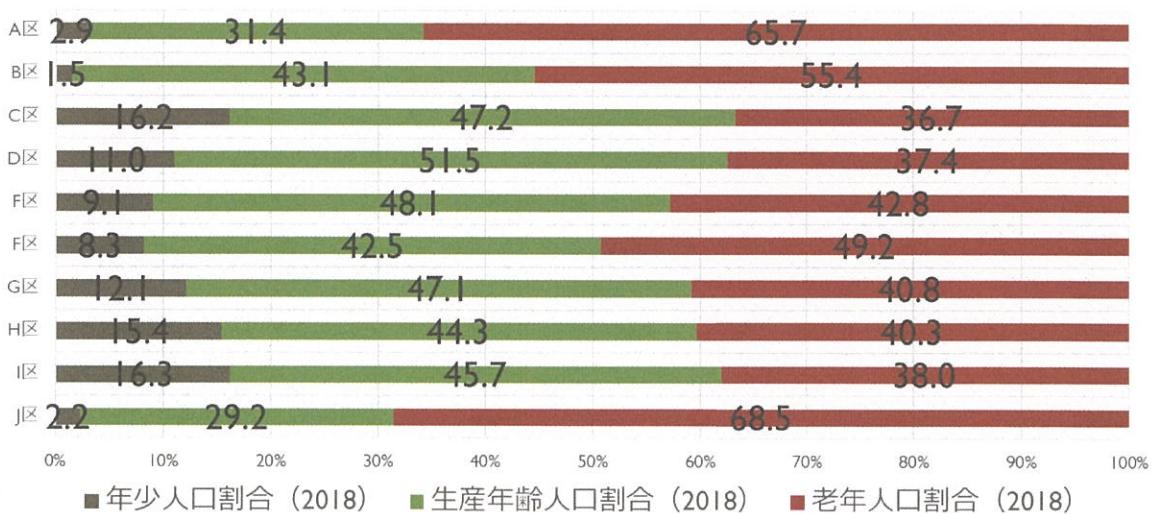


図1-7 自治公民館区別人口割合

人口性比人口総数（2018）

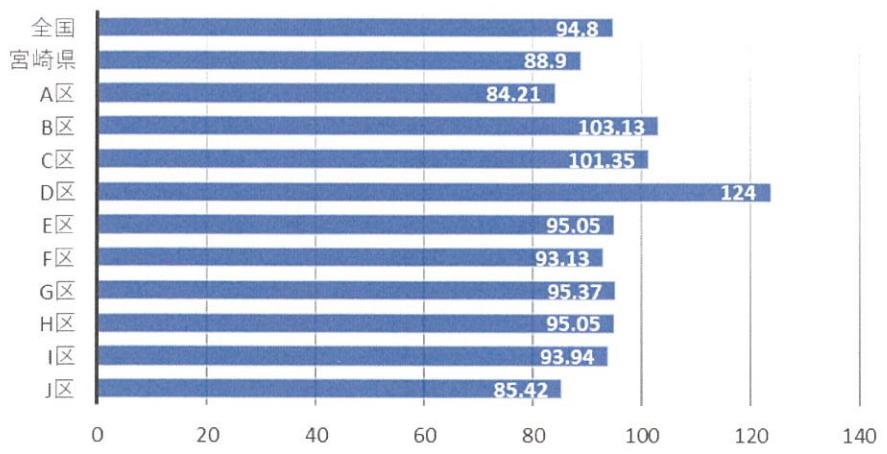


図 1-8 人口性比（人口総数）2018

人口性比15-64歳（2018）

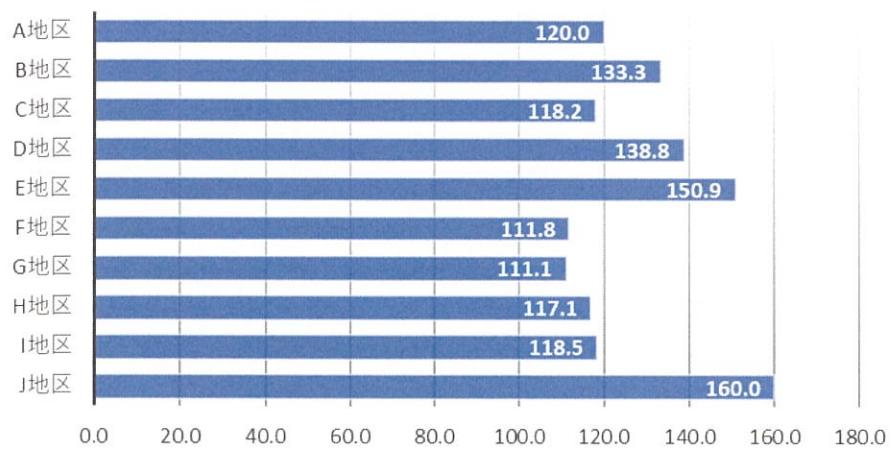


図 1-9 人口性比（生産年齢人口：15-64 歳）2018

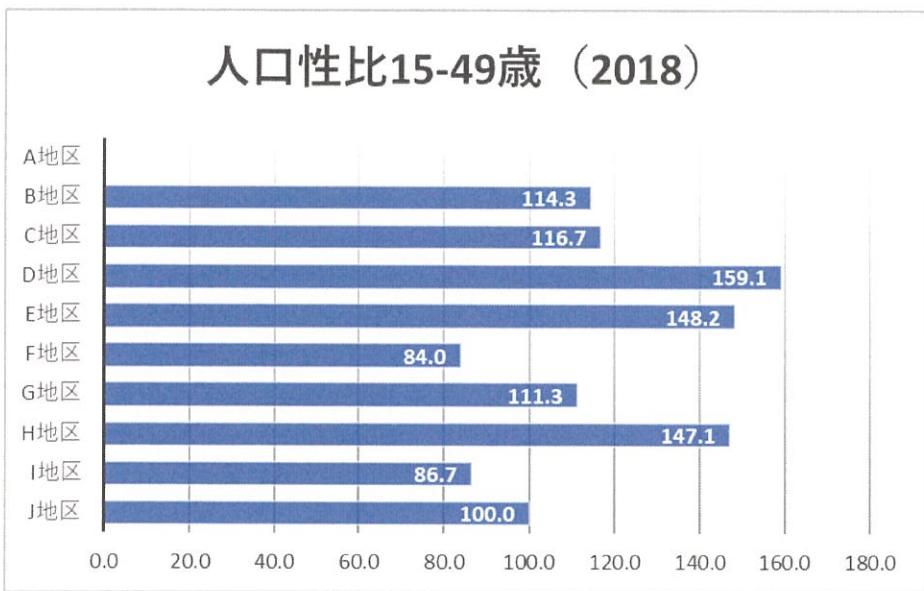


図 1-10 人口性比（再生産年齢人口：15-49 歳）2018

第2章 中山間地域でありながら人口減少率が低く出生が多い地区の特性

2.1. 諸言

非大都市圏の中でも中山間地域と指定されている市町村はすでに約7割が過疎地域に指定され、そこに住む人々を取り巻く環境は一層厳しい（農林水産省 2019）。中山間地域を含む非大都市圏の少子高齢化・人口減少の進行は、未婚化、晩婚化あるいは晩産化の影響による少子化のみならず大都市圏への人口移動が大きく関与していており（図2-1）（増田 2014）、またその進行度合いは地域差を伴っている（総務省 2015）。本研究の調査地である椎葉村も10の自治公民館区（以下 地区）で構成されているが、各地区の人口減少と少子化の進行には差がある（表2-1）。

そこで椎葉村における人口減少と少子化の進行における各地区の差について、この山間に受け継がれる豊かな自然や現在も椎葉村内26か所で伝承されている神楽を代表とする伝統文化、その継承活動、それを通した地域社会の繋がりなど中山間地域の暮らしにある地域特性が、地域住民の人口移動に対する意識や地域の出生（少子化）と関係しているのではないかとの仮説をたてた。

本研究では、中山間地域で今後さらに進行が予見される日本の少子高齢化・人口減少社会に課題解決にむけた基礎資料を得るために、行政施設が集まる地区を除き2002年から2015年にかけて椎葉村の中で最も人口減少率が低く（表2-1）、2015年時点での子供数（0～4歳）が多い尾向地区（椎葉村 2015）を調査地とし、現在の人口特性は人間の「生き方」に深く関係する（大塚ら 2012）という生物学的な視点と文化的な視点を重ね持つ人類生態学的手法から、少子高齢化・人口減少の進行が穏やかであることと関係のある新たな因子をエスノグラフィーに拠り質的に検討することを目的とした。

2.2. 研究方法

2.2.1. 調査地

宮崎県の三大河川の一つである耳川の源流地域に位置する尾向地区は、椎葉村の中心部である村役場が在る上椎葉地区から車で約1時間の奥地に位置している。尾向地区は耳川渓谷に沿い、山に囲まれた自然豊かな地域であり、そこには約150世帯の約400人が暮らしている。椎葉村には現在26か所で神楽が継承されているが、そのうち

の 4 つの神楽がこの地区の住民により継承されている。この地区唯一の学校である椎葉村立尾向小学校は 2018 年には創立 143 年をむかえ、同年の在校生数は 28 名であった。尾向小学校の卒業生は上椎葉地区にある村内唯一の中学校である椎葉村立椎葉中学校に進学するため、その全員が親元を離れ同中学校の寮での生活を送ることとなる。また椎葉村内には高校がないため、椎葉中学校の卒業生は他の自治体にある高校へ進学するために離村を余儀なくされる。つまり尾向地区の子供達は、基本的に親と一緒に暮らすことができるのは小学校卒業までということになる。

2.2.2. 調査内容と調査手法

本研究では人口減少率が低くかつ出生数が維持されている理由について洞察するために、参与観察およびインタビューにより対象者からデータを得るエスノグラフィーの手法を採用した。エスノグラフィーは文化つまり「人々が経験を解釈し行動を起こすために使う習得された知識」を記述する方法論であり、ある行為や出来事が集団にとってどのような意味を持ち、どのように文化を構成しているのかを理解する方法である (Spradley 1980/2010)。また小田 (2014) はエスノグラフィーについて、「人々が生きている現場を理解するための方法論」としており、低い人口減少率と出生数が維持されている理由およびその地域の特性を検討するには最適の方法であると考えられる。

椎葉村における調査の初期段階では、見知らぬ人である研究者に対し、住民の表面上の対応からは真実の情報が得られるのかは不確かである。エスノグラフィーの研究過程モデル (Leininger 1995) では研究者らが調査対象地域の行事に参加するなどし、同じ対象者のインタビューを繰り返すことで住民との信頼関係が次第に構築され、現実の地域の生活の様子が研究者に伝えられるようになるとされている。そのため今回の研究では以下の 1)～2) に述べるプロセスを経て調査を行い、さらに 3) の補足的な調査を加えた。

1). 参与観察

2017 年 8 月から 2018 年 5 月の間に計 23 日間椎葉村に滞在し実施した。椎葉村で伝承されている、神楽 (12 月) 焚烟 (8 月) あるいは学校行事 (尾向小学校焼烟収穫祭: 11 月) が行われる時期を中心に現地に入った。役場を通し、村内で行われる神楽や焼き烟学习発表会など多くの地域住民が参加する地域および学校の行事に招かれ、そこで地

域住民と交流しながら徐々に顔見知りとなっていました。共に食事をするあるいは村内を歩くなど、住民と行動を共有する時間を継続して持つことで住民から研究者に日常のありのままの情報が提供され始めた。観察した内容は画像あるいは動画として記録すると共にフィールドノートに記述した。また2017年8月～11月の参与観察で得られたデータはインタビューガイドに反映させた。

2). インタビュー

2017年11月から12月に実施した。尾向地区の特性が抽出できるようインタビュー対象候補者の選定を役場の担当者と検討した。インタビュー対象候補者は「現在の尾向地区で子育てをしている者（婚姻によるIターン者を含む）」および「子育てを支援する家族や地域住民」に加え、尾向地区の特性は他の居住地区からどのように認識されているかを検討するため、尾向地区の住民と別の地区在住者が混在する「自治体職員（保健師含む）」、「教育関連職員（教員あるいは教育委員会職員）」、「保育関連職員」、「看護師あるいは病院職員」および「椎葉村在住で未婚者のIターン・Uターン者」とした。その後役場および研究者より対象候補者へ調査への協力を依頼する連絡をし、協力依頼に応じた対象候補者に文書と口頭で調査目的と方法の説明を行い、調査参加の同意が得られた人を対象者とした。

インタビューはインタビューガイドをもとにした半構造化面接に拠った。研究者が尾向地区の暮らし、子供の成育環境および豊かな自然や伝統文化などの地域資産の継承に対する取り組みあるいは地域社会の繋がりに関連する認識や感情など、地区の社会文化的な特性についての話を対象者から聞き取った。対象者のうち「現在の尾向地区で子育てをしている者（婚姻によるIターン者を含む）」、「子育てを支援する家族や地域住民」および「未婚のIターン・Uターン者」に対しては、尾向地区での暮らしの中で生じる感情について他者に遠慮することなく語ってもらうために個人インタビューを実施した。一方「自治体職員（保健師含む）」、「教育関連職員（教員あるいは教育委員会職員）」、「保育関連職員」および「看護師あるいは病院職員」に対しては職種の組織単位でのグループインタビューとし、居住地区の異なるメンバーが自由に発言し、尾向地区の特性が抽出できるよう工夫した。インタビューの内容は参加者本人の了解を得て書き留や録音をし、事後に書き起こしたものをデータとした。全てのインタビューにおいて、語りにおける言葉の意図についてその都度確認し、対象者の語りが忠実に記述できるようデータの妥当性については分析後に対象者と確認した。

3). 文献調査

椎葉村役場の所蔵する村の刊行物、人口動態や産業などに関する調査報告書、白書あるいは歴史的文献などを参照し、インタビューガイド作成、フィールドノートの記録あるいはインタビュー記録等の裏づけのため、補足的資料として用いた。

2.2.3. データ分析

データ分析は、Spradley の段階的研究手順法 (Spradley 2010) に拠った。フィールドノートとインタビューのデータを精読して文脈の意味関係を見つけ出す領域分析を行い、文脈の意味関係を読み解いていく際、コード化されたデータ（最小単位の言葉や文章）から意味のあるまとまり (Domain) を見つけた。丸山ら (2010) は、Spradley の方法に基づき、インタビューから Main theme の導出手順を以下のように整理している。

- 1) インタビュー記録・フィールドノート記録をコード化する
- 2) 類語、同義、同文脈単語の分類 (Included terms の形成)
- 3) Included terms 間の関係を整理したうえで、Sub cover terms に分類し、最も良く表す言葉を抽象化し命名 (Cover term の形成)
- 4) Cover term 間の関連性の集約 (Domain の導出)
- 5) Domain の関連図より、Main theme の導出

本研究ではこの丸山らの方法により、インタビューの記録やフィールドノートの記録の分析を行った。分析に際しては定期的に指導教員と議論を行い、エスノグラフィーに精通した研究者より指導を受け、研究の真実性を高めた (D. F. ポーリット 2010)。またデータ収集期間を通じて、調査地の歴史的経済的な生活背景や慣習など社会的文脈を理解するため、自治体職員と地区担当教育委員から隨時助言を受けた。対象者である地区住民のうち 12 名に分析結果のチェックを依頼し、調査地の地域特性を適切に表していることの確認を得た。

2.2.4. 倫理的配慮

本研究は東京医療保健大学ヒトに関する研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：院 29-23）。

調査開始に先立って、椎葉村村長および椎葉村役場担当職員に対して研究目的・意義、研究方法、倫理的配慮および研究結果の公表について説明を行い、調査を実施する

ことへの承諾を得た。次に対象者に文書と口頭で調査目的と方法を伝え、匿名性の保持、目的以外にデータを使用しないことおよび回答の部分的な拒否や中途でも参加を拒否する権利の保証について説明し、その後に本人の意思を確認し、参加の同意を得た。

本研究において、開示すべき COI 情報はない。

2.2.5. 用語の定義

1). 伝統文化

近代化以前の伝統的な農林業や狩猟採集・漁労を通じた自然とのかかわりあい方、そのなかで育まれてきた生活文化であり、宗教儀礼や伝統芸能（広田 2001）

2). 地区

行政的に公民館区として決められた範囲。

3). ローカルな知

「人が育つローカル（局所的）な空間で学ぶ知」のことを指し、「保守的な知」ではなく、「日々生成される、社会文化的な実践の総体」（前平 2007a, 2007b）。

4). 地域資産

地域行事、地域文化、あるいは自然そのものなど、地域住民によって継承される有形および無形のものとする。

2.3. 結果と考察

インタビュー対象者は 42 人であった。内訳は A) 尾向地区で現在子育てをしている者（婚姻による I ターン者を含む）7 名（男性 2 名、女性 5 名、平均年齢 41.7 歳）、B) 尾向地区で子育てを手伝う家族・地域住民 11 名（男性 6 名、女性 5 名、平均年齢 63.7 歳）、C) 未婚の U ターン者・移入者 6 名（男性 2 名、女性 4 名、平均年齢 32.8 歳）、D) 自治体職員（保健師含む）6 名（男性 4 名、女性 2 名、平均年齢 37.0 歳）、E) 教育関連職員（教員含む）4 名（男性 4 名、平均年齢 47.0 歳）、F) 保育関連職員 6 名（男性 1 名、女性 5 名、平均年齢 43.5 歳）、および G) 看護師あるいは病院職員 2 名（男性 1 名、女性 1 名、平均年齢 51 歳）であった（表 2-2, 表 2-3）。A)～C) に対する個人インタビューは個別に実施し、要した時間は平均 35 分（範囲：25～45 分）で、D)～G) に対してはグ

ループインタビューを実施し、要した時間は平均 52 分（範囲：35～72 分）であった。

2.3.1. インタビュー内容のコード化、Included terms の形成、Sub cover terms への分類、および Cover term の形成

インタビューの記録・観察記録・メモを素材として、最小単位の言葉や文章を取り出し（コード化）、コード化されたものの類語、同義語あるいは同文脈単語の分類をした（included terms の作成）。分類された Included terms 間の関係を最も良く表す言葉を抽象化し命名（Cover term の作成）したところ、表 2-4 および表 2-5 の如く 22 個の Sub cover terms、およびその上位 8 個の Cover term が形成された（表 2-4, 表 2-5）。

以下、代表的な「語り」を適宜引用しながら、Cover term の解説を記す。また、記述の中で《 》は Cover term、〈 〉は Sub cover terms、【 】は Domain、「 」はインタビューデータ、〔 〕は研究者によるフィールドノート上の記述、()は対象者の番号を表す。

1). 《互助が根付く山の暮らし》

標高 1,000m を越える九州山地の中央に位置する尾向地区は、古来より〈山の急峻で狭小な地形での暮らし〉を営む場所である。その環境下での暮らしについて多くの人が「ここには“かてーり”がある」と語った。“かてーり”とは、椎葉村の方言で、助け合い・互助組織を意味する。急峻で狭小な地形で行う農業、あるいは林業などの作業は非常に大きな労力を要する。昔からこの地区では農林業といった生業だけでなく、地域、学校あるいは家に関わる様々な作業を地域内での互助（労働力の交換）、すなわち住民の助け合いと分担によりこなしてきた。地域の日常に存在する“かてーり”は物の貸し借りだけでなく、住民同士の暮らしの支え合いを意味することが考えられる。

「ここは何をするにも大変な作業になる。助け合いが当たり前じゃないと暮らしていけなかつたんですよ(B6)」、

「農業の機械化が進んでなかつた昔は 1 週間を通して隣近所が協力して皆で汗をかいて作業をしていた。お互い汗水たらして、労働力で対価を交換する。子供はそんな「かてーり」を通じた、仲の良い隣近所を見て育つたんです(B8)」、

また、「ここには村道しかない(A5)」、「どこに行くでも時間がかかる(A2)」、「災

害があったら、電気も水も心配(G1)」と言うように暮らしの困難さがあることも推察されたが、一方で「お互いさまで皆が助けてくれるし、不便だからいいこともある(A4)」、「御礼してもらいたいからじゃなくて、してあげたいという気持ちがある。そんな気持ちのやり取りが嬉しい(A6)」という言葉が聞かれ、機械化が進んだ現在でも“かてーり”の精神は地域住民の中に受け継がれ、〈不便な生活環境が繋がりを結ぶ暮らし〉があることが考えられる。

また、「近所の人にもたくさんお世話になったから、そのお返しをする。親がそうするのを子供の頃から見てきた。自分が生きていく中で、物の貸し借り以外にも、人生の貸し借りっていうのかな。そんな助け合いもある。そんな助け合いが残るここで自分も子供を育てたいと思って戻って来た(C1)」と言うように、地域の繋がりが、若者が地域に戻るという選択に影響を与えていることもうかがえた。

これらの語りや単語群 (Included Terms) は《互助が根付く山の暮らし》という言葉で抽象化した。

2). 《高齢者が先導し創造する地域》

尾向地区の高齢者の一人は、この地域には特有の幸せな暮らしはあるとして、「この地域の幸せな暮らしは、経済的幸福だけでは成り立たない。山村での自然を受け入れ、人々と助け合い、人の役に立つ。そういうことが幸せで、それがここで暮らす楽しさになる(B10)」と語った。高齢者・年配者の存在について、「集まりごとがあると必ず年配の高齢の方から最初に挨拶をするのが当たり前のこと(A3)」、「行事毎に何人かは、その道のスペシャリストの年配者がいて指導するという統率体制が取れている(D1)」、

「ここは年寄りの言うことを子供も若者もよく聞きます(B7)」、

「ここは田舎だが何が幸せで豊かな暮らしなのかを年配者が教えてくれる(A4)」、

「じいちゃんより、曾じいちゃんがえらい。自然と子供たちもそう思って育ってる(D3)」、

「何事もいろんな年代が和気あいあいとやりながらも年配者からの上下関係がきっちりしている(C3)」、

「こちらの子はスーパーマンみたいな60代～70代の話を見て聞いて育つ(A7)」、

など多くの言葉が聞かれた。尾向地区における高齢者・年配者は、山の暮らしの経験値の高い者として、山での生き方や知恵や地域資産を次世代に伝えていく役割があり、尊敬される人あるいは影響力を持つ人として認識されていた。尾向地区は家庭でも地域社会でも〈年功序列の意識が残る地域〉であることがうかがえた。

また高齢者たちは人口減少が進む尾向地区に人が戻り、持続可能な尾向地区を実現させるために〈地域が楽しい場所になる地域〉づくりの必要性を繰り返し話してくれた。

「皆ここにいたい、楽しいって思える所じゃないと帰って来ない(B8)」、

「人が大事。いつでも帰っておいでという気持ち(B6)」、「帰りたいと思える居場所をつくってあげたい(B11)」、

「盆にみんなが帰ってきて何もする事がないと面白くないから、帰ってきた人たちを楽しませるために夏祭りをはじめて、今年で31回目になります。どれだけ8月15日が盆で忙しくても、帰ってきた人を楽しませるために皆でやるんですよ(B10)」、

村道しか整備されておらず病院のある中心地まで車で1時間かかる尾向地区における自然災害等に対する考え方や備えについて質問したところ、尾向地区の高齢者は〈地域愛着が創る自治意識の高い地域づくり〉を推進する役割をもつことが考えられる話を聞くことができた。

「先祖も自分らもここで生業をたてて、この地への思いや愛着がある。自分たちがここを守らないと(B8)」、「ここは良い所です。ここを次の世代に残すためには、役場に頼っているだけでは守れない。自分らでも知恵をださんと(B11)」、

「尾向は椎葉村でも一番不便なところにあり、いざとなってしまった時には、もう間に合わないところ。若者には消防団に迷惑をかけないよう常に自分たちでどうにかする方法を考えておかなくてはいけないと声をかけています(B6)」、

といった話が聞かれた。実際に尾向地区では過去に自然災害が発生している。〔平成3年に起きた台風による災害では民家6戸が埋没したが、被災地の28世帯75名全員が避難しており全員が無事だった(椎葉村尾向小学校前記述板より)〕。

平成16年には台風により村道が寸断され、尾向地区全体が孤立することがあった。「この台風の際、病院のある上椎葉地区まで、通常であれば車で通常1時間弱で行けるところを回り道して3時間半かけて地域住民が傷病者を搬送しています(G2)」、この時の反省から尾向地区では高齢者が率先して地域住民や自治体を動かし、2014

年4月椎葉村内第1号となるヘリポートの設置を実現させている。

これらの事実や語り、単語群（Included Terms）は《高齢者が先導し創造する地域》という言葉で抽象化した。

3) 《継承する地域資産がある地域》

山の暮らしを基盤に持つ尾向地区は国内外より〈注目を集める自然・文化が存在する場所〉であった。尾向地区は日本で唯一焼畑農法が継続して行われている場所であり、2015年には国連食糧農業機関(FAO)より世界農業遺産に認定された。また尾向地区を含む椎葉村内26か所で伝承される椎葉神楽の特徴は、狩猟神事が織り込まれており全国的にみても珍しい曲目が多く、芸能史や歌謡史のうえからも貴重な伝承(渡辺 2012)であり、国の重要無形民俗文化財に指定されている。このような自然・文化など地域資産の継承は、尾向地区の暮らしの歴史・文化を現在に伝えるものであり、地域全体で様々な世代の住民が参加することは地域の日常となっていた。尾向地区は住民が一体となって〈継承の場で地域全体が交流する地域〉であることが考えられる話が聞かれた。

「地域行事は義務的なものでなく 正月とかと同じでここの人間だから当たり前に皆で集まる楽しいもの(A4)」、

「子供の頃から皆が集まって練習して、創って。今は一緒に酒を酌み交わす(D3)」、また、地域資産の継承活動は子供から高齢者まで幅広く参加し単に住民が交流するだけでなく、地域の歴史や環境を子供達へ伝える地域教育の場であることが分かる言葉が聞かれ、子供に伝えることで大人も地域を学びなおす〈継承の場で地域を学び続ける地域〉を住民全体で創っていることが推察された。

「神楽では、父親たちが子供の師匠だし、その父親たちに関しては私たちが師匠で、父親たちは私たちの教え子です。歳が1つでも上なら師匠。代々神楽だけでなく、山のこととも地区の防災もそうやって伝えてきた(B9)」、

「ここでは大人がやってきたことを子供たちに伝えていく。言葉だけでは子供には伝わらないから、親も仕事を休んでも一緒に参加して教える。そうすることで伝えることが又新しく出てくる(B7)」、

このように伝承される神楽に対しては、多くの人が「大好きなもの」、「大切なもの」、「自分たちのところの神楽」と語った。

「子供の頃から皆が集まる神楽が大好きで、地元に戻って来た理由の一つ(A1)」、「独身の青年が泊まり込みで村外へ仕事に行くのに、神楽や子供会、運動会などの地域行事に全部帰ってくると言う。地区のために帰らないと。それが当たり前って言う(E3)」、「絶対戻ってきて皆で神楽をするって約束を子供の頃から話していました(A1)」、「皆で神楽しながら育ったここの人間だから。椎葉でもここじゃないとダメなんです(D1)」等の発言から、尾向地区はく継承の場で地域愛着とアイデンティティが育つ地域であることが推察できた。

これらの事実や語り、単語群 (Included Terms) は《継承する地域資産がある地域》という言葉で抽象化した。

4). 《地域とともに継承する学校》

この地区での“小学校”の役割から地域特性を引き出そうと小学校では「地域にとって小学校とはどんな場所ですか」、「子供たちには、どのように学校で成長してもらいたいですか」と問うた。その結果、尾向地区では 20 年以上前から小学校に対し地域に根付いた教育の必要性を住民が積極的に要望を出していたことがわかった。

「部活の遠征があっても地域の行事には参加させてくれ、地域の行事をおろそかにはできない。尾向には尾向の文化が当然ある(E3)」、

「地区的子供を育てるためには学校もこうあってほしいという地区的思いがある。(E4)」、「子供たちのために良くしたい。盛んな意見が挙がる(E2)」との語りから、尾向地区は〈住民が求める地域文化を大事にした学校〉で小学校を核とした地域教育が行われていていることが考えられた。

尾向地区にある唯一の小学校である尾向小学校では毎年“子供焼畑体験学習”が行われている。6月、7月には“やぼきり”という焼畑地の整備を、8月には“火入れ”と“種まき”、さらに 10 月にはそこで育った蕎麦の収穫を小学生が体験する。そのいずれにおいても小学校の教員と親だけでなく、尾向地区の幅広い年代の住民が参加し子供と関わっていた。11 月の平日に行われる“焼畑収穫祭”は収穫した山の恵みを食する会であり、かつ子供焼畑体験学習での学びを子供たちが発表する場である。その日保護者である両親は共に仕事を休んで参加していた。母親たちは皆で食べる料理を準備し、高齢女性は子供たちに蕎麦の実を臼でひかせそば打ちを指導する。父親、地域の青年および高齢男性は収穫した蕎麦と共に食す猪をさばき、火をおこし

焼いていた。小学校の教員たちは尾向地区の文化や歴史について理解しており、住民と共にこの行事に参加していた。ここでは住民から「地域があるから学校がある(A1)(B5)」という声が聞かれる一方で「学校があるから地域がある(A1)(B5)」といった地域の学校に対する感謝の声も多く聞かれた。尾向小学校は〈住民も教員も一緒に地域資産を学ぶ学校〉であることが推察された。

「子供たちが立派に焼畑について発表できるのは先生たちのおかげ(B7)」、

「先生方も赴任ってきて、ここの焼畑や神楽といったものに興味を持ってくれて、自分も子供たちと一緒にになって体験できるということに喜びも感じてくれている(A3)」、

「尾向地区には4つの神楽があるが、校長先生、教頭先生以下先生全員が毎週来てくださいます。これは大変な事です。だから私たちも学校に参加しなくてはと思うんですね(B9)」、

「「来いよ」ではなく、「行きたい」というお互いの気持ちが交流になり繋がりになる。学校と地域、お互いの場所が「ここにいたい場所、楽しい場所」になる(B6)」

これらの事実や語り、単語群 (Included Terms) は《地域とともに継承する学校》という言葉で抽象化した。

5). 《地域を知る子供のローカルな知》

尾向地区の子供はどんな遊びをして、こここの環境についてどう思っているのかについて尋ねたところ、「今はゲームをする子もいますよ」との意見もありつつ、「ここでは自然と遊ぶ」と語る人が多く、幼い頃から雄大な自然環境の中で育ち、自分たちで“遊びを創る”ことを楽しみながら〈地域の自然環境に学ぶ子供たちの知〉を得ていることがうかがえた。

「山、川で自分たちの頭を使っていろいろな遊びを創ってきた(C2)」、

「身近に田んぼや畑もあるので 食べ物はこうやって人が手をかけて作ってるとか、山のなば(椎茸)採り、山菜のどれが食べれるとか、それも遊びだし勉強(F1)」、

「ここでは自然とか生き物がこういうものだと理解できる。食育の意味でも自然に学んでいる(B1)」、

また子供たちは〈地域の伝統文化に学ぶ子供たちの知〉を獲得しながら成長していく。神楽の継承をする中で子供たちは楽しみながら唄や太鼓あるいは舞といった日

本古来の芸能文化にふれると共に地域の歴史についても学んでおり、「誰が教えるのではなく、幼い時から太鼓の打つマネをしている(B5)」のように日常に伝統文化の存在がうかがえた。小学校行事である『子供焼畑体験学習』では尾向地区の児童館児(3歳～6歳)、小学生および椎葉中学校の2年生が毎年参加し、畑を焼く作業あるいは焼畑が自然環境に与える影響について子供自らが演者となり家族や地域住民の前で発表する。発表の中では皆が楽しめるよう笑いを多く交えつつ世界農業遺産に認定された焼畑農法の素晴らしさ、尾向地区で受け継がれている事の価値および環境保全に対する気付きが述べられていた。こここの子供たちは就学前の幼い頃から繰り返し、尾向地区の地域資産を楽しみながら学ぶ環境が整えられていた。「大人もそういう気質があるんですけれども、あの子たちは来てもらった人たちを笑わせたいとか、楽しませたいとか、とにかく笑ってもらったり喜んでもらったりすることに価値を見出しているんですよ。これは尾向独特なまじめさなんですよ(E4)」、

また親や地域の大人たちから指導を受ける子供は、地域資産の継承活動の中で皆が一体となり神楽を創ることの重要性と礼節について学んでいた。

「(神楽を)子供は必ず正座をしてみます。どんなに小さな子供でも神楽を見る時は正座というのが基本でそれが絶対です。それが崩れてしまうと神楽を舞っている神楽子たちが崩れてしまう。舞っている人たちのためにも見ている側も正座を崩さない。ぴちっとした空気の中でその空気をつくるのが緊張感につながり、集中力につながります(A6)」、

「上手く舞えなくてどんなに泣きながらやっていても、子供は自分から神楽をやりたいと言う(B3)」、

さらに神楽や焼畑などの継承の場は子供にとって保護者や保護者以外の人たちと一緒に遊ぶ場ともなっている。例えば尾向小学校の教育課程には青年団との交流会が組み込まれている。子供たちが中学校入学時から親元を離れ寮生活となり、高校入学時には離村しなければならない尾向地区では、近い歳のお兄さんあるいはお姉さんが傍にいない現状がある。小学校の生徒数も少ない(2018年度末現在28名)尾向小学校の子供たちにとって、青年団との交流は、少し歳の離れた身近なお兄さん、お姉さんとの交流である。その関係性は家族以外の青年を○○お兄(お姉)ちゃんと呼ぶ慣習に表れている。また子供達は青年達との交流を通して、地域に戻った若者の役割を知り〈地域の大人と遊ぶ子供たちの知〉を身につけていくことが推察された。

「尾向の子は兄弟じゃないのに〇〇兄ちゃんと呼んでいるから「親戚?」と聞くと、「違う、近所のお兄さんだよ」と答えていて不思議だった(D4)」、

「歳が離れていても子供の頃から遊んでもらっているから結びつきが強い。〇〇お兄ちゃんも帰ってきてているから自分も尾向に帰ろうかなって思った(D3)」、

「神楽の時期になると子供から大人まで集まって舞の練習をする。大人も子供も一緒という雰囲気が子供にとって、いいのではないかな。子供たちの口から「椎葉に帰ってきたい」という言葉が素直に出てくるから(B1)」、

これらの事実や語り、単語群 (Included Terms) は《地域を知る子供のローカルな知》という言葉で抽象化した。

6). 《“地域の子”が育つ地域》

尾向地区の子供の成育環境について問うと、親や家族からは「尾向では、子供の一人一人の性格を住民がわかってくれている」と語り、それ以外の人からは「尾向の子供は、大人の中で遠慮せずに過ごしている(C5)」、「子供らが、大人に対しても（安心して）自分の意見が言える環境がある(D2)」、「大人が飲み会をしていている傍で、子供たちが遊んでいる。それがここでは普通(D6)」、「尾向は地域の人が定期的に学校以外の場所で子供の活動を支援する活動が多い。活動する場ごとに子供たちは自分の立場をもつことができる(C1)」等の声が聞かれたことから、〈子供の居場所がある地域〉であることが考えられる。

また尾向地区は子供たちに対する〈家族、地域住民による伝え聞かせがある地域〉であるという語りも多く聞かれた。

「文集に「子は宝である」、「俺はお前（息子）のことを愛している」と書かれてあった。男親も子供への愛情をきちんと伝えている。他所ではあまり見たことがないのでもとても驚いたんです(E3)」、

「(尾向地区の大人たちは) 子供が小さいときから、神楽や焼畠もだけど自分たちが次は守らないといけないんだよっていうのを言い聞かせたり、見せたりとかしている(F4)(F6)」、

「山の苦労を知っていて、それでもそこがいいって思ってないと「戻れ」とは言えません。それで戻ってきた人をみるとまた上の人達の考えを継いでいるの。他の地区にはないことかも。自分の所をそう言えるのってすごい事です(F2)」、

「地区の良さ、後継者の大切さを子供の脳裏に残すっていうのかな。そんな風に言われて育った感じはある(D1)」、

「いつも皆から言われているから、小学生でも自分は大人になって椎葉に戻ってくるんだという気持ちが自然と出てくるみたい(A7)」、

また伝え聞かせによる受け身の立場でなく、家や地域に対する主体的な子供の意識について引き出そうと尾向地区の子供の“家の手伝い”について質問した。多くの人が「小さい頃から田んぼも畑も家族と一緒にやっていた」と話し「山の仕事をやるのは楽しいこともあるけど、大変」と語った。

「なば（椎茸）を育てるなら（山の中で）なば（椎茸）を運ばないといけないし、採らないといけないし・・・。他にも作業はあって、子供ながらにきつい作業だなと思った。でも大きくなったら、やっぱり（自分が戻ってきて）やらないといけないよなーと思うタイミングは結構ありました(E1)」、

「言わなくても良く手伝いをしてくれました。皆がやってるし人の手が足りないのは見てわかるから、自然と自分がしないとって思うんでしようね(B3)」、

「父親の山の仕事を見ていて、休みの日も（仕事を）一緒にしているから、「僕は大きくなったら牛の仕事をしたい」とか、「チェーンソーを使って仕事をしたい」とか、自然と口にしている(F1)」、

「焼畑収穫祭では、多くの子供が「大人になったら椎葉に戻りたい」、「この自然豊かな尾向を誇りに思う」って発表してくれます。それを聞くと、ぐっときます(B11)」これらの語りから、尾向地区は家の手伝いを通し山の仕事を家族と共にしながら子供が〈子供が自分の役割を知る地域〉であることが考えられる。

これらの事実や語り、単語群（Included Terms）は《“地域の子”が育つ地域》という言葉で抽象化した。

7). 《外部からの視点で互助が再構成される地域》

尾向地区では子供たちは中学生になると親元を離れ寮生活に入る。さらに椎葉村には高校がないため、高校入学と同時に離村することになる。そのため尾向地区の住民の多くが一度は地元を出るという経験をしている。尾向地区における近隣住民の繋がりについて「それまで当たり前にあった」、「家を出るまで、人の優しさや地域の絆の深さが特別なものって気がつかなかった」と話した者が多く、すなわち尾向地区

は〈離村したから気づく価値と役割がある地域〉であることが考えられた。

「隣近所が心配し合って、家族みたいに近い存在。私も自分の孫や子供のように地域の人たちが育ててくれた(A2)」、

「こここの環境で自分も子育てしたい。都会に出てそう思った(C2)」、

「戻って住んでこの地にいるからこそ守れる文化がある。今の私にとってそれがすごく大きい(C1)」、

また尾向地区は〈移入者だから見いだす価値と役割がある地域〉でもあることがうかがえる語りが聞かれた。

「“お金で買えない豊かさがいっぱいあるんだ” ということに気づいてくれる地元の人や活動が増えればいい。歳をとった方に話をする機会が多いので、もっと若い世代がお金で買えない土地の良さを解るためにはどうすればいいか考えている(C6)」、

「尾向の人は、地区の良さを口に出し、それが当たり前になっているのが凄い(G1)」

椎葉村には月に1回、常会という隣保班(自治公民館区の下部組織である実行組合と呼ばれる地域組織)の集まりがあり、以前は持ち回りで住民宅にて開催されてきたが、家に招く準備が大変であるため近年は集会所で行う地区が多くなった。しかし尾向地区では一人暮らしの高齢者の安否確認も兼ね、住民宅の開催の継続が保たれている。

「ここは若者が「〇〇のばあちゃん大丈夫かな?」と見守りも兼ねて家に行こうと。家に行けば一人暮らしの年配者も喜ぶからって。昔からの関係性がそうさせるのかな。すごい所だし素敵な人が育っているって思う(A6)」、

地区に中学校や高校がないという事情により、住民の多くが村からいったん外に出てから地元を振り返る経験があるため、客観的に地域の価値を再確認・評価できている可能性がある。また自分が移入者となった経験を住民の多くがもつからこそ地域では“当たり前”とされる事象、例えば「地元で食される食材の豊かさ」など地域に対する移入者の気づきを受け入れ、地域の価値の再構成に対し前向きである可能性がある。

これらの事実や語り、単語群 (Included Terms) は《外部からの視点で互助が再構成される地域》という言葉で抽象化した。

8). 《新たな地域愛着が育つ地域》

椎葉神楽の舞台に上がるのは古来男性のみであり、女性はあくまで後方支援する側であった。尾向地区の女性像について質問したところ「ここは女性でも山師（山林で伐採などを生業とする者）がおります。これが立派にやっています（B11）」、「神楽は、女性が舞台にのぼることは許されていなかったんですが、尾向では女性神楽をしましたよ（F6）」、「子供神楽もそうですが、女の子が帰ってきたいと思える楽しみがあった方がいいし。前は女性の先生も舞いましたし、女性も参加できる方がいい（B10）」といった語りが聞かれた。

また尾向地区で子供がいる世帯の多くが三世帯家族である。インタビュー対象者の母親の多くは村外から嫁いできた移入者であり、皆仕事を持っていた。椎葉村内の児童館の多くは3歳にならないと預けられず、尾向地区も同様である。3歳までは自宅で子供の世話をしなければならないが、祖父母が親の代わりに子供の世話をするなど出産後も母親が働く環境を家族が協力し創っていた。特に祖母は孫の人数が増えると勤めを辞め、孫の世話をを行うのが尾向地区の“当たり前”となっていた。移入者である母親にここで子育てについて質問したところ、「面倒みるのが当たり前よという感じなんですよ。ありがたいですよね（A4）（A6）（D6）」、「お父さん、お母さんが仕事頑張りなさいと押してくれた。仕事に行き始めてから椎葉での世界が変わり始めました。仲間が増えた（A4）」、これらの事から尾向地区は〈女性の参画の場と役割が拡大する地域〉であることが推察された。

一方で婚姻に伴い移入した者（Iターン者）は「最初はここでの暮らしは正直、窮屈でした。いつも見られている気がした。でも家族もだけど地区の人、皆が良くなってくれた。子供もいろんな人が抱いてくれて本当に子育ても助けられた（A7）」との語りもあった。地域の人づきあいの深さあるいは人間関係の近さについて土地の暮らしに慣れるまでは戸惑いがあったものの、育児等この地区での経験を増やすことで徐々に母親たちの気持ちが肯定的に変化したと考えられた。嫁いできたときの戸惑いについては複数名が語っていた。しかし「職場で相談したら、私もそうだったよと気持ちを解ってくれ、こう考えたらいいよとアドバイスてくれた。その辺りから、この人間関係が近すぎる社会が楽しくなり始めた（A4）」、「家族との時間はもちろんだけど、地域の人との時間が多いほど、繋がりが密になる（A2）」等の語りがきかれ、

村外から嫁いできた母親たちは仕事をもつなどして社会へ出ることで、妻、嫁あるいは母の立場だけでなく社会の一員として地域で楽しみや生きがいを持つことを可能にしていた。また尾向地区では I ターン者が焼畠、神楽、あるいは食文化などの継承活動に参加していた。一般的に日本社会は閉鎖的・排他的といわれるが、それらはわが国が島国であることに由来するとされる（網野 2000）。しかし尾向地区は高齢者も含む多くの住民が I ターン者や村外からのお嫁さんと交流しており、「私より、あの人の方が椎葉の食事、食材を良く知っていますよ（B2）」、「あの子たちは、本当に良くやってくれていますよ。一生懸命ね（B8）」、「子供のご飯もおやつもちゃんと作って、1 食分ずつ分けてチンするだけにして仕事に行く。えらいですよ（B3）」と評価する声が聞かれた。これらのことから、尾向地区は移入者という（よそ者も社会の一員となり仲間となる地域）であると考えられる。

住民に受け入れられている移入者たちは「不便さはある。戻りたいと思ったこともある。だけど尾向の人達に馴染ませてもらった。やっぱり尾向が好きなんですね（A6）」と言う語りを代表に地区への愛着を話す人が多かった。さらに「子供が小さい頃、じいちゃんから勉強は そんなにしなくていいよと言われていました。頭が良くなると地元に戻ってこなくなるといったことがあるんだと思う。でも私は子供には色々な世界を見て学力をつけてから椎葉に戻り、 椎葉のために活かして欲しいと思うんです（A5）」、

「椎葉村の椎茸は美味しいが栽培・収穫は大変な作業です。それをどう工夫するのか。それは外で勉強してこないと発展はしていかない（C3）」、

「椎葉の魅力はたくさんある。それをどう生かしていくかの教育が重要だと思う（C1）」等のこの地域を良くしたいからこそその地域の課題への気づきの言葉が聞かれた。これらの主体的な気づきからも（“地域のひと”となり地域愛着が芽生える地域）であること考えられる。

これらの事実や語り、単語群（Included Terms）は《新たな地域愛着が育つ地域》という言葉で抽象化した。

2.3.2. Cover term から Domain の導出

これまで導出された 8 個の Cover term 間の関連性を検討・集約し、Domain を導出した。さらに Domain の関連性を検討し Main theme を導出した（図 2-2）。まず 4 つの

Domain名と導出経過を記す。

1) 第1のDomain【互助】

椎葉村は“かでーり”のある村（椎葉村 2019）と表現される。急峻で狭小な地形の制約上、生活が困難な土地に暮らす集団にとって、“かでーり”すなわち、互助（労働力の交換）は必要不可欠なものであり、当たり前のものとして根付いてきたものと考えられる。伊藤（1995）によれば、文化人類学の基本概念の一つに”交換(exchange)“がある（伊藤幹治 1995）。交換は、友好関係を保つための関係者間の双方向のやり取りで、その意味での交換は”exchange”のみならず”communication”の意味をも包含する（田所 2018）。また平原は、「かつて日本の村は、田植えや冠婚葬祭など生産上・生活上の互助の関係を通して、同じ時間や場所をともに過ごし意識や価値観、思考などを共有し信頼感や一体感といった絆を築くことができた。このように村のつきあいは、必要不可欠である他者との互助関係と村への愛着が共存していた」と述べている（平原 2013）。機械化の進んでいなかった時代、この地区で“互助”は互いに助けあわなければ生きられない困難な生活に対する知恵であった一方で、その助け合いを家族、親戚あるいは隣近所といった地域が楽しく友好的に繋がるものとしてきた文化があることがインタビューからも確認できた。これらのことから尾向地区で行われてきた“互助”は、住民を繋ぐ絆の役割も果たしてきたことが考えられる。

わが国では近代化に伴い作業の機械化が進み、行政による公助のシステムが整備されたことで住民が互いに助け合う一般性互酬性を前提とした互助システムは衰退した（梅崎 2018）。尾向地区でも作業の機械化は進み、「労働力の交換」の機会は減ってきている。しかし尾向地区特有の自然条件や交通条件は、今もなお農業・林業などの機械化の恩恵を享受することを制限し、さらに住民に対する医療、物流あるいは防災などの公助のシステムの受給を妨げている。これが機械化により生活が激変した都市域あるいは平野部と大きく異なる点である。必然的に尾向地区では互助関係の構築・維持が住民たちの生存に不可欠なものとして残ったと考えられる。

しかし尾向地区における互助は残っただけでなく、若者たちによる再構成が機能していることも確認できた。Uターンで戻った若者達は、月に一度の地区の会合（常会）の自宅開催継続を希望していた。一人暮らしの高齢者の生活を心配し、見

守りの意味も含め同じ時間や場所を過ごすためである。幼い頃世話をしてくれた地域の大人と子供との関係性が今の高齢者と若者との関係性を創っていることが推察できた。移入者からは「地域の高齢者を思い行動を共にする」といった“互助”が主体的にできる地域の若者に対し肯定的に評価する声とそういった“互助”的意識を持つ若者を創り育てた尾向地区の地域社会に対して愛着をもつとの語りが聞かれた。これらのことから尾向地区は前述の平原が述べたようななかつての日本の村でなく、今現在の若い世代が外部で得た視点を持ち、尾向地区にある互助の価値を評価し、人口減少が進む中山間地域で共に生活する上で必要な互助の役割を再構成していることが考えられる。

こうした地域特性は【互助】という言葉でまとめることが出来る。

2) 第2のDomain【地域資産継承】

地域資産の継承は尾向地区の暮らしの歴史・文化を現在に伝えるものであり、地域全体で様々な世代の住民が参加することは地域の日常となっていた。地域特有の文化の存在は地域社会において住民の繋がりを育むだけでなく、自地域と他地域とを判別できるような社会個性となることを山下は指摘している（山下 2005）。継続的な生活の協働性は風俗や伝統、話し方、思考や生活の仕方、制度やしきたりなど様々な場面において共通性を発展させ、他の地域からみると個性ある様式と捉えられ、それが地域の独自性として認識される（山下 2005）。尾向地区の住民からは豊かな自然、焼畑あるいは神楽といった地域資産に対する“愛着”やこの地域の独自性（尾向らしさ）に対する愛着の語り、そして自分は「ここ（地区）の人である」といった地域アイデンティティの意識が感じられる語りが多く聞かれた。これらのことから、豊かな自然、焼畑、神楽など地域特有の地域資産を有することは、地域に対する愛着やアイデンティティを醸成する強力なツールとなりうることが考えられる。

地域に対する愛着およびアイデンティティという2つの意識は今回着目した地域に対する住民のシビックプライドを測る指標である（伊藤 2017）。地域愛着とは「人々と特定の地域を繋ぐ感情的な絆」(Hidalgo et al. 2001) であり、鈴木ら（2008）は地域の自然環境などを含む「風土」との接触頻度が愛着の規定因となることを示している。また密度の高い対人関係は安心感を与え、アイデンティティを確認する上で重要な意味を持つ事が報告されている（鄭ら 2012）。アイデンティティについて Erikson は、

「人が自分は何者かを認識する手段であり、私は私以外の何物でもなく唯一無二の存在であるという実存性によって自己認識するもの (what we think about ourselves) である」と定義している (Erikson 1950, 1973, 1974)。また R. D. Laing (1975) は他者との関係がなければ自己は存在しないことを示し、「他者との関係において、また関係を通して自己というアイデンティティは現実化される」とした。

世界農業遺産に認定された焼畑をはじめとして神楽などの地域資産の継承の場は、尾向地区において子供から高齢者まで様々な世代の多くの住民が交流する場でもあった。神楽は伝承される場所以外の住民も参加する。神楽は演目や舞が場所によって異なるため、自分の所属する場所の神楽継承への参画は自分の地区と他の地区との違いを確認することに繋がり、神楽が演じられる日に互いに住民が行き来することにより、地域間をも繋いでいる。それらの経験は他者と自分、他の地区と尾向地区を比較し自分が社会的な関係性の中でどういう位置のどういうものなのかを確認し、住民個人のそして地域住民という集団のアイデンティティを高めている可能性がある。

既存研究では、地域愛着は、地域参画および地域アイデンティティの醸成につながることが報告されている (鄭ら 2012, 豊田 2012)。また伊藤 (2017) はシビックプライドの指標間の関係について、「愛着」→「参画」→「アイデンティティ」といった時間的影響関係を示唆している (伊藤 2017)。これらの時間的な影響関係について、本研究の結果からは説明することは出来ない。しかしながら住民が地域そして地域資産に愛着をもちその継承に参画していくことによって地域のひととしてのアイデンティティを醸成し、その過程が人口減少の進む中山間地域で暮らす者にポジティブな意識をもたらす可能性がある。

こうした地域特性は【地域資産継承】という言葉で、まとめることが出来る。

3) 第3のDomain【子供の頃からの地域教育】

尾向地区の子供は“地域を学ぶ”ことの中で以下のような特徴的な経験をして育っていた。1点目は神楽の継承で地域の大人と交流しながら育つという経験である。継承の場では子供から高齢者まで様々な世代の他者と交流し稽古を受ける。5歳～6歳の子供は上手く舞う事ができず、泣きながらも稽古を受ける子供もいる。そういった中で地域の子供全員が所作や舞を一つずつ覚え、舞子に承認されるという経験を重ね育っていく。2点目は子供の頃から尾向地区の自然・環境・文化・価値・課題といった地域教育

を受けながら育つという経験である。尾向地区では住民が地域教育の重要性を学校に訴え、学校と地域が連携し、地域社会の将来を担う人材である“地域の子供”を育てるための地域教育が行われる。学校行事には子を持つ親は夫婦ともに仕事を休み、高齢者は地域の歴史の指導者あるいは蕎麦を挽く技術の継承者などとして、多くの住民が参画し地域教育の担い手になっているという現象も今回確認できた。

子供たちは焼畑農法と環境保全の関係や山の暮らしなどについて、大人と交流する中で伝承され、各人が属する時間的・空間的に限定される「世間」でいかに生きるかという人生の方向性を与える“ローカルな知”（前平 2007a, 2007b, 櫻本 2009）を得ていた。また“ローカルな知”を得ることで自地区の地域社会の現状や課題についてふれる機会が与えられ、地区社会の未来についても考える機会を得て育っていた。3点目は中学校入学と同時に寮生活となることによる親あるいは家族との別離の経験である。家族で過ごせる時間の少なさを悲しむ声も聞かれる一方で、限られた時間であるからこそ一緒にいられる間に子供に対する愛情や地域の素晴らしさを伝え聞かせることの重要性を住民は認識しており、伝え聞かせは尾向地区の日常となっていた。「あなた達はこの地域の宝で必要な人材である」、「いつかは戻っておいで」、「いつでも戻っておいで」といった直接的な伝え聞かせは子供たちに家および地域にとって“必要とされる自分”であることを認識させそれを意識し育っていた。

これらの学童期の経験は次の発達段階である青年期におけるアイデンティティの獲得に影響を与えてゆく可能性がある。Erikson(1959)は提唱した心理社会的発達理論の中で学童期（5歳～12歳）は心理社会的危機を「勤勉性 vs 劣等感」とする時期であり、家族から地域、学校と徐々に大きな集団に社会関係を広げる中で他者と自分を比較し、自分が社会的な関係性の中でどういう位置のどういうものなのか自分のアイデンティティに対する意識が明確になる重要な時期とした（Erikson 1959）。アイデンティティは自給できるものではなく、他者と自己の関係の中で、他者との相互作用や社会的な活動による属性の影響を受けて段階的に明快にしていくものと説明されている（鄭 2012）。つまりアイデンティティの確立には絶えず承認し肯定してくれる他者の存在が必要であると言える。これらのことと鑑みると、尾向地区の子供たちは大人達から学童期に集中して文化継承あるいは環境保全を伝え聞かせるといった地域教育を受けて育っている。これら「子供の頃からの地域教育」による学童期の経験が、人口減少が進む中山間地域にくらす子供にとって、自分は「地域の子供」であるというアイデンティティの芽

生えあるいは形成に影響を与えていた可能性が考えられる。

こうした地域特性は【子供の頃からの地域教育】という言葉で、まとめることが出来る。

4) 第4のDomain【女性・移入者の活躍】

中根は場を強調する日本の集団ではいったん村を離れ、再び戻るという事は社会的抵抗が非常に大きいものであり、田舎の閉鎖的な社会ではこれがさらに強いことを示唆している(中根 1967)。

しかし尾向地区の住民たちは、村外に出る者に「外の世界を知って来い」、「いつでも帰って来い」と伝え送り出し、また戻ってくる者だけでなく新たに入って来る者達も地区に必要な人として受け入れていた。また嫁として嫁いできた母親の子育て・就業の支援や女性山師の誕生、女性神楽の開催等あるいは女性の参画・活躍の場が拡大している等の地域特性も見られた。この地域特性が構築された背景には、尾向地区を先導する高齢者の影響が大きいことが考えられる。高齢者は地区の少子高齢化・人口減少が進む中でこの地区に戻ってくる人や新たに来る人を受け入れ、地域に必要なのは人と知恵であると語ってくれた。広田(2001)は「伝統文化の継承には、少なくとも農山村の住民自身がその価値を認識しその維持に努めるとともに、それを次世代に伝えまたそれに関心を持つ都市住民に伝えていく(逆に、都市住民から刺激を受ける)ことが大切である」と述べている(広田 2001)。また尾向地区の高齢者は経済的幸福だけではなく、自然を受け入れ個々に役割や生きがいを持ち、人々と助け合う生き方に価値があると語ってくれた。これらの考えは高齢者の地域に対する深い愛着と、これまで災害など様々な危機を住民らの互助で乗り越え、ここでの生活には何が必要なのかという問いに直面し経験を積み重ねた結果から得られたものであることが考えられる。この地区の高齢者は自身の経験に加え外部からの視点も取り入れ、持続可能な地域の創造のため地域の力となる女性や移入者の活躍を支援していることが推察された。

一方で人ととの距離が近い互助のある山の生活は移入者にとって慣れない場合もあり、移入当初は苦痛に感じる面があったことも語られていた。しかし移入者は住民が心を開き、関わりを持とうと自分に近づいてくれ、自分が出産、育児あるいは仕事といった地域での経験を積み重ねることで段階的に自分も他者に心を開き、地域に対する愛着を持ったことを語っていた。引地らは地域愛着や近所づきあいといった交流の影

響力は自然環境などの土地固有の要因や居住年数と比べても大きく、また地域での経験の質によって強く規定される（引地ら 2005, 2009）ことを示唆している。

村外から嫁いだ尾向地区の母親たちは子供たちに対し、椎葉村で新たな仕事を創出することへの期待とそのための教育の必要性を語っていた。香坂ら（2018）は地域住民が伝統知の価値に気づく仕組みづくりの重要性を指摘し、伝統知の「維持・保全」から、地域社会による「再生・創造」のアレンジへの変換を推奨している。このことを鑑みると、この地域で高齢者が積み上げてきた「いつでも帰って来い」と送り出し受け入れる地域特性は高齢者から次の世代、そして移入者たちにも伝達され、新しい経験が加わることにより更新され、地域社会による「再生・創造」を進めている可能性がある。

こうした地域特性は【女性・移入者の活躍】という言葉で、まとめることが出来る。

2.3.3. Main theme の導出

本研究では少子高齢化・人口減少が進む中山間地域に指定される椎葉村の中で、人口減少率が低く出生数が高い尾向地区を対象にインタビューやフィールドワークを行い、上述の如き過程を経てコード化された言葉を統合させ 4 つの Domain を導出した。これらの結果は中山間地域で人口減少率が低く、出生数が維持されている地域で暮らす者の、Leininger の述べるところの文化的価値観（思考、行為、意思決定あるいは生活様式に意味と秩序と方向性を与える、強力で指示的な力）であり、尾向地区の社会文化的な地域特性であると考えられる。また、これは尾向地区の神楽などの地域資産の継承と地域社会の密接な繋がりが表れた結果であるとも言えるだろう。

前述の 4 つの Domain より、少子高齢化・人口減少が進む中山間地域に指定される椎葉村の中で出生数が多く人口減少率が低い地域は、『厳しい山の暮らしの中で住民を繋ぐ絆の役割である互助が現在も残り、若者により再構成される地域であった。また、尾向地区特有の暮らしの歴史・文化を現在に伝える神楽や焼畠などの地域資産を有し、その地域特有の独自性は住民の地域に対する愛着や地域のひととしてのアイデンティティの意識を醸成していた。また互助、地域資産の継承活動を含め、住民は地区活動への参画が積極的で社会的な繋がりが強く、子供達は幼い頃から地域教育の一環として学校や地域で焼畠や神楽などの地域文化にふれ、地域の子供として育っていた。さらに、ここでは外から戻って来た U ターン者、I ターン者を地域の必要なひととして受け入れ、高齢者が先導し自身の経験に加え外部からの視点も取り入れ、持続可能な地域の創

造のため地域の力となる女性や移入者の活躍を支援している地域』であることが抽出された。このことは、少子高齢化・人口減少が進む中山間地域でありながら、地域の持続可能性を望み地域振興を願う住民が暮らす地域を象徴しているように考えられる。またそれは人口減少率が低く出生数が維持されるという結果をもたらしている可能性がある。

尾向地区のこの姿を「地域資産継承と子供の頃からの地域教育を軸に互助と愛着が廻る地域」との言葉で Main theme としてまとめ研究結果概念図（図 2-2）を描いた。

図 2-2 の如く、少子高齢化・人口減少が進む中山間地域で人口減少率が低く、出生数が維持される尾向地区は 1) 互助、2) 地域資産継承、3) 子供の頃からの地域教育、4) 女性・移入者の活躍といった 4 つの概念 (Domain) が住民のインタビューから浮かび上がった。そして住民の間で保持されている互助あるいは地域への愛着が高齢者をはじめとする住民から、外部から戻る者や新たに入った者へと伝えられ、再構成され、また地域特有の地域資産の継承や地域教育への参画を軸にアイデンティティが醸成されつつ住民が暮らしていると考えられる。

2. 4. 結語

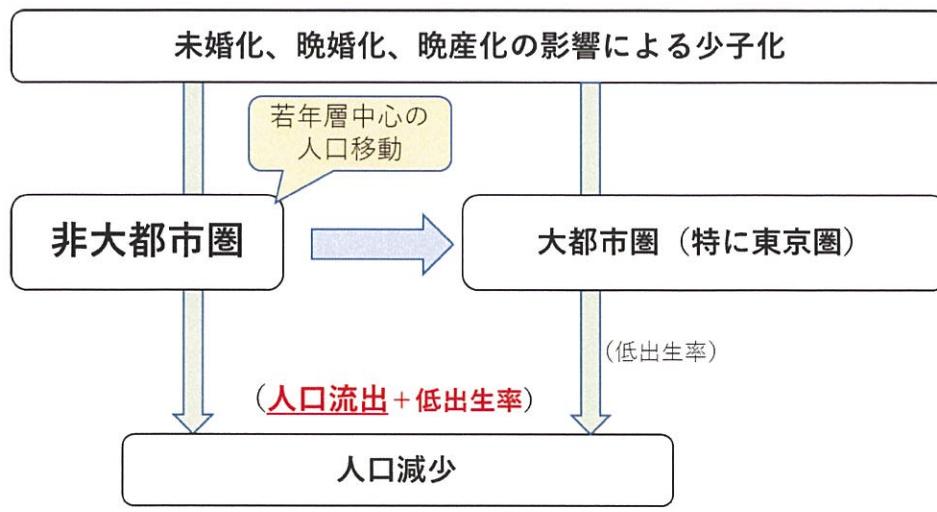
本研究は宮崎県椎葉村尾向地区を対象地として、中山間地域で今後さらに進行が予見される日本の少子高齢化・人口減少社会に課題解決にむけた基礎資料を得るために、生物学的な視点と文化的な視点を重ね持つ人類生態学的手法（大塚ら 2012）から、人口減少率が低く出生数が維持される中山間地域の社会文化的な特性（住民の暮らし、文化、思い）を把握することを試みたものである。

今回の研究で、フィールドワークやインタビューで得られた、「人口減少率が低く、出生数が維持される中山間地域の特性」についての文脈を文化つまり「人々が経験を解釈し行動を起こすために使う習得された知識」を記述する方法論である（Spradley 1980/2010）エスノグラフィーを用いて再編と統合を繰り返したところ、「互助」、「地域資産継承」、「子供の頃からの地域教育」および「女性・移入者の活躍」の 4 つの文化的価値と生活様式を導き出した。そして 4 つの Domain を「地域資産継承と地域教育を軸に互助と愛着が廻る地域」という言葉で上位概念とした。

2.5. 研究の限界

本研究の結果は中山間地域に指定されるその他多くの地域の中の一地域で得られた結果であり、当然ながら各々の地域特性や住民各個人の生活様式や価値観は一括りにできるのかとの疑問は残る。また今後の課題として、椎葉村内的一般化の可能性を検討する余地を残している。質的研究の目標（特に看護理論の中における）は特定の個人もしくは集団にとって意味のある研究結果を得ることであり、一般化は目標ではない（Leininger 1995）。しかしながら本研究の結果は尾向地区の神楽などの地域資産の継承と地域社会の密接な繋がりが表れた結果であり、椎葉村においては現在も 26 力所で神楽が継承されており、尾向地区と同様に他の 9 地区でも地域資産の継承は行われている。また調査地である宮崎県は県土の約 9 割が中山間地域に指定されており、椎葉村に近接する諸塙村や西米良村あるいは五ヶ瀬町などでも同様に神楽の継承が行われていることから、「地域資産の継承を有する」といった文化的環境が類似する地域では、本研究の結果は一般化できる可能性がある。本研究の結果が中山間地域人口減少の進行が緩やかであり出生数が維持される地区的社会文化的な地域特性を抽出したものなのか検証を深めるためにも他地域での検証が必要である。人間の「生き方」に深く関係する現在の人口特性の検証は中山間地域の少子高齢化・人口減少社会に対する課題解決につながる基礎的研究なりうる。その観点からも他地域における同様の質的研究の蓄積と議論が望まれる。

図表



(増田 2014 をもとに作成)

図 2-1 日本の人口減少の流れ

表 2-1 (地区別) 1995 年を 100 とした場合の 2018 年の人口比

自治 公民館区	1995年 人口数			2018年 人口数			1995年と2018年の比較※		
	総数	男	女	総数	男	女	総数	男	女
A地区	92	44	48	35	16	19	38.0	36.4	39.6
B地区	98	43	55	65	33	32	66.3	76.7	58.2
C地区	596	304	292	449	226	223	75.3	74.3	76.4
D地区	364	189	175	224	124	100	61.5	65.6	57.1
E地区	962	491	471	561	291	270	58.3	59.3	57.3
F地区	426	200	226	253	122	131	59.4	61.0	58.0
G地区	1100	549	551	801	391	410	72.8	71.2	74.4
H地区	334	167	167	197	96	101	59.0	57.5	60.5
I地区	181	90	91	128	62	66	70.7	68.9	72.5
J地区	203	99	104	89	41	48	43.8	41.4	46.2

*1995年を100とした場合の人口比 (1995年人口/2018年人口) × 100

表 2-2 インタビュー対象者の属性

分類	対象者と数	性別	平均年齢
A	尾向地区で子育てをしている者 7名	男 2 女 5	41.7 (36~48)
B	尾向地区で子育てを手伝う家族および地区住民 11名	男 6 女 5	63.7 (54~72)
C	未婚の U ターン者・移入者 6名	男 2 女 4	32.8 (27~41)
D	椎葉村役場の自治体職員 6名 (保健師 2名含む)	男 4 女 2	37.0 (24~44)
E	教育関連職員 4名 (教員 2名, 教育委員会職員 2名)	男 4 女 0	47.0 (40~53)
F	保育関連職員 6名 (保育士 5名, 自治体職員 1名)	男 1 女 5	43.5 (29~58)
G	看護師あるいは病院職員 2名	男 1 女 1	51.0 (46~56)

表 2-3 対象者の特性 (その 2)

		性別	年代			性別	年代			性別	年代
A	A1	男	40代	C	C1	女	20代	F	F3	女	30代
	A2	女	40代		C2	女	20代		F4	女	40代
	A3	男	40代		C3	男	30代		F5	女	50代
	A4	女	40代		C4	男	20代		F6	男	30代
	A5	女	40代		C5	女	30代		G1	女	50代
	A6	女	30代		C6	女	40代		G2	男	40代
	A7	女	30代		D1	男	30代				
B	B1	女	50代	D	D2	女	20代				
	B2	女	60代		D3	男	40代				
	B3	女	60代		D4	男	40代				
	B4	女	60代		D5	男	40代				
	B5	女	70代		D6	女	30代				
	B6	男	60代		E1	男	40代				
	B7	男	50代		E2	男	50代				
	B8	男	60代		E3	男	50代				
	B9	男	60代		E4	男	50代				
	B10	男	70代	F	F1	女	20代				
	B11	男	60代		F2	女	50代				

表 2-4 少子高齢化・人口減少が進む中山間地域で人口減少率が低く、出生が維持される地域特性

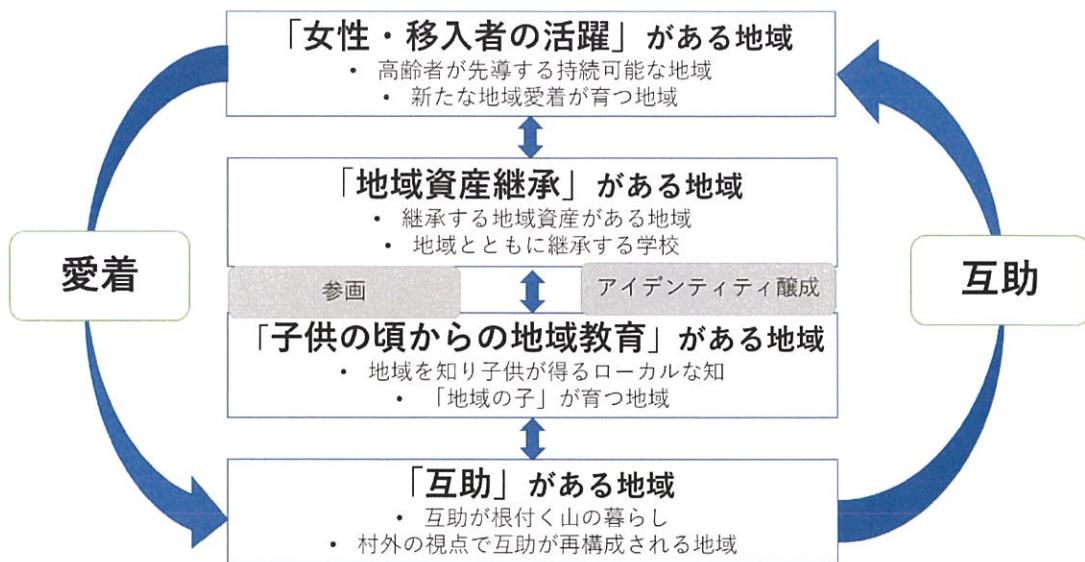
(Included terms から導かれた Sub cover terms&Cover term)

Cover term&Sub cover terms	Included terms
①互助が根付く山の暮らし	隣近所が仲良い作業するのを見て育った 何するにも大変な作業 ここで生きるためには助けあわないと暮らしていかない 皆、貧しかった 焚烟 ひえ・あわ 山菜機械化 自然災害 隣近所にわかる 結をむすぶ かてり 自給自足 自助 互助 雪深い村道しかない どこに出るにも2時間かかる病院が遠い コンビニがない スーパーマーケットがない 不便 不便だからいいこともある 心配になる 心配してくれる 声をかけてくれる 声がかけられる もらう あげる 助ける 助けられる お互い様 地域が家族のようなもの当たり前
②高齢者が先導し創造する地域	年配者 年寄りじいちゃん 曾じいちゃん スーパーマンのような 60~70代 スペシャリスト 年寄りの言うことを聞く 教える 挨拶 誰が言うわけではない 順序 家で一番偉い人 ひとの役に立つ 地域の幸せな暮らし 審らす楽しさ 豊かな暮らし 山村の自然 山の生き方・知恵 次世代に伝える役割 ここに居たい場所 楽しい場所 人は帰ってくる 帰りたいと思える居場所 何もすることができないと楽しくない 帰省者のための祭 31回目の祭 帰ってきた人を楽しませる 皆でやる 楽しさ 生業 尾向という地への愛着 思い地を守る 次の世代に残すには 先祖からここで生きてきた 役場に頼るだけでは守れない 山の暮らしの経験者 いざという時には間に合わない 常に自分たちで考える自分で守る 若者に伝える 台風 村道 寸断 傷病者搬送 ヘリポート 誘致 縦と横の繋がり 民家6戸埋没も全員避難 上下関係統率体制
③継承する地域資産がある地域	世界農業遺産 神楽 重要 無形 ひえつき節 審らしが反映 日本でこしかない 26か所で継承 全国でも珍しい曲目 芸能史 歌謡史 貴重な伝承 獣獮 神事 夜通し 山岳地帯の狩猟文化・焚烟文化 日常の延長 正月と同じ 子供から年寄りまで 地域全体で交流 住民一丸 ここの人間だから義務的なものではない 当たり前に集まる楽しいもの 練習創る 酒を酌み交わす 大好き 戻って来た理由の一つ 自分のところの神楽 大切なもの 父親は子供の師匠 教え子大人から子供へ伝える 言葉だけでは伝わらない 一緒に参加 仕事を休んでも参加 続ける 教えることは新たに出てくる 青年 参加地区のためにが当たり前 必ずいく 絶対戻る 約束 ここの人間 ここでなくてはだめ
④地域とともに継承する学校	小学校 部活動 遠征 地域行事はおろそかにできない尾向には尾向の文化 当然変えられない 先生へ要望 地区の子供 学校は地域の子供を育てる場 学校にこうあってほしい姿 地区の想い 盛んな意見 20年前から 子供焚烟体験学習会 やぼきり 火入れ 種まき 収穫 平日すべて参加 親保護者 住民 仕事は休む 薔薇 猪薔薇 山の恵み 皆で食す 白 薔薇打ち 教員も学ぶ 地域の歴史や文化 学校があるから地域がある 地域があるから学校がある 立派 先生のおかけ興味喜びを感じてくれる 神楽にも教員が参加 毎週4つの神楽 大事な事 「来いよ」ではなく「行きたい」「地域と学校」 お互いの気持ちが交流 お互いの場所 「ここに居たい場所、楽しい場所」
⑤地域を知る子供のローカルな知	ゲームもする 遊びを創る 自然と遊ぶ 自分の頭を使う 生き物はこんなものと理解する 身近 田んぼ 煙山川と遊ぶ 遊びは創る 食べ物は人が作っている なば(椎茸)の採り方 どれが食べられる山菜か それも勉強 食育 自然に学ぶ 噙太鼓 舞 楽しみながら 地域の歴史 日本最古の芸能文化にふれる 煙を焼く作業 焚烟が自然に与えるもの 子供が演者 環境保全 就学前 地域住民へ発表 児童館児 小学生 中学生 大人から指導を受ける 皆で一体となり舞台を創る 礼節 正座 基本の姿勢を崩さない びちっとした
⑥地域の自然環境に学ぶ子供たちの知	
⑦地域の伝統文化に学ぶ子供たちの知	
⑧地域の大人と遊ぶ子供たちの知	

Cover term&Sub cover terms	Included terms
	空気を創る 神楽子を崩さない 上手く舞えない 緊張感 集中力 泣きながら 自分から神楽をやりたい 兄弟じゃないけど ○○兄ちゃん ○○姉ちゃん 青年達との交流 地域に戻った 若者の役割 寮生活 兄弟がそばにいない時期 親戚なの？ 結びつき ○○兄ちゃんも帰ってきたから自分も帰る 子供から大人まで集まつての舞 大人も子供一緒に椎葉に帰ってきたい 尾向独特の真面目さ 来てくれた人を笑わせたい、楽しませたい 子供も喜んでもらうことに価値を見出す 素直な言葉
⑥ “地域の子”が育つ地域	子供一人一人の性格を理解 住民がわかっている 定期的 学校以外の場所 子供の活動を支援 安心 大人に遠慮しない子供 子供の居場所がある 自分の意見を言える 環境活動の場 次は貴方たち 自分の立場をもてる 伝え聞かせ 見せる 守ってね 次は自分たちが守る 子は宝 息子 娘 お前を愛している 男親も 子供への愛情 他にはない他では聞かない 山の苦労 それでもそこがいい 考えを継ぐ 後継者の大切さ 地区の良さ すごい事 子供の脳裏へ残す 言われて育った 皆から言われる 自然と出る 家の手伝い 小さい頃 田んぼの手伝い 家族と一緒に 山の仕事は大変 運ぶ・探る・作る なば（椎茸）を育てる 手伝い作業はたくさん 喜び 難しい 一人じや大変 子供ながらきつい作業 大きくなつたら自分が もどらなくてはいけない やらないといけない 父親の仕事を見て育つ 牛の仕事がしたい チェーンソーを使って仕事したい 自然と口にする 苦楽を共に 子供は椎葉へ戻りたい 大人になつたら椎葉に戻る 誇りに思う
15. 子供の居場所がある地域 16. 家族、地域住民による伝え聞かせがある地域 17. 子供が自分の役割を知る地域	
⑦ 外部からの視点で互助が再構成される地域	中学校から寮生活 親元を離れる 高校がない 離村の経験 気づく尾向の価値 自分の役割 隣近所 心配し合う家族みたい 地域の人から育ててもらった 都会に出てから思った自分もこの環境で子育てを 近い存在 戻って住んで この地にいるからこそ 私の中で大きいこと 守れる文化 地元の人 当たり前 お金で買えない豊かさ 活動を気づいてもらう 土地の良さ 解るためどうすればいいか考える 若者○○のばあちゃん大丈夫か？ 関係性それは当たり前のこと 素晴らしい すごい 常会 隣保班 地区の良さを口に出す 持ち回り 住民宅開催集会所 一人暮らしの高齢者の安否確認 繼続の訴え 年寄りを喜ばせるため 昔からの関係性がそうさせる 若者と高齢者見守り 素敵な人が育っている・人を創っている
18. 離村したから気づく価値と役割がある地域 19. 移入者だから見いだす価値と役割がある地域	
⑧ 新たな地域愛着が育つ地域	三世帯家族 母親 嫁 村外から嫁いだ移入者 共働き仕事をもつている 3歳まで自宅で世話 児童館 預けられない 祖母が子供の世話 母親支援 孫が増えると祖母が仕事を辞める 尾向の当たり前 家から地域社会に出る 妻、嫁、母だけでなく一人の人 地域での生きがい 地域での楽しみ Uターン者 よそ者 社会の一員 最初は窮屈 見られている気がした 帰りたい 何度も 家族、地域の人の協力、皆が良くしてくれた いろんな人が関わる 子供を抱いてくれた 子供をかわいがってくれた 皆に助けられた 仕事に出て世界が変わる 蓦然しが変わる 地域の仲間増えた なじませてもらった 地域の人との時間が増えて繋がりが密になる 人間関係が近すぎる 近すぎる社会が楽しくなる 女性山師 女性神楽 女性の活躍 女性も楽しく 受け入れる 認める Uターン者も移入者も参加する継承活動 皆が参加する 地域活動、社会教育 高齢者も新旧含めた住民の交流 主体的な気づき 深まる愛着 ここ（地域）のひと 地域を創るここで活躍する人へ 勉強しなくても良いは違う 子供たちへの思い 願い いろんな世界をみて学力をつける 椎葉に活かす 椎葉の発展 椎茸の栽培収穫をどう工夫するか 外での勉強 活用 椎葉の魅力 どう生かすかの教育 母から子へ繋ぐ
20. 女性の参画の場と役割が拡大する地域 21. よそ者も社会の一員となり仲間となる地域 22. “地域のひと”となり地域愛着が芽生える地域	

表 2-5 少子高齢化・人口減少が進む中山間地域で人口減少率が低く、
出生が維持される地域特性
(Sub cover terms から導かれた Cover term)

Cover term	Sub cover terms
①互助が根付く山の暮らし	1. 山の急峻で狭小な地形での暮らし 2. 不便な生活環境が繋がりを結ぶ暮らし
②高齢者が先導し創造する地域	3. 年功序列の意識が残る地域 4. 地域が楽しい場所になる地域 5. 地域愛着が創る自治意識の高い地域
③継承する地域資産がある地域	6. 注目を集め自然・文化をある地域 7. 継承の場で地域全体が交流する地域 5. 継承の場で地域を学び続ける地域 9. 継承の場で地域愛着とアイデンティティが育つ地域
④地域とともに継承する学校	10. 住民が求める地域文化を大事にした学校 11. 住民も教員も一緒に地域資産を学ぶ学校
⑤地域を知る子供のローカルな知	12. 地域の自然環境に学ぶ子供たちの知 13. 地域の伝統文化に学ぶ子供たちの知 14. 地域の大人と遊ぶ子供たちの知
⑥“地域の子”が育つ地域	15. 子供の居場所がある地域 16. 家族、地域住民による伝え聞かせがある地域 17. 子供が自分の役割を知る地域
⑦外部からの視点で互助が再構成される地域	18. 離村したから気づく価値と役割がある地域 29. 移入者だから見いだす価値と役割がある地域 20. 女性の参画の場と役割が拡大する地域
⑧新たな地域愛着が育つ地域	21. よそ者も社会の一員となり仲間となる地域 22. “地域のひと”となり地域愛着が芽生える地域



【地域資産継承と地域教育を軸に互助と愛着が廻る地域】

少子高齢化・人口減少が進む中山間地域で人口減少率が低く、子供数が維持されている尾向地区的地域特性（各々複数個の Cover term を含む 4 つの Domain の関連を考え、最終的に「地域資産継承と地域教育を軸に互助と愛着が回る地域」という言葉で統一させ、Main theme とした）

図 2-2 研究結果概念図

第3章 中山間地域の社会文化的特性および住民のシビックプライドと 人口移動・少子化との関連

3.1. 諸言

中山間地域を含む地方域の少子高齢化・人口減少の進行は、未婚化、晚婚化あるいは晚産化の影響による少子化のみならず、若者を中心とした都市域への人口移動が大きく関与しており（増田 2014）、またそれは地域差を伴っている（総務省 2015）。調査地である椎葉村においても村内 10 自治公民館区（以下 地区）での少子高齢化・人口減少の度合いには差がみられる（椎葉村 2015）。

第2章では少子高齢化・人口減少の進行が穏やかであることと関係のある新たな因子を検討することを目的に、中山間地域に指定される椎葉村の中で行政施設が集まる地区を除き、最も人口減少率が低く子供数(0～4歳)が多い尾向地区を調査地とし、現在の人口特性は人間の「生き方」に深く関係する（大塚ら 2012）という生物学的な視点と文化的な視点を重ね持つ人類生態学的手法から、暮らす者の文化的価値観（思考、行為、意思決定あるいは生活様式に意味と秩序と方向性を与える、強力で指示的な力）（Leininger 1995）すなわち地域特性を質的に検討した。その結果、椎葉村内で最も人口減少率が低く出生数が高い尾向地区は『厳しい山の暮らしの中で住民を繋ぐ絆の役割である互助が現在も残り若者により再構成される地域であった。また尾向地区特有の暮らしの歴史・文化を現在に伝える神楽や焼畠などの地域資産がそこにはあり、その地区の独自性は住民の地域に対する愛着や地域のひととしてのアイデンティティの意識を醸成していた。また互助あるいは地域資産継承活動を含め住民は地区活動への参画に積極的で社会的な繋がりが強く、子供達は幼い頃から地域教育の一環として学校や地域で焼畠や神楽などの地域文化にふれ地域の子供として育っていた。さらにここでは外から戻って来たUターン者のみならず新たに入ってきた移入者をも地に必要な人として受け入れ、高齢者が先導し自身の経験に加え外部からの視点も取り入れ、持続可能な地域の創造のため地域の力となる女性や移入者の活躍を支援している地域』であった。椎葉村内で人口減少率が低く出生数が多いこの地区的特性をインタビュー調査から概念化するうえで「地域資産継承と地域教育を軸に互助と愛着が廻る地域」とい

うテーマが既成され、【互助】、【地域資産継承】、【子供の頃からの地域教育】および【女性・移入者の活躍】といった4つのDomainが抽出された。また、4つのDomainは8つのCover term、22のSub cover termsで構成され、その指標の中には、地域に対する【愛着】、【アイデンティティ】および【参画】といった伊藤（2017）が示したシビックプライド概念の指標が含まれていた。第2章で得られたこれらの指標は椎葉村の中で人口減少率が低く出生数が多い地区において得られた結果であることから我々はこれらの指標が椎葉村内の少子高齢化・人口減少の地域差と関係のある因子ではないかとの仮説をたてた。

そこで本章では仮説検証のために以下の2点を検討した。

- 1) 第2章で検討した人口減少率が低く出生率が維持されている地区の特性（以下、中山間地域振興特性とする）の指標である【互助】、【地域資産継承】、【子供の頃からの地域教育】および【女性・移入者の活躍】の相互関係を整理したうえでこれら4つのDomainの意識に関する尺度開発を行いそれらと中山間地域で暮らす人々の個人属性、人口移動あるいは少子化との関連
- 2) 定住・交流人口の増加との関連が期待されるシビックプライドの概念を用いた既存のシビックプライド尺度（伊藤 2017）を用いそれと中山間地域で暮らす人々の個人属性、人口移動あるいは少子化との関連

3.2. 研究方法

3.2.1. 研究デザイン

横断的調査研究

3.2.2. 調査期間

2018年7月～8月

3.2.3. 対象および調査方法

調査は無記名式自記式質問紙により調査対象者、調査紙の配布および回収方法につ

いては自治体と公民館区長会にて協議を行った。協議の結果、椎葉村全体の特性を抽出するため椎葉村内全 10 地区に居住する 19 歳以上の全員（1227 世帯、2427 人）を対象とした。調査紙には研究者、椎葉村村長、椎葉村教育員会教育長および椎葉村公民館連合会長の連名による依頼文を添え、各地区長から下部組織である各組合長を通して各世帯に 2018 年 7 月に配布し、記入済の調査紙は各組合長により 2018 年 8 月末日までに回収された。

3. 2. 4. 質問票調査内容

1) 基本的属性

居住地区、性および年齢に加え個人の社会的状況と中山間地域振興特性およびシビックプライド指標との関係を検討するため、修学状況、職業および所得を問うた。また個人のもつ人間関係や社会関係の質や広さおよび居住地区に対する意識の違いと中山間地域振興特性およびシビックプライド指標との関係を検討するため、配偶者の有無、結婚年数、同居家族数、子供数、育児協力の有無（家族、家族以外）、地区活動への参加状況、U ターンあるいは I ターンなど居住移動歴の有無とそれに関連する項目および暮らしの困難さの有無とその内容を問うた（表 3-1）。

2) 「中山間地域資産継承」尺度に関する質問項目

これまで個人を対象とした地域資産継承を含む地域振興の意識に関する尺度開発は行われていない。第 2 章の調査結果である逐語録をもとに【互助】、【地域資産継承】、【子供の頃からの地域教育】あるいは【女性・移入者の活躍】といった中山間地域振興に関する住民の潜在意識を問う質問項目の検討を行った。その基準は①項目の表現を椎葉村住民に理解可能なものにする、②一部の年代における特有の表現を修正し一般性を持たせる、および③内容の重複を避ける、の 3 点とし、役場職員や住民との検討を経てその結果 20 項目の中山間地域振興質問項目を作成した（表 3-2）。最終的に地区長会で 20 間の質問項目が【互助】、【地域資産継承】、【子供の頃からの地域教育】あるいは【女性・移入者の活躍】といった中山間地域振興に関する住民の潜在意識を問

う項目として妥当かどうかの確認をしてもらい質問項目とするとの承認を得た。これらの合計20項目は全て5件法（1. そう思わない 2. どちらかといえばそう思わない 3. どちらでもない 4. どちらかといえばそう思う 5. そう思う）で回答してもらうよう作成した。

3) 「シビックプライド」尺度の選択に関する質問項目

シビックプライドについては国内外の多様な文献をレビューし作成され信頼性および内的整合性も確証が得られている伊藤（2017）が開発した尺度を用いた（表3-3）。伊藤（2017）が作成したシビックプライド尺度は【地域参画】、【アイデンティティ】、【忠誠的愛郷心】および【地域愛着】の4つで構成されている。【地域参画】については政治参加と市民としての姿勢に関する研究の尺度を用いている（Gastil et al. 2010）。【アイデンティティ】については、愛国心と政治参加に関する研究から国家を地域に置き換えた尺度（Huddy et al. 2007）およびスポーツファンの地域愛着とスポーツ観戦者行動に関する研究の尺度を用いている（二宮 2010）。【忠誠的愛郷心】については組織市民行動に関する研究の中から“組織”という単語を“地域”に置き換えた尺度（Wysong et al. 2009、Groothuis et al. 2014）および前述した二宮のスポーツに関する研究（二宮 2010）を参考に作成した尺度を用いている。【地域愛着】については鈴木ら（2008）が行った地域愛着に関する研究から地域愛着（選好）、地域愛着（感情）に関する尺度を3つずつおよび地域愛着（持続願望）2つを選択し作成している。「シビックプライド」尺度は合計20項目を全て5件法（1. そう思わない 2. どちらかといえばそう思わない 3. どちらでもない 4. どちらかといえばそう思う 5. そう思う）で回答してもらうよう作成されている。

3.2.5. 分析方法

質問紙で得られたデータの解析はSPSS Statistics 23およびSPSS Amos 25 Graphicsを利用した。

1). 個人属性

本研究では現在中山間地域が含まれる非大都市圏の少子化、人口減少に影響を与える

因子として若者の人口移動に着目した。また近年注目される女性の生産年齢と称される15-49歳の人口に着目し、対象者を19-49歳、50-64歳および65歳以上の3つの年齢区分に分類した。そのうえで性別、年齢、Uターン・Iターンなど居住移動歴の有無、修学状況、職業、所得、配偶者の有無、結婚年数、同居家族数および子供数などの個人個人属性の変数の差について χ^2 検定、一元配置分散分析を用い検討した。また育児協力（家族、家族以外）の有無、地区活動への参加頻度や参加意欲の高低および暮らしの困難さの有無といった個人を取り巻く社会的状況を表す変数の差を2値応答ロジスティックモデルを用い検討した。

2). 中山間地域振興尺度の開発

「中山間地域振興」の意識に関する尺度を開発するためには、まず住民がどのような潜在意識から中山間地域振興に関する調査20項目に回答しているのか検討が必要である。そのため中山間地域振興尺度の20項目全てに解答を得ている者のみのデータのみ用い、20項目の得点分布から天井効果と床効果を確認し分析対象とする調査項目を決定した。決定した調査項目に対して最尤法・Promax回転による探索的因子分析法（伊藤 2017）を行い、中山間地域振興尺度の下位尺度を決定した。次にそれぞれの下位尺度全項目を回答している者の各下位尺度得点を算出し、それを用いて外的側面からの信頼性の検討のため下位尺度間の相関関係を検討し主要因子のCronbach α 係数を算出し内的整合性を確認した。最後に新たに開発した尺度に対し潜在変数間の因果関係を検討するため、Amos Graphics25を用い確認的因子分析法（小塩 2018）によりモデル適合度の解析を行った。

3). シビックプライド尺度の検討

伊藤が開発したシビックプライド尺度（伊藤 2017）は国内外の多様な文献をレビューし作成され信頼性および内的整合性も確証が得られているが、伊藤が行った調査は愛媛県今治市が対象地域であり本研究の対象集団とは様々な事情が異なることが予想される。そこで尺度構成の基本的な分析手法に則り（小塩 2018）探索的因子分析法を用いた。まず住民がどのような潜在意識からシビックプライド尺度20項目に回答してい

るのか検討するため、シビックプライド尺度 20 項目全てに解答を得ている者のみのデータを用い、20 項目の得点分布から天井効果と床効果を確認し分析対象とする質問項目を決定した。次に 20 項目に対して最尤法・Promax 回転による探索的因子分析法（伊藤 2017）を行いシビックプライド尺度の下位尺度を決定した。それを用いて外的側面からの信頼性の検討のため下位尺度間の相関関係を検討し、主要因子の内的整合性を確認するため Cronbach α 係数を算出した。

4). 中山間地域振興尺度、およびシビックプライド尺度と中山間地域で暮らす人々の個人属性や人口移動、少子化との関連

対象者の中山間地域振興尺度およびシビックプライド尺度の各下位尺度得点の正規性の確認には Shapiro-Wilk 検定を用いた。両尺度と回答者の個人属性との関連は相關分析および 2 値応答ロジスティックモデルにより検討した。家族の育児協力、家族以外の育児協力、地区行事の参加頻度あるいは参加意欲（積極性）に関しては 4 件法で得られた回答から対象者を高位群・低位群の 2 群に分け、2 値応答ロジスティックモデルにより各下位尺度得点の差を検討した。次に U ターン、I ターンあるいは移動歴なしといった居住移動歴によって、中山間地域振興下位尺度あるいはシビックプライド尺度下位尺度の意識に差があるのかを検討するため、回答者を U ターン群、I ターン群および移動なし群の 3 群に分類したうえで下位尺度得点平均値を一元配置分散分析にて検定し、Bonferroni 法による多重比較を行った。最後に地区の年少人口割合によって中山間地域振興下位尺度、シビックプライド尺度下位尺度の意識に差があるのか、さらにその意識の差は性別あるいは年齢層で差があるのかを検討するため 2018 年椎葉村住民基本台帳を基に 10 地区を年少人口割合高位群、中位群および低位群の 3 群に分類し性別、年齢区分別（19-49 歳、50-64 歳、65 歳以上）に分け、各下位尺度得点の平均値を一元配置分散分析にて検定し Bonferroni 法による多重比較を行った。

3.2.6. 倫理的配慮

本研究は東京医療保健大学ヒトに関する研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：院 29-23）。

調査開始にあたり椎葉村村長および村役場の担当職員に対し、研究目的・意義、研究方法および倫理的配慮および研究結果の公表について文書および口頭で説明を行った。次に 10 地区の公民館長会にて同様の説明を行い、椎葉村内で 19 歳以上の全村民を対象とした調査を実施することへの承諾を全地区長より得た。調査対象者には質問紙の表紙に調査目的と方法、匿名性の保持と目的以外にデータを使用しないこと、回答の部分的な拒否や研究の中途でも参加を拒否する権利が保証されていることおよび回収後は同意撤回が不可能であることについて説明する文書を記載し、質問紙の回答をもって研究協力への同意とみなした。

シビックプライド尺度の使用については開発者である伊藤に連絡し許可を得た。

本研究において、開示すべき COI 情報はない。

3.3. 結果

1120 部の回答(回収率 46%)を得た。うち有効回答部数は 1078 部(有効回答率 96%)であった(表 3-4)。回答者の平均年齢は男性 61.2 ± 16.0 歳、女性で 59.8 ± 16.3 歳であり、地区別平均年齢は男性 53.5 ± 18.1 歳から 69.9 ± 12.3 歳、女性で 57.4 ± 19.0 歳から 71.7 ± 7.6 歳と差が見られた。表 3-1 のとおり 10 地区人口に地域差がある。各地区的回収率をみると、概ね人口が少ない地区は回収率が高く、一方人口の多い地区は回収率が低い傾向にあった。

3.3.1. 基本的属性

19-49 歳、50-64 歳あるいは 65 歳以上の年齢区分で分類した対象者の属性について、表 3-5 に示す。男女ともに 65 歳以上の年齢区分の者(以下、65 歳以上群)が最も多く、19-49 歳の年齢区分の者(以下、19 歳-49 歳群)が最も少なかった。回答者を男女別みると 19-49 歳群は女性の割合が 52%と高いがその他の層は男性の割合が高く、年齢区分と男女の人数分布との間に有意な関連がみられた(χ^2 検定, $p < 0.01$)。居住移動歴のない住民は 19-49 歳群では 38%に留まるのに対し、65 歳以上群では 84%を占めた。年齢層区分が上がるごとに U ターン者あるいは I ターン者の割合は低くなり、年齢区分と

居住移動歴との間に有意な関連がみられた (χ^2 検定, $p<0.01$)。65 歳以上群では中学校卒業の割合が 64%を占めるが 50-64 歳群では 17%および 19-49 歳群では 3%と年齢層が下がると共にその割合が下がり、年齢区分と修学状況との間に有意な関連がみられた (χ^2 検定, $p<0.01$)。50-64 歳群と 65 歳以上群では農林水産業に従事する者の割合がそれぞれ各年齢区分内の 26%を占めたが、19-49 歳群では約 11%に留まり年齢区分と職業との間に有意な関連がみられた (χ^2 検定, $p<0.01$)。65 歳以上群では所得が 200 万円/年未満と回答した者の割合は 82%を占めるが 50-64 歳群では 49%、19-49 歳群では 36%と年齢層が下がると共にその割合が下がり、年齢区分と所得との間に有意な関連がみられた (χ^2 検定, $p<0.01$)。配偶者ありと答えた者の割合は 19-49 歳群で 64%、50-64 歳群では 80%、65 歳以上群では 76%であり年齢区分と配偶者の有無との間に有意な関連がみられた (χ^2 検定, $p<0.01$)。

育児世代である 19-49 歳群で「家族からの育児協力がある」（頻繁にある（48%）およびたまにある（33%）の和）と答えた者の割合が 81%であり、また「家族以外の地域での育児協力がある」（頻繁にある（14%）およびたまにある（46%）の回答の和）と答えた者の割合が 60%であった。いずれの回答も年齢区分が上がるとともにあると答える者の割合は減る傾向にあり、家族からの育児協力および家族以外からの育児協力の意識はそれぞれ年齢区分との間に有意な関連がみられた (χ^2 検定, $p<0.01$)。地区活動へ「予定が合えば参加する」と回答した者の割合は全ての年齢区分で他の回答と比較して最も高かった（19-49 歳群 64%、50-64 歳群 50%、65 歳以上群 58%）。「仕事を休んでも毎回参加する」と回答した者の割合は 50-64 歳群内では 24%、65 歳以上群内では 20%を占めたが 19-49 歳群では 12%に留まり年齢区分と地区活動の参加頻度に関する意識との間に有意な関連がみられた (χ^2 検定, $p<0.01$)。地区行事参加意欲（積極性）を問う質問については全年齢群において「当然のことだから」、「皆参加しているから」、「誘われたから」および「本当は参加したくない」の順で回答数が多かった。「当然のことだから」と回答する者の割合は 19-49 歳群では 44%、50-64 歳群では 58%、65 歳以上群では 68%と年齢区分が上がるとともに回答した割合が増える傾向にあり地区行事参加意欲（積極性）に関する意識との間に有意な関連がみられた (χ^2 検定, $p<0.01$)。暮らしの困難さが「ある」と回答した者の割合は 19-49 歳群で 30%、50-64 歳群では 24%、

65歳以上群で23%であり年齢区分との間に有意な差はみられなかった（ χ^2 検定, $p<0.01$ ）。暮らしの困難さが「ある」と回答した者に対しその内容を具体的に記述してもらった結果を地区別に表に示す（表3-6）。買い物の不自由さ、病院が遠い、道路が悪く交通が不便あるいは飲料水の確保が必要といった少子高齢化・人口減少が進む中山間地域に現在居住する者の生活環境を反映すると思われる回答がみられた。平均結婚年数は19-49歳群が12.9±8.0年、50-64歳群は32.0±7.3年、65歳以上は47.7±8.8年であった。65歳以上群は19-49歳群あるいは50-64歳群と比べ結婚年数が長く（平均47.7年）、年齢群間で有意な差がみられた（一元配置分散分析, $p<0.01$ ）。平均同居家族数は19-49歳群が3.9±8.0人、50-64歳群は3.2±7.3人、65歳以上群は2.7±1.4人であり、年齢群間で有意な差がみられた（一元配置分散分析, $p<0.01$ ）。平均子供数は19-49歳群が2.3±1.0人、50-64歳群は2.5±0.9人、65歳以上群は2.8±0.9人であり年齢区分との間に有意な差がみられた（一元配置分散分析, $p<0.01$ ）。

3.3.2. Uターン者・Iターン者の居住移動歴等

自分はUターン者であると回答した者は男性155名（全体の65%）、女性82名（全体の35%）であった（図3-1）。Uターン時の平均年齢は25.9±10.2歳であり、Uターン時の年代は21-30歳の者が男女ともに最も多く、続いて20歳以下が男女ともに多かった（図3-2）。Uターン後の経過年数を10年以下、11-20年、21-30年、31-40年および41-50年の5群に分けると男性は全ての群に20%程度（29人～34人）分布しており、女性は10年以下が24人（女性の28%）、31-40年が22人（女性の25%）を占めその他の群は11人～15人と10%台であった（図3-3）。Uターン前の職業は会社員が男女ともに最も多く、次いで学生が男女ともに多かった。Uターンの意思決定に影響を与えた理由上位3つを問うた結果、男性は「家業を継ぐ、家を守る（23.2%）」、「生まれ育った故郷だから（21.2%）」および「家族や親せきが望むから（17.0%）」の回答が多く、女性は「生まれ育った故郷だから（22.7%）」、「家族や親せきが望むから（17.5%）」および「家族や親せきと一緒に近くで暮らしたいから（16.6%）」の回答が多くかった（図3-4）。

自分はIターン者であると回答した者は男性28名（全体の22%）、女性97名（全体の

78%) であった(図3-5)。Iターン者の平均年齢は29.09±9.58歳であり、Iターン(移入)時の年代は21~30歳の者が男女ともに最も多く、続いて31~40歳の者が男女ともに多かった(図3-6)。Iターン後の経過年数は10年未満が最も多く、男性22人(男性の79%)、女性52人(女性の54%)、全体で74人(59%)と過半数を占めた(図3-7)。またIターン前の職業は男女ともに会社員が最も多く、続いて男女ともに公務員および学生が多かった。Iターンのきっかけについて、女性は68%(62人)が婚姻と回答し、男性は33%(9人)が転勤、次いで結婚が15%(4人)であった。また田舎暮らしに対する興味関心がIターンのきっかけであると回答したものは、男性が15%(4人)、女性が7%(6人)であった(図3-8)。

3.3.3. 「中山間地域振興尺度」と個人属性、人口移動あるいは居住地区の少子化との関連

1). 中山間地域振興尺度の構成

有効回答1078部のうち、703部が中山間地域振興尺度に関する20項目全てに回答していた。これらの中山間地域振興尺度20項目の得点分布にはいくつかの調査項目で偏りが見られた。しかしながら得点分布の内容に隔たりが見られた項目の内容を吟味した結果、いずれの調査項目についても中山間地域振興(椎葉村で最も人口減少率が低く、出生率が高い場所の地域特性)という概念を測定する上で不可欠なものと考えられたためすべての調査項目を以降の分析対象とした。次に決定した20項目に対して最尤法・Promax回転による探索的因子分析を行った。その結果十分な因子負荷量を示さなかつた6項目を除外し、再度最尤法・Promax回転による探索的因子分析を行った。最尤法・Promax回転後の最終的な因子パターンを表3-7に示す。

第1因子は5項目で構成されており「近所で助け合って作業をすることは、大事である」、「地区を皆が楽しめる場所にすることは重要だと思う」、「ご近所との日常的なお付き合いを続けることは大事である」、「町や地区の環境をよくするため、清掃等で協力しあうことは大事である」あるいは「1人暮らしのお年寄りを近所や地区で世話をすることは大事である」といった【互助】を想定した項目の因子量が高かったため【互助】を第1因子とした。第2因子は7項目で構成されており「神楽など地区文化の継

承活動に積極的に参加している」、「地区で行われるイベントや祭りの手伝いを積極的に行っている」あるいは「地区の環境保全活動に積極的に参加している」といった地域環境、文化・行事といった【地域資産継承】に係る項目に加え、学校と地域で協働する【子供の頃からの地域教育】を想定した「学校では地区の文化や歴史を大切にした教育をおこなってもらいたい」、「地区は地域の歴史や自然環境が学べる場所だと思う」あるいは「地区の素晴らしさを子供たちに積極的に伝えている」といった項目の因子量が高かった。そのため子供の頃からの地域教育が地域資産継承の一部分を担っていると捉えて【地域資産継承】を第2因子とした。第3因子は2項目で構成されており「地区は女性も活躍できる場所だと思う」あるいは「地区は移住者でも活躍できる場所だと思う」といった項目の因子量が高かったため、【女性・移入者の活躍】を第3因子とした。次に3つの下位尺度別に全項目を回答している者を対象として各下位尺度得点を算出し平均値を算出した結果、【互助】尺度得点 4.51 ± 0.64 、【地域資産継承】尺度得点 3.72 ± 0.8 および【女性・移入者の活躍】尺度得点 3.88 ± 0.97 となり、相対的に【互助】尺度得点は高く【地域資産継承】および【女性・移入者の活躍】尺度得点は低い値を示した。また外的側面から信頼性を検討するために下位尺度間の相関関係を算出した結果、3つの尺度は互いに有意な正の相関を示した（表3-7）。内的整合性を検討するために各下位尺度の Cronbach α 係数を算出したところ、それぞれ【互助】尺度得点が $\alpha = 0.920$ 、【地域資産継承】尺度得点が $\alpha = 0.867$ 、そして【女性・移入者の活躍】尺度得点が $\alpha = 0.722$ と十分な値が得られ、信頼性が高いことが確認された（表3-7）。新たに開発した中山間地域振興尺度得点の構造（潜在変数間の因果関係）を検討するため、Amos25 Graphics を用いて確認的因子分析を行いモデル適合度の解析を行った。3つの因子からそれぞれ該当する項目が影響を受け、すべての因子間に共分散を仮定したモデルで分析を行ったところ、適合度指標は $\chi^2(CMIN) = 500.080$ 、 $df = 74$ 、 $p < 0.001$ 、 $GFI = 0.901$ 、 $AGFI = 0.859$ 、 $RMSEA = 0.091$ であり、モデル適合度は高いと判断した。中山間地域振興尺度構造のパス図を図3-9に示す。パスに付された値は標準化されたパス係数で因果関係の影響の強さを示す。

2). 中山間地域振興尺度得点と個人属性との関連

正規性の検定（Shapiro-Wilk 検定）を行った結果【互助】、【地域資産継承】および【女性・移入者の活躍】の尺度得点について分布の正規性はみられなかった（全て $p<0.01$ ）。そのためこれらの尺度得点と個人属性との関連については Spearman の順位相関係数を用いて分析した。その結果を表 3-8 に示す。

【互助】尺度得点と年齢 ($r=0.23, p<0.01$)、結婚年数 ($r=0.22, p<0.01$)、子供数 ($r=0.13, p<0.01$)、家族以外の育児協力 ($r=0.12, p<0.01$)、地区行事参加頻度 ($r=0.16, p<0.01$) および地区行事参加意欲（積極性） ($r=0.39, p<0.01$) との間にそれぞれ有意な正の相関がみられた。また修学状況 ($r=-0.14, p<0.01$) および所得 ($r=-0.07, p<0.05$) との間にそれぞれ有意な負の相関がみられた。

【地域資産継承】尺度得点と同居家族数 ($r=0.11, p<0.01$)、子供数 ($r=0.09, p<0.05$)、家族の育児協力 ($r=0.17, p<0.01$)、家族以外の育児協力 ($r=0.22, p<0.01$)、行事参加頻度 ($r=0.30, p<0.01$) および行事参加意欲（積極性） ($r=0.39, p<0.05$) との間にそれぞれ有意な正の相関がみられた。

【女性・移入者の活躍】尺度得点と年齢 ($r=0.18, p<0.01$)、結婚年数 ($r=0.20, p<0.01$)、行事参加頻度 ($r=0.08, p<0.05$) および行事参加意欲（積極性） ($r=0.29, p<0.01$) との間にそれぞれ有意な相関がみられた。また修学状況 ($r=-0.17, p<0.01$) および所得 ($r=-0.10, p<0.01$) との間にそれぞれ有意な負の相関がみられた。

3). 中山間地域振興尺度得点に対する個人の社会的背景の影響

子供がいる群は子供がない群と比較し【地域資産継承】尺度得点が有意に高く (Odds ratio (以下:OR) は 1.5, 95% confidence interval (以下:, 95%CI) は 1.1-2.1, $p<0.01$)、配偶者がいる群は配偶者がいない群と比較し【地域資産継承】尺度得点は有意に高かった (OR1.9, 95%CI(1.4-2.4), $p<0.05$)。

家族の育児協力および家族以外の育児協力は 4 つの選択回答項目を協力のある群(頻繁にある、たまにある)と協力の無い群(ほとんどない、ない)に分け検討した。家族育児協力有の群は家族育児協力無の群と比較し【地域資産継承】尺度得点が有意に高く (OR1.9, 95%CI(1.4-2.7), $p<0.01$)、また家族以外の育児協力のある群は家族以外の育児協力のない群と比較し【地域資産継承】尺度得点が有意に高かった (OR1.5,

95%CI(1.1-2.1), $p<0.01$)。

地区行事の参加頻度は 4 つの選択回答項目を参加頻度の高い群（仕事を休んでも毎回参加する、仕事がなければ毎回参加する）と低い群（予定が合えば参加する、予定がなくても参加しない）に分け検討した。同様に地区行事の参加意欲（積極性）も 4 つの選択回答項目を高い群（当然のことだから、皆参加しているから）と低い群（誘われたから、本当は参加したくない）に分け検討した。地区行事の参加頻度の高い群は低い群と比較し【地域資産継承】尺度得点が有意に高かった(OR2.5, 95%CI(1.9-3.3), $p<0.01$)。また地区行事参加意欲（積極性）の高い群は地区行事参加意欲（積極性）の低い群と比較し【互助】尺度得点 (OR3.0, 95%CI(2.0-4.6), $p<0.01$)、【地域資産継承】尺度得点 (OR1.6, 95%CI(1.3-2.2), $p<0.01$) および【女性・移入者の活躍】尺度得点 (OR1.3, 95%CI(1.1-1.7), $p<0.05$) すべてが有意に高かった。

暮らしの困難感のある群は暮らしの困難感のない群と比較し【女性・移入者の活躍】尺度得点が有意に低かった (OR0.6, 95%CI(0.4-0.7), $p<0.01$)。

4). 中山地域振興尺度得点と居住移動歴との関係

回答者を U ターン群、I ターン群および移動歴なし群の 3 群に分類し下位尺度得点平均値を一元配置分散分析にて比較した。各群の「互助(n=909)」、「地域資産継承(n=700)」および「女性・移入者の活躍(n=910)」の尺度得点を表 3-10 に示す。一元配置分散分析による 3 群間尺度得点平均値は【互助】と【女性・移入者の活躍】において有意な差があった(互助($F(2, 941)=3.797, p=0.02$ 、女性・移入者の活躍($F(2, 941)=4.653, p=0.01$)。Bonferroni 法を用いた多重比較を行ったところ、U ターン群の【互助】尺度得点は移動歴なし群に比べ有意に低値であった。有意差はみられなかったものの I ターン群よりも U ターン群のほうが【互助】尺度得点は低値であった（図 3-10）。また I ターン群の【女性・移入者の活躍】得点尺度は移動歴なし群に比べ有意に低値であった。有意差は出なかったものの U ターン群よりも I ターン群の方が【女性・移入者の活躍】得点尺度は低値であった（図 3-11）。

5). 中山間地域振興尺度得点と自治公民館区年少人口割合との関係

2018年椎葉村住民基本台帳を基に自治公民館区10地区を年少人口割合高位群(年少人口割合 $\geq 15\%$:3地区)、中位群($15\% >$ 年少人口割合 $< 5\%$:4地区)および低位群(年少人口割合 $\leq 5\%$:3地区)の3群に分類し性別、年齢区分別(19-49歳、50-64歳、65歳以上)に分け、各下位尺度得点の平均値を一元配置分散分析にて比較した。各群の【互助(n=722)】、【地域資産継承(n=553)】および【女性・移入者の活躍(n=717)】得点尺度を表3-11に示す。【地域資産継承】尺度得点の平均値の群間差は19-49歳では男女共に有意であった(19-49歳男性群 $F(2, 94)=3.116, p<0.05$ 、19-49歳女性群 $F(2, 98)=4.870, p<0.05$)。Bonferroni法を用いた多重比較を行ったところ19-49歳群の男女共に【地域資産継承】尺度得点の平均値は、年少人口割合高位群が中位群に比べ有意に高値であった(図3-12)(図3-13)。また50-64歳男性群では【互助】、【地域資産継承】および【女性・移入者の活躍】全ての尺度得点の平均値の群間差が有意であった(互助 $F(2, 150)=4.219, p<0.05$ 、地域資産継承 $F(2, 94)=3.116, p<0.05$ 、女性・移入者の活躍 $F(2, 149)=4.575, p<0.05$)。Bonferroni法を用いた多重比較を行ったところ50-64歳男性群では【互助】、【地域資産継承】および【女性・移入者の活躍】全ての尺度得点の平均値が年少人口割合高位群が中位群に比べ有意に高値であった。また19-49歳群では【互助】、【地域資産の継承】および【女性・移入者の活躍】の尺度得点は全て男性より女性が高値であった。

3.3.4. 「シビックプライド尺度」と個人属性、人口移動あるいは居住地区の少子化との関連

1). シビックプライド尺度の構成

有効回答1078部のうち、943部がシビックプライド尺度に関する20項目全てに回答していた。これらのシビックプライド尺度20項目の得点分布にはいくつかの調査項目で偏りがみられた。しかしながら得点分布の内容に隔たりが見られた項目の内容を吟味した結果、いずれの調査項目についてもシビックプライドという概念を測定する上で不可欠なものと考えられた。そこで本調査では項目を削除せず、すべての調査項目を以降の分析対象とした。次に決定した20項目に対して最尤法・Promax回転による探索

的因子分析を行った。その結果十分な因子負荷量を示さなかつた 6 項目を除外し、再度最尤法・Promax 回転による探索的因子分析を行つた。最尤法・Promax 回転後の最終的な因子パターンを表 3-12 に示す。第 1 因子は 7 項目で構成されており、既存研究（鈴木ら 2008）で地域愛着（選好）、地域愛着（感情）とされていた「地域が好き」などの項目の因子量が高かつたため第 1 因子は【愛着】とした。第 2 因子は 4 項目で構成されており、地域アイデンティティを想定した項目の因子量が高かつたため【アイデンティティ】とした。第 3 因子は 3 項目で構成されており、参画を想定した項目の因子量が高かつたため【参画】とした。【忠誠的愛郷心】は本分析では削除された。これらの結果は伊藤が今治市で行った調査（伊藤 2017）とほぼ同様であった。伊藤は忠誠的愛郷心について地域に対する強い感情であるが時に排他的な感情に結びつくことがある（伊藤 2017）と述べており、椎葉村では地域に対するこうした感情が共通の因子となってないことがわかった。

次に 3 つの下位尺度別に全項目を回答している者を対象として各下位尺度得点を算出し平均値を算出した結果、【愛着】尺度得点 4.06 ± 0.79 、【アイデンティティ】尺度得点 3.43 ± 0.95 、【参画】尺度得点 3.24 ± 0.90 となり、相対的に【愛着】尺度得点は高いが【アイデンティティ】尺度得点はやや低く【参画】尺度得点はさらに低い値を示した。また外的側面から信頼性を検討するために下位尺度間の相関関係を算出した結果、3 つの尺度は互いに有意な正の相関を示した（表 3-12）。内的整合性を検討するために各下位尺度の Cronbach α 係数を算出したところ、それぞれ【愛着】尺度得点が $\alpha = 0.885$ 、【アイデンティティ】尺度得点が $\alpha = 0.797$ 、【参画】尺度得点が $\alpha = 0.736$ と十分な値が得られ、信頼性が高いことが確認された（表 3-12）。

2). シビックプライド尺度得点と個人属性の関連

正規性の検定（Shapiro-Wilk 検定）を行つた結果、【愛着】、【アイデンティティ】および【参画】全ての尺度得点について分布の正規性はみられなかつた（すべて $p < 0.01$ ）。そのためこれらの尺度得点と個人属性との関連については Spearman の順位相関係数を用いて分析した。その結果を表 3-13 に示す。

【愛着】尺度得点と年齢 ($r=0.22, p < 0.01$)、結婚年数 ($r=0.20, p < 0.01$)、子ども

人数 ($r=0.14$, $p<0.01$)、家族以外の育児協力 ($r=0.20$, $p<0.01$)、行事参加頻度 ($r=0.16$, $p<0.01$) および行事参加意欲（積極性） ($r=0.40$, $p<0.01$) との間にそれぞれ有意な正の相関がみられた。また修学状況 ($r=-0.20$, $p<0.01$) との間にそれぞれ有意な負の相関がみられた。

【アイデンティティ】尺度得点と年齢 ($r=0.29$, $p<0.01$)、結婚年数 ($r=0.27$, $p<0.01$)、子ども人数 ($r=0.15$, $p<0.01$)、行事参加頻度 ($r=0.09$, $p<0.01$) および行事参加意欲（積極性） ($r=0.27$, $p<0.01$) との間にそれぞれ有意な正の相関がみられた。また修学状況 ($r=-0.28$, $p<0.01$) および所得 ($r=-0.12$, $p<0.01$) との間にそれぞれ有意な負の相関がみられた。

【参画】尺度得点と所得 ($r=0.19$, $p<0.01$)、家族人数 ($r=0.09$, $p<0.01$)、家族以外の育児協力 ($r=0.14$, $p<0.01$)、行事参加頻度 ($r=0.18$, $p<0.01$) および行事参加意欲（積極性） ($r=0.31$, $p<0.01$) との間にそれぞれ有意な正の相関がみられた。

3つの尺度得点すべて、家族の育児協力との間には有意な相関関係はみられた。

3). シビックプライド尺度得点に対する個人の社会的背景の影響

2 値応答ロジスティックモデルを用い検討した結果を表 3-14 に示す。子供がいる群は子供がない群と比較し【アイデンティティ】尺度得点が有意に高く (OR1.3, 95%CI(1.0-1.6), $p<0.04$)、配偶者がいる群は配偶者がいない群と比較し【参画】尺度得点が有意に高かった (OR1.5, 95%CI(1.2-1.8), $p<0.01$)。

家族の育児協力および家族以外の育児協力は 4 つの選択回答項目を高い群（頻繁にある、たまにある）と低い群（ほとんどない、ない）に分け検討した。家族以外の育児協力のある群は家族以外の育児協力のない群と比較し【愛着】尺度得点が有意に高く (OR1.8, 95%CI(1.3-2.4), $p<0.01$)、【アイデンティティ】尺度得点は有意に低かった (OR0.8, 95%CI(0.6-1.0), $p<0.03$)。

地区行事の参加頻度は 4 つの選択回答項目を高い群(仕事を休んでも毎回参加する、仕事がなければ毎回参加する)と低い群(予定が合えば参加する、予定がなくとも参加しない)に分け検討した。同様に地区行事の参加意欲（積極性）も 4 つの選択回答項目を高い群（当然のことだから、皆参加しているから）と低い群（誘われたから、本当は

参加したくない)に分け検討した。参加頻度の高い群は地区行事の参加頻度の低い群と比較し【愛着】尺度得点 (OR1.4, 95%CI(1.1-1.8), $p<0.01$)と【参画】尺度得点 (OR1.4, 95%CI(1.2-1.8), $p<0.01$)が有意に高く、また同様に地区行事参加意欲(積極性)の高い群は地区行事参加意欲(積極性)の低い群と比較し【愛着】尺度得点 (OR2.5, 95%CI(1.9-3.3), $p<0.01$)と【参画】尺度得点 (OR1.6, 95%CI(1.3-2.0), $p<0.01$)が有意に高かった。

暮らしの困難感のある群は暮らしの困難感のない群と比較し【愛着】尺度得点が有意に低かった (OR0.6, 95%CI(0.5-0.8), $p<0.01$)。

4). シビックプライド尺度得点と居住移動タイプの関係

回答者をUターン群、Iターン群および移動なし群の3群に分類し、シビックプライド尺度得点の平均値を一元配置分散分析にて比較した。各群の【愛着(n=962)】、【アイデンティティ(n=962)】および【参画(n=984)】の尺度得点を表3-15に示す。3群間尺度得点平均値は【愛着】および【アイデンティティ】において有意な差がみられた(愛着 $F(2, 996)=8.0167$, $p<0.01$ 、アイデンティティ $F(2, 995)=19.410$, $p<0.01$)。Bonferroni法を用いた多重比較を行ったところ、Iターン群の【愛着】尺度得点は移動歴なし群に比べ有意に低値であった((図3-14))。またIターン群の【アイデンティティ】尺度得点は移動歴なし群およびUターン群に比べ有意に低値であった(図3-15)。一方で【参画】尺度得点では各群間に有意な差はみられなかったものの、移動なし群よりもUターン群が高値であった。

5). シビックプライド尺度得点と自治公民館区年少人口割合の関係

2018年椎葉村住民基本台帳を基に自治公民館区10地区を年少人口割合高位群(年少人口割合 $\geq 15\%$:3地区)、中位群($15\% >$ 年少人口割合 $< 5\%$:4地区)および低位群(年少人口割合 $\leq 5\%$:3地区)の3群に分類し、性別、年齢区分別(19-49歳、50-64歳、65歳以上)に分け、各下位尺度得点の平均値を一元配置分散分析にて比較した。各群の【愛着(n=921)】、【アイデンティティ(n=919)】および【参画(n=941)】の尺度得点を表3-16に示す。【愛着】尺度得点の平均値の群間差は、19-49歳女性群および50-64

歳男性群において有意な差がみられた（19-49 歳女性群 ($F(2, 128)=3.992, p<0.05$) 、 50-64 歳男性群 ($F(2, 155)=4.188, p<0.01$ ））。Bonferroni 法を用いた多重比較を行ったところ、【愛着】尺度得点の平均値は年少人口割合高位群が中位群に比べ、19-49 歳代女性群（図 3-17）および 50-64 歳男性群ではそれぞれ有意に高値であった。【アイデンティティ】尺度得点の平均値の群間差は 19-49 歳の男性群において有意であり ($F(2, 115)=3.397, p<0.05$) 、Bonferroni 法を用いた多重比較を行ったところ、【アイデンティティ】尺度得点の平均値は年少人口割合高位群が中位群に比べ有意に高値を示した（図 3-15）。【参画】尺度得点の平均値の群間差は 50-64 歳女性群において有意に高値を示し（参画 ($F(2, 114)=8.959, p<0.01$) ）、Bonferroni 法を用いた多重比較を行ったところ、【参画】尺度得点の平均値は年少人口割合中位群は高位群および低位群と比べ共に有意に高値を示した。また 19-49 歳群では【互助】、【地域資産の継承】および【女性・移入者の活躍】の尺度得点は全て男性より女性が高値であった。

3.4. 考察

3.4.1. 中山間地域である椎葉村の暮らしの現状

65 歳以上の者が男女ともに回答者数は多く、年齢区分間の人口割合に差がみられた（表 3-5）。各年齢区分の回答者数の性比に差はほとんどなく、これも 2018 年の椎葉村の性比が 1.008 であることから、回答を得た集団の属性は村全体の人口構成との隔たりは少ないものと考えられる。

65 歳以上群では移動歴なしと回答した者が 84%を占めた。椎葉村は村内に高校がないことから、子供たちは中学校を卒業後高校進学と共に離村をすることになるが 65 歳以上群で中学校卒業と回答した者はそのうち 64%を占めた。したがって 65 歳以上の者は、中学校卒業後離村せず椎葉村で暮らしてきた者が多いことが考えられる。

平成 27 年国勢調査（総務省 2015）によれば「農業、林業」および「漁業」から成る第 1 次産業に従事する者の割合は全国の 15 歳以上就業者の 4.0%にとどまるのに対し、椎葉村は農林水産業に従事する者の割合が 19-49 歳群でも 11%を占め、50-64 歳群あるいは 65 歳以上群ではそれぞれ 26%を占める。このことから農林水産業は地域を支えている重要な産業であることがわかる。

所得が 200 万円/年未満と回答した者が 50-64 歳群で 49%、65 歳以上群では 82% を占めた。平成 30 年国民生活基礎調査（厚生労働省 2018）によれば、世帯主の年齢階級別にみた世帯人員 1 人当たりの平均所得金額は 65 歳以上でも 222 万 1 千円であり、それと比べ椎葉村民の所得は低いと考えられる。しかし暮らしの困難さがあると回答した者は全体の 22% にとどまった。中山間地域特有の地理的条件や農業生産条件に加え、高齢化の進行により高齢者は体力面や健康面など生活上の不安が高まることが予想されたが、いずれの年齢区分でもこの回答者の割合に差はみられなかった。住民を対象に行ったインタビュー（第 2 章）において、「この地域の幸せな暮らしは、経済的幸福だけでは成り立たない」との住民の語りがあったが、これは一般的な椎葉村民の捉え方であることが考えられる。引地（2005）は、人々は地域に対する肯定的な認知から地域に対する肯定的な印象を形成しその印象が愛着を形成することを指摘している。地域を肯定的に捉える椎葉村の住民は地域愛着の意識が醸成されているのかもしれない。

配偶者の有無を回答した者は全体の 74% が「あり」と回答している。平成 27 年国勢調査（総務省 2017）によれば全国の男女別 15 歳以上人口の有配偶者割合は男性 61.3%、女性 56.6% であり、これと比べ本調査の回答者は高い有配偶者割合を示した。子供数も全年齢区分で平均 2 人以上であり、この数値は椎葉村が長年宮崎県内で高い合計特殊出生率を維持していること（椎葉村 2015）と矛盾しない。また同居家族の平均人数は 19-49 歳群で 3.9 人、50-64 歳群で 3.2 人と 3 人を超えており、19-49 歳群では家族からの育児協力があると回答したものが 81% を占めた。「令和元年版少子化社会対策」（内閣府 2019）によると、子育ての負担を助けてくれる人・場について、調査対象者の 54.8% が「自分の親または配偶者（パートナー）の親」と回答しているが身内の支援を受けられない環境にある子育て世帯も多いこともその中で指摘されており、椎葉村での家族による育児支援は国内の一般的な家庭と比べ充実しているものであることが考えられる。さらに「令和元年版少子化社会対策」の中では子育てを地域で複層的に支えていく体制を構築することの重要性が述べられているものの、子育ての負担を助けてくれる人・場所として「近所のひと」と回答する者は調査対象者の 6.8% に留まっている（内閣府 2019）。今回の椎葉村における調査では 19-49 歳群の 60% が「家族以外の育児支援がある」と回答している。これらの状況を鑑みると椎葉村は比較的結婚後に、

出産および育児を行うための家庭や地域の環境が整っていることが考えられる。

地区活動の参加頻度について「予定の有無にかかわらず参加しない」と回答した者の割合は、全年齢区分で最も低く、また地区活動の参加意欲（積極性）については、「（地区行事の参加は）当然のことだから」と回答した者の割合が全年齢区分で最も高かった。2011年に内閣府が行った国民生活選好度調査（内閣府2011）において、居住区での地域活動分野別にみた参加経験者の割合（調査対象者比）が最も高いのは「文化、スポーツ」および「まちづくり」で次いで「防犯、防災」であるが、どの活動も参加者は1割に達していない（内閣府2011）。これらのことから椎葉村は、地区行事の参加に村民が積極的であり、さらに主体的な参画の意識が強いことが考えられる。

3.4.2. 「中山間地域振興尺度」と個人属性、人口移動あるいは居住地区の少子化との関連

19歳以上すべての年代を含めた分析では【互助】、【地域資産継承】および【女性・移入者の活躍】の全てにおいて、地区活動の参加頻度が高いほど、参加意欲（積極性）が高いほど尺度得点は高値であった。これは中山間地域振興尺度が第2章で示された「積極的に地区活動に参加し、社会的繋がりが強い」という尾向地区の地域特性と同様の結果を示すものである。

【互助】と【女性・移入者の活躍】の尺度得点はそれぞれ配偶者が有り、年齢が高く、結婚年数が長いほど高値であり修学状況あるいは所得が低いほど高値であった。本研究の年齢区分別の属性をみると、最も年齢が高い65歳以上群は19-49歳群あるいは50-64歳群と比べ結婚年数が長く（平均47.7年）（ $p<0.01$ ）、中学校卒業割合が高く（中学校卒業と回答した者の割合が64%）（ $p<0.01$ ）、所得が低い（200万円/年末満と回答した者割が82%）（ $p<0.01$ ）。このことから65歳以上群は【互助】および【女性・移入者の活躍】の意識が高い傾向にあることが考えられる。したがって今回示された【互助】あるいは【女性・移入者の活躍】の規定因は老齢すなわち地域に居住した経験の長さであることが考えられる。またIターン群は移動なし群に比べ【互助】および【女性・移入者の活躍】の尺度得点が低値であった。前述のとおり、この2つの下位尺度は地域に居住した経験の長さが規定因となる可能性があり、本研究におけるIターン群は移入経

過年数が 10 年未満である者が 59%を占めることから、居住年数の短さがこの結果に影響を与えたことが予想される。平原（2013）は、「生産上・生活上の互助の関係を通して、同じ時間や場所を共に過ごした意識や価値観、思考などを共有し、信頼感や一体感といった絆を築くことができ、村のつきあいは、必要不可欠である他者との相互関係と村への愛着が共存している」と述べている（平原 2013）。これらのことから地域での社会的な経験を積んだ者や高齢者たちが【互助】あるいは【女性・移入者の活躍】の必要性を感じ、それらが地域に与える効果を期待している可能性がある。一方で暮らしの困難さがあると回答した者はそうでない者と比較し、【女性・移入者の活躍】の尺度得点は低値であった。この結果は人口減少や少子高齢化の進行が限界を超えて暮らしが困難を感じると回答した者にとっては、【女性・移入者の活躍】を前向きに捉えることが出来なくなる可能性が表出されているのかもしれない。

有意差はみられなかったものの【互助】の意識はUターン群よりIターン群の方が高値であった。これはUターン者回答者の女性割合が35%であったのに対しIターン者の女性割合は78%と高く、本研究では【互助】の意識は男性より女性が高いとの結果が得られていることから、両群の回答者の男女の割合の差が影響した可能性がある。また地元に戻った理由が「家族や親せきが望むから」（男性：17%（理由2位）、女性：17%（理由2位））との受け身的な意見も多かったUターン群とは異なり、Iターン群は婚姻による移住が59%（女性のみでは68%）を占めていた。その意思決定の差が【互助】の意識の差に影響を及ぼした可能性がある。

19歳以上のすべての年代を含めた分析では【地域資産継承】の尺度得点は配偶者を有する者、子供を有する者、家族の育児協力がある者および家族以外の育児協力がある者はそれぞれ有さない者と比べ有意に高値であり、一方で年齢、結婚年数あるいは居住移動歴との間に関連はみられなかった。これらのことから【地域資産継承】の尺度得点は家族関係や地域社会との繋がりなど現在の自分が置かれている環境や経験の質の高さが規定因となっている可能性があり、一方でその地域に居住した経験の長さは規定因とならず過去の居住移動歴が与える影響は小さいことが予想される。

年代別かつ性別に分類し検討した結果では子育て世代である19-49歳群において年少人口割合中位群あるいは低位群と比較し、高位群は男女ともに【地域資産継承】の尺

度得点が高値であった。椎葉村では地域での神楽などの地域資産継承や学校での地域教育などに子供と共に大人たちも携わる機会が多い。特に子を持つその親は機会が多くなるため、年少人口割合が高い群の【地域資産継承】の尺度得点が高値になったことが考えられる。知名度の高い歴史資産を整備し、それに関する学習を行うことで住民の愛着が高まることが示唆されている（引地ら 2009）。また地域教育効果の増進と地域資産の質の向上は共に地域資産の「実践者」としてのアイデンティティの形成を促しうることが示されている（小谷ら 2012）。これらのことから大人も子供も神楽という祭礼に参加し地域文化の歴史的価値を認知する地域教育を受けていることで、【地域資産継承】の意識が高まっている可能性がある。

次に【互助】、【地域資産継承】および【女性・移入者の活躍】全ての尺度得点は、19-49歳の年齢層において男性より女性が高値であった。本研究では I ターン者の女性の割合が 78%と高く、そのうち 68%が婚姻による移入（I ターン）と回答している。すなわち男性と異なり女性は、他自治体から婚姻に伴い移入した者が多く含まれる。したがって男性と比べ移入者が多く居住年数が短い女性の方が、【互助】、【地域資産継承】および【女性・移入者の活躍】の意識が高いことが示された。加えて椎葉村の地域資産を代表する神楽は代々男性が継承し女性は裏方として支える立場にある。これらのことから 19-49歳の女性は結婚、出産、育児あるいは家族や地域との繋がりといった地域での経験によって中山間地域振興の指標である【互助】、【地域資産継承】および【女性・移入者の活躍】の意識醸成を促進している可能性がある。

最後に男女全ての年齢層において対象者を年少人口割合高位群、中位群および低位群と分け比較した結果、【互助】の尺度得点は、男女全ての年齢層において年少人口割合中位群が低値であった。これは年少人口割合低位群に分類されている地区はすべて高齢化率が 5 割を超える過疎地域であり、そこでの集落存亡の危機感が地域に対する【互助】の意識を高めることに影響を与えている可能性がある。

3.4.3. 「シビックプライド尺度」と個人属性、人口移動あるいは居住地区の少子化と

の関連

全年代を含めた分析では【愛着】、【アイデンティティ】および【参画】の全てにおいて、地区活動の参加頻度が高いほどあるいは参加意欲（積極性）が高いほど各尺度の得点は高値であった。地域愛着が高い人ほど地区活動などの地域への活動に熱心であるであるとの報告は以前の研究にもあった（鈴木ら 2008、引地ら 2005, 2009）。また地域に【愛着】をもち、市民としての責任と役割の意識が芽生えて【参画】することで【アイデンティティ】を感じるようになる、すなわち【愛着】→【参画】→【アイデンティティ】という意識の影響関係(伊藤 2017)が示されているが、このスキームとも今回の結果は矛盾しない。従っていくつかの自治体による定住・交流人口の増加を期待し、住民のシビックプライドの醸成を掲げている取り組みは参画意識の向上という効果が得られるものと考えられる。

また【愛着】および【アイデンティティ】の尺度得点は中山間地域振興尺度の【互助】及び【女性・移入者の活躍】と類似しており、年齢が高いほど、結婚年数が長いほど、子供数が多いほど、それぞれ高値であり修学状況が低いほど高値であった。本研究の年齢区分別の属性をみると、最も年齢が高い 65 歳以上群の結婚年数(平均 47.7 年)は 19-49 歳群あるいは 50-64 歳群と比べ有意に長く ($p<0.01$)、また同年齢群の中学校卒業割合(64%)は他の年齢群に比べて有意に高かった ($p<0.01$)。これらのことから 65 歳以上群は【愛着】および【アイデンティティ】意識は他の年齢群に比べ高い傾向にあることが考えられ、【愛着】および【アイデンティティ】の規定因は老齢すなわち地域に居住した経験の長さであることが考えられる。また【愛着】尺度得点に関しては I ターン群が移動なし群に比べて有意に低値を示し、【アイデンティティ】尺度得点については I ターン群が移動なし群および U ターン群に比べ有意に低値を示した。前述のとおり、この 2 つの下位尺度は地域に居住した経験の長さが規定因となる可能性があり、本研究における I ターン群は移入経過年数が 10 年未満である者が 60%であることから、居住年数の短さがこの結果に影響を与えたことが予想される。地域愛着の規定因については年齢、居住年数であると報告されており(Brown et al. 2003, Hidalgo et al. 2001)、また老齢という属性がアイデンティティと関連するという報告もある(小谷ら 2012)。これらのことからも【愛着】および【アイデンティティ】は老齢および居住年数といつ

た地域に居住する経験の長さが規定因となりうることが考えられる。

各下位尺度と個人の社会的背景との関連を見た場合、家族以外の育児協力がある者、地区活動の参加頻度や意欲が高い者は低いものと比べ、【愛着】の尺度得点が有意に高く、子供がいる者はいない者に比べ有意に【アイデンティティ】の尺度得点が高かった。このことから【愛着】には家族以外の育児支援、地区活動の参加頻度や意欲が規定因となるが、【アイデンティティ】にはそれらは規定因とならず、子供の存在は規定因となることが考えられる。しかしながら暮らしの困難さがある者と回答した者はそうでない者と比較し、【愛着】の尺度得点は低値であることから、人口減少や少子高齢化の進行が限界を超え暮らしの困難さを感じる者は、地域に対する【愛着】を感じることが出来なくなる可能性があるのかもしれない。さらに年代別かつ性別に分類し検討した結果、子育て世代である 19-49 歳群の女性において、年少人口割合高位群が中位群に比べて【愛着】の尺度得点は有意に高値であった。先述の【愛着】には家族以外の育児支援、地区活動の参加頻度や意欲が規定因となりうるとの結果を考慮すると、育児を通した地域との繋がりが 19-49 歳女性において地域に対する【愛着】の意識を高める規定因となった可能性がある。また【アイデンティティ】の尺度得点は 19-49 歳男性において年少人口割合高位群が中位群に比べて有意に高値を示した。鄭ら（2012）は地域に対するアイデンティティへ影響を与える地域活動として「祭り」が重要であることを示唆しており、強制的なお付き合いより自発的なお付き合い・楽しいお付き合いが住民のアイデンティティ醸成を促すと報告している。椎葉村では現在でも 26 か所で神楽が伝承されており、一部の地域では子供神楽も舞われている。先述したように【アイデンティティ】には子供の存在が規定因となりうるとの結果も考慮すると、子供たちに神楽を教えるのは代々主に父親たちの役割であり、19-49 歳の年齢層の男性には父親が多く含まれていることから、子供のいる割合の高い地域は神楽の継承や地域教育における子供との関りを通して、地域に対する【アイデンティティ】の意識が醸成されている可能性がある。これらの結果は少子化だからこそ子供が地域にいることの重要性が示唆されたという可能性がある。

次に【愛着】あるいは【アイデンティティ】の尺度得点は、19-49 歳の年齢層においていずれも男性より女性の方が高値であった。女性の方が地域に対する【愛着】が高い

ことは既存研究（江口 2002）に同様の報告がある。しかし今回の調査では、I ターン者の女性割合は 78%と高く、そのうち I ターン女性の 68%が婚姻による移入（I ターン）と回答している。すなわち男性と異なり女性は村外からの婚姻に伴い移入した者が多く含まれる。今回の結果から、前述の中山間地域振興尺度と同様に男性と比べ移入者が多く居住年数が短い女性の方が【愛着】あるいは【アイデンティティ】の意識が高いことが示唆された。愛着形成において居住年数の長さ以上に地域との関わりの深さおよび地域での経験の質の高さが重要である（引地 2009）との報告もあることから、女性、特に 19-49 歳の女性は過去の居住歴や年数に関わらず、結婚・出産・育児等、地域との繋がりといった地域での経験を通して「シビックプライド」の意識が醸成される可能性がある。しかしながら椎葉村は今回の調査において 19-49 歳の女性で家族からの子育て支援があると回答した者が 82%、家族以外の育児支援があると回答した者が 60% に上る地域である。全国と比べ家族および地域との繋がりがある椎葉村だからこそ、母親世代の女性が居住移動歴や居住年数に影響されずにシビックプライドおよび中山間地域振興の意識が醸成されている可能性が考えられる。反対にそういった家族および地域の繋がりによる子育て支援が整った環境であれば、女性のシビックプライドおよび中山間地域振興の意識は醸成される可能性があるのかもしれない。最後に年少人口割合高位群、年少人口割合中位群および年少人口割合低位群と分けて比較した結果、19-49 歳群では男女すべて年少人口割合低位群より年少人口割合中位群が【愛着】、【アイデンティティ】あるいは【参画】の意識は低値であった。年少人口割合低位群に分類されている地区はすべて高齢化率が 5 割を超える過疎地域である。現在そこに暮らす 19-49 歳の者たちの集落存亡の危機感が地域に対する【愛着】、【アイデンティティ】および【参画】の尺度得点に影響を与え、年少人口割合中位群より高値となった可能性が考えられる。

3.5. まとめ

本章では中山間地域で人口減少率が低く出生率が高い地区の特性から開発した「中山間地域振興尺度」と伊藤（2017）が開発した、定住・交流人口の増加との関連が期待される「シビックプライド」概念の尺度を用い、中山間地域に暮らす人々との個人属性、

Uターンや移入などの人口移動あるいは居住地区的出生（少子化）との関連を検討した。得られた知見を以下に示す。

3.5.1. 「中山間地域振興尺度」と個人属性、人口移動あるいは居住地区的少子化との関連から得られた知見

- 1) 【互助】【地域資産継承】および【女性・移入者の活躍】の意識はすべて実際の参加頻度および参加意欲と正の相関がみられることから、これらの意識の醸成は参画意識の向上といった効果が得られる可能性がある。
- 2) 【地域資産継承】の意識は年齢、居住移動歴、居住年数が規定因とならず、子供や配偶者の存在、育児協力、地区行事の参加が規定因となることから、地域での経験の長さではなく、結婚、出産、育児および家族や地域との繋がりといった現在の経験の質によってその意識が醸成されている可能性がある。
- 3) 19-49歳の男性および女性は共に、年少人口割合高位群は中位群および低位群と比べ【地域資産継承】尺度得点が高い傾向にあり、地域での神楽などの地域資産継承や学校での地域教育などを通した子供との関りにより【地域資産継承】の意識が醸成されている可能性がある。また年少人口割合が高い地域に居住する19-49歳の者は、【地域資産継承】、【互助】および【女性・移入者の活躍】全て、男性より女性が尺度得点は高値であることから、19-49歳の女性は過去の居住移動歴や居住年数にかかわらず、結婚、出産および育児など地域との繋がりや地域での経験を通して【地域資産継承】、【互助】および【女性・移入者の活躍】の意識が醸成されている可能性がある。
- 4) 【互助】あるいは【女性・移入者の活躍】の意識は老齢という属性が大きく影響し、地域に居住した経験の長さが規定因となりうる。
- 5) 現在の暮らしに困難さがあると答えた者はない者と比較し【女性・移入者の活躍】の尺度得点は低値であることから、少子高齢化・人口減少社会が進行する中山間地域において、暮らしの困難さを解決するための自治体等の介入は【女性・移入者の活躍】の意識を向上させる可能性がある。

3.5.2. 「シビックプライド尺度」と個人属性、人口移動あるいは居住地区の少子化との関連から得られた知見

- 1) 【愛着】、【アイデンティティ】および【参画】はすべて実際の地区行事の参加頻度と参加意欲との間に正の相関をみられることから、いくつかの自治体による定住・交流人口の増加を期待し住民のシビックプライドの醸成を掲げている取り組みは参画意識の向上という効果が得られるものと考えられる。
- 2) 【愛着】および【アイデンティティ】は、年齢や居住移動歴によって差がみられ、地域での経験の長さが規定因となりうる。
- 3) 【愛着】には家族以外の育児支援、地区活動の参加頻度や意欲が規定因となり、さらに 19-49 歳の女性においては年少人口割合高位群は中位群と比べ【愛着】の尺度得点が高いことから、結婚、出産および育児など地域との繋がりや地域での経験を通して【愛着】の意識が醸成されている可能性がある。
- 4) 【アイデンティティ】には子供の存在が規定因となり、19-49 歳の男性においては年少人口割合高位群は中位群と比べ【アイデンティティ】の尺度得点が高いことから、19-49 歳の男性は神楽の継承や地域教育における子供との関りを通し、地域に対する【アイデンティティ】の意識が醸成された可能性がある。
- 5) 年少人口割合が高い地域に住む 19-49 歳群は男性より女性の方が【愛着】および【アイデンティティ】の尺度得点は高値であり、前述の中山間地域振興尺度と同様にこの年代の女性は過去の居住移動歴や居住年数に関わらず、結婚、出産、育児あるいは家族や地域との繋がりといった地域での経験によってシビックプライドの意識醸成を促進している可能性がある。
- 6) 現在の暮らしに困難さがあると答えた者はない者と比較し【愛着】の尺度得点は低値であることから、少子高齢化・人口減少社会が進行する中山間地域において暮らしの困難さを解決するための自治体等の介入は【愛着】の意識を向上させる可能性が示唆された。

3.6. 研究の限界

本研究で社会文化的な地域特性に注目し開発した中山間地域振興尺度および伊藤

(2017) が開発したシビックプライド尺度が、中山間地域の人口移動および少子化との関連の検討に用いられたのは今回が初めてである。各々の自治体では地域特性や住民各個人の生活様式は異なるため、他の地域でこれらの尺度を用い検討した結果は一様ではないことが予想される。今回用いた尺度が中山間地域の人口分析・評価の指標となるためには、他地域でも同様の検討を行い尺度の信頼性を検討し尺度の精度を高める必要がある。また本研究で分析した質問紙の回収率は 46% にとどまった。分析対象者は【愛着】、【アイデンティティ】および【参画】といった意識が比較的高い者である可能性は否定できず、椎葉村全体の現状を十分に抽出できていない可能性がある。正確な人口分析を行うには多くの人が回答しやすい質問紙の内容の検討や配布および回収方法の検討と改良が必要であり今後の課題である。さらに今回得られた中山間地域振興尺度の意識およびシビックプライドの意識が今後、地区毎の出生数の増減・人口移動に影響するにしても、それが顕在化するのには時間がかかることが考えられるため、経時的な検討が必要であろう。そのためには長期的な視点で自治体と協働し人口分析を行っていくことが必要であると考えられる。

図表

表3-1 分析に用いた個人属性に関する質問項目

		区分
年齢	平成30年4月1日現在における満年齢	
性別	男、女、その他	
居住地区	10自治公民館区から選択し、記入	
修学状況	中学卒、高校卒、専門学校卒、大学卒、大学院卒	
職業	会社員、公務員、自営業・自由業・内職、農林漁業、学生、無職	
所得	50万円未満、50～100万円、101～200万円、201～400万円、401～600万円、601万円以上	
配偶者の有無	配偶者がいる + 結婚期間 配偶者がいない + 結婚歴あり、なし	
子供人數	人数、長子年齢、末子年齢	
同居人数および家族構成	人数、関係性（配偶者、子供、配偶者の父親、配偶者の母親、自分の父親、自分の母親、その他、同居者なし）	
家族の育児協力	頻繁にある、たまにある、ほとんどない、ない	
家族以外（地域）の育児協力	頻繁にある、たまにある、ほとんどない、ない	
地区行事の参加頻度	仕事を休んでも毎回参加する、仕事がない日は毎回参加する、 予定あれば参加する、予定の有無にかかわらず参加しない	
地区行事の参加理由（意欲）	当然のことだから、皆参加しているから、誘われたから、本当は参加したくない	
暮らしの困難さ	ある、なし、（ある場合は、具体的な内容を記述）	
Uターン年齢	帰村した時の満年齢	
Uターン後の経過年数		
リターン		
リターンの意思決定動機	16項目から上位3つを選択 Appendix質問用紙を参照	
1ターン（移入）年齢	移住した時の満年齢	
1ターン（移入）後の経過年数		
1ターン（移入）の意思決定動機	記述式	

表 3-2 中山間地域振興尺度質問項目

	区分
地域資産 継承	神楽など地区文化の継承活動に積極的に参加している
	地区的環境保全活動に積極的に参加している
	学校で行われる子どもたちの学校行事に積極的に参加している
	地区で行われるイベントや祭りの手伝いを積極的に行っている
互助	町や地区の環境をよくするため、清掃等で協力しあうことは大事である
	近所で助け合って作業をすることは大事である
	地区を皆が楽しめる場所にすることは重要だと思う
	ご近所との日常的なお付き合いを続けることは大事である
	他人の悩みごとの相談にのってあげることは大事である
	地区に住んでいる親戚との付き合いを大事にしている
	先祖を大事にし墓を守っていくことは大事である
	1人暮らしのお年寄りを近所や地区で世話することは大事である
子供の頃からの 地域教育	学校では地区的文化や歴史を大切にした教育をおこなってもらいたい
	家族以外でも地区的子どもたちの性格は理解している
	地区的素晴らしいを、子供たちに積極的に伝えている
	地区的子ども達の成長のため、教育活動には積極的に参加している
	地区は地域の歴史や自然環境が学べる場所だと思う
女性・移入者の 活躍	地区は移住者でも活躍できる場所だと思う
	地区は女性も活躍できる場所だと思う
	児童館に入る前の子どもの面倒を見るのは母親がやるべきだと思う

*逆転項目

表 3-3 シビックプライド尺度質問項目

	区分
地域参画	地域社会の一員としての責任を真剣に考えている
	自分のような人間が地域社会で重要な役割を果たすと思う
	地域社会を良い場所にするための自分なりの貢献ができていない*
	自分は地域社会に変化を起こすことができると思う
地域アイデンティティ	人生の大部分が地域に結びついている
	「(市)の人」という言葉は、自分がどういう人物かをよく説明する言葉である
	「(地区)の人」という言葉は、自分がどういう人物かをよく説明する言葉である
	(市)市民であることは自分にとって重要なことである
忠誠的愛郷心	この地域は、他のほとんどの地域より良い場所である
	地域を批判している人がいたら、地域を擁護する
	家族や友人に地域の産物や製品を使うよう勧める
	地域のスポーツチームを積極的に応援する(プロ、アマチュア、学校など)
地域愛着	地域は住みやすいと思う
	地域の雰囲気や土地柄が気に入っている
	地域に自分の居場所はない*
	地域にずっと住み続けたい
	地域は大切だと思う
	地域にいつまでも変わってほしくないものがある
	地域になくなってしまうと悲しいものがある

*逆転項目

表3-4 地区別質問票回収率

		A地区	B地区	C地区	D地区	E地区	F地区	G地区	H地区	I地区	J地区	地区	全体
世帯数*	20	34	153	250	100	100	395	70	51	55	1227		
住民数*	33	63	366	497	228	228	694	169	106	87	2451		
回収数	26	39	189	174	115	115	268	101	42	58	1120		
回収率	79%	62%	51%	35%	50%	50%	39%	60%	40%	67%	46%		
有効回答数	全体	22	38	178	168	108	108	255	93	42	54	1078	
	男性数	12	18	89	83	61	61	133	48	26	30	556	
	女性数	11	21	87	86	52	52	128	48	16	25	522	
有効回答率	mean	85%	97%	95%	97%	94%	94%	95%	92%	100%	93%	93%	
	SD	63.5	66.2	64.3	60.5	61.2	62.0	58.6	59.1	53.5	69.9	61.2	
	Max	17.2	16.7	16.6	16.3	14.9	13.5	16.5	15.6	18.1	12.3	16.0	
	Min	94.0	88.0	91.0	93.0	91.0	85.0	87.0	86.0	89.0	91.0	94.0	
	年齢	27.0	30.0	22.0	27.0	22.0	19.0	22.0	25.0	25.0	43.0	19.0	
有効回答者	mean	71.7	61.2	58.7	57.4	59.4	63.7	56.8	63.2	56.9	65.2	59.8	
	SD	7.6	17.7	14.5	19.0	17.0	14.4	17.2	14.4	16.2	13.2	16.3	
	Max	81.0	84.0	93.0	90.0	90.0	89.0	91.0	84.0	83.0	93.0		
	Min	60.0	22.0	33.0	25.0	19.0	30.0	21.0	25.0	32.0	34.0	19.0	

*世帯数・住民数は、2018年1月1日現在住民基本台帳を基に19歳以上の住民を対象とし算出

表 3-5 19-49 歳群(n=253)、50-64 歳群(n=320)、65 歳以上群(n=452)に分類した個人属性

	n	19-49歳	50-64歳	65歳以上	p
		n (%)	n (%)	n (%)	
性別	1025				
男性		121 (48%)	167 (52%)	240 (53%)	< 0.01 ^s
女性		132 (52%)	153 (48%)	212 (47%)	
居住移動歴	1025				
Uターン群		88 (35%)	100 (31%)	49 (11%)	
Iターン群		69 (27%)	29 (9%)	25 (6%)	< 0.01 ^s
移動なし群		96 (38%)	191 (60%)	378 (84%)	
修学状況	956				
中学校卒業		8 (3%)	52 (17%)	256 (64%)	
高校卒業		101 (41%)	181 (58%)	112 (28%)	< 0.01 ^s
大学（専門学校・大学院含む）卒業		135 (55%)	78 (25%)	33 (8%)	
職業	1078				
役場・会社員		172 (74%)	118 (39%)	25 (6%)	
自営業・自由業		20 (9%)	72 (24%)	94 (23%)	< 0.01 ^s
農林水産業		26 (11%)	78 (26%)	109 (26%)	
その他		14 (6%)	37 (12%)	188 (45%)	
所得	847				
< 200万円		85 (36%)	136 (49%)	274 (82%)	
200~400万円		99 (42%)	101 (36%)	48 (14%)	< 0.01 ^s
> 400万円		50 (21%)	43 (15%)	11 (3%)	
配偶者あり%	984	161 (64%)	252 (80%)	315 (76%)	< 0.01 ^s
家族の育児協力	497				
ない		12 (8%)	49 (28%)	64 (37%)	
ほとんどない		15 (10%)	15 (9%)	31 (18%)	
たまにある		49 (33%)	56 (32%)	47 (27%)	< 0.01 ^s
頻繁にある		71 (48%)	56 (32%)	32 (18%)	
家族以外育児協力	614				
ない		29 (17%)	66 (31%)	90 (39%)	
ほとんどない		37 (22%)	58 (27%)	60 (26%)	< 0.01 ^s
たまにある		77 (46%)	84 (39%)	70 (30%)	
頻繁にある		23 (14%)	7 (3%)	13 (6%)	
地区行事参加頻度	922				
予定の有無にかかわらず参加しない		6 (2%)	12 (4%)	39 (11%)	
予定があれば参加する		157 (64%)	154 (50%)	215 (58%)	< 0.01 ^s
仕事がない日は毎回参加する		52 (21%)	67 (22%)	41 (11%)	
仕事を休んでも毎回参加する		30 (12%)	74 (24%)	75 (20%)	
地区行事参加意欲（積極性）	824				
本当は参加したくない		15 (7%)	10 (4%)	12 (4%)	
誘われたから		24 (11%)	14 (5%)	23 (7%)	< 0.01 ^s
皆参加しているから		83 (38%)	91 (33%)	72 (22%)	
当然のことだから		95 (44%)	162 (58%)	223 (68%)	
暮らしの困難さあり%	825	67 (30%)	36 (24%)	76 (23%)	0.18
結婚年数	657	12.9 ± (8.0)	32.0 ± (7.3)	47.7 ± (8.8)	< 0.01 [#]
同居家族人数	989	3.9 ± (2.0)	3.2 ± (1.6)	2.7 ± (1.4)	< 0.01 [#]
子供数	768	2.3 ± (1.0)	2.5 ± (0.9)	2.8 ± (0.9)	< 0.01 [#]

data : mean ± SD、n (%)

^s χ²検定[#] 一元配置分散分析

表 3-6 暮らしの困難さ 主な記述内容

大分類	小分類		回答数
交通インフラ・交通事情	買い物	・スーパー・コンビニがない、遠い ・日曜日に近くの店が開いていない ・遅い時間に食料品店があいていない ・ガソリンスタンドがない	57
	医療	・病院が無い、遠い ・医者の先生が毎日いない ・専門的な病院がない。リハビリ通院が難しい	23
	移動手段	・自動車が無いと生活できない ・交通の便が悪い ・陸の孤島といわれている	28
	交通インフラ	・道路が狭くて運転が難しい ・村道、林道の状況悪化 ・村営バス停留所がない	21
少子高齢化・人口減少	高齢化	・高齢者が年々多くなり、道切りなどが大変になる ・高齢化・要介護者の増加 ・年を取り何もできない	16
	人口減少	・仕事で手伝いをしてくれる人がいない ・住民が少なくなる ・息子の配偶者なし	15
	少子化	・若者がいない(13~39才迄なし)。将来不安 ・子供の不在	6
生活インフラ・生活支援	水道	・飲料水の確保 ・水。大雨が降ると風呂の水などにごる ・山水使用のため、たまに来ない	15
	生活支援	・仕事終了までの子供を預ける場所がない ・母の介護	12
	携帯電話エリア	・携帯電話がつながらない	4
	学校・公園・施設	・学校(中学通学)等近くに無い	3
コミュニティ	人間関係	・いろんな噂話が大きい話になっていく事 ・高齢者との付き合い。思い込みや言葉遣いでの決めつけ ・プライバシーがない	17
	コミュニティ	・集落内での役目(水道掃除等) ・問題の改善・解決することに時間がかかる	7
	行事	・行事が非常に多い。一人で何役もある	3
仕事・収入	仕事	・仕事がない ・女性の働き場が少ない	6
	収入	・どんなに働いてもそれなりの収入がない	4
その他	その他	・いのしし、シカが多すぎる。畑などを荒らすなど	4

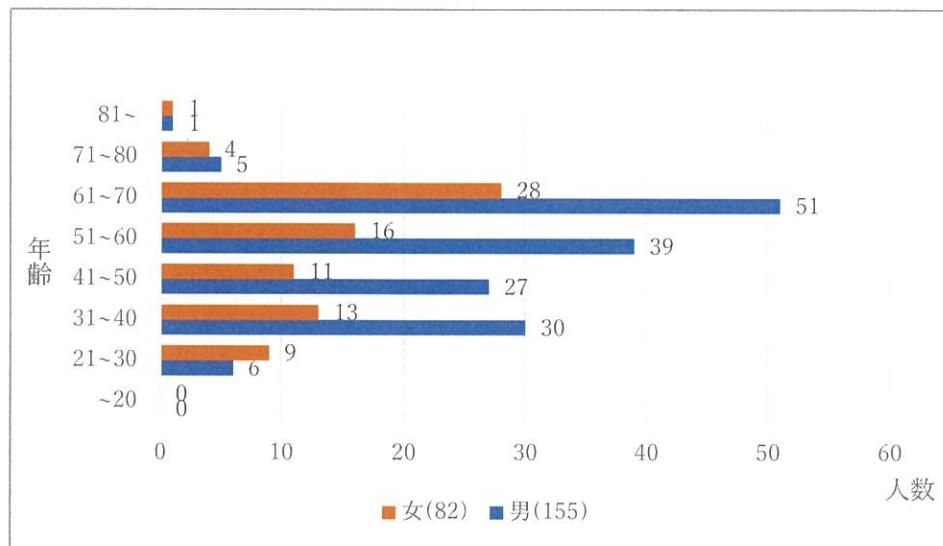


図 3-1 U ターン者の年齢分布

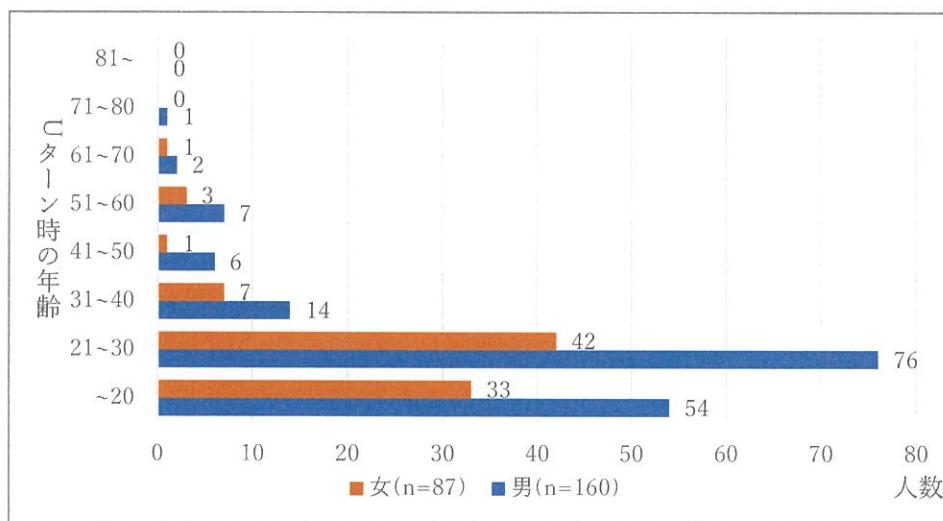


図 3-2 U ターン時の年齢

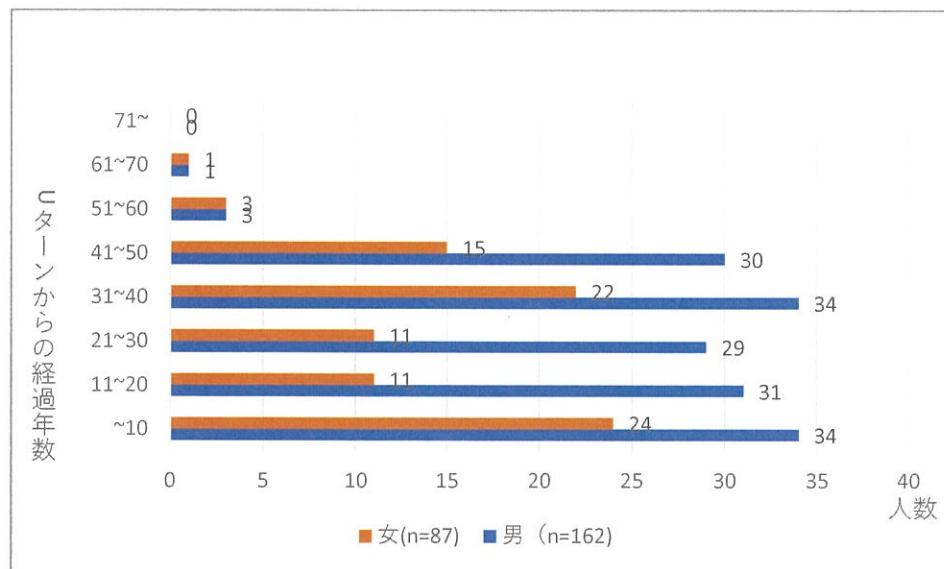


図 3-3 U ターンからの経過年数

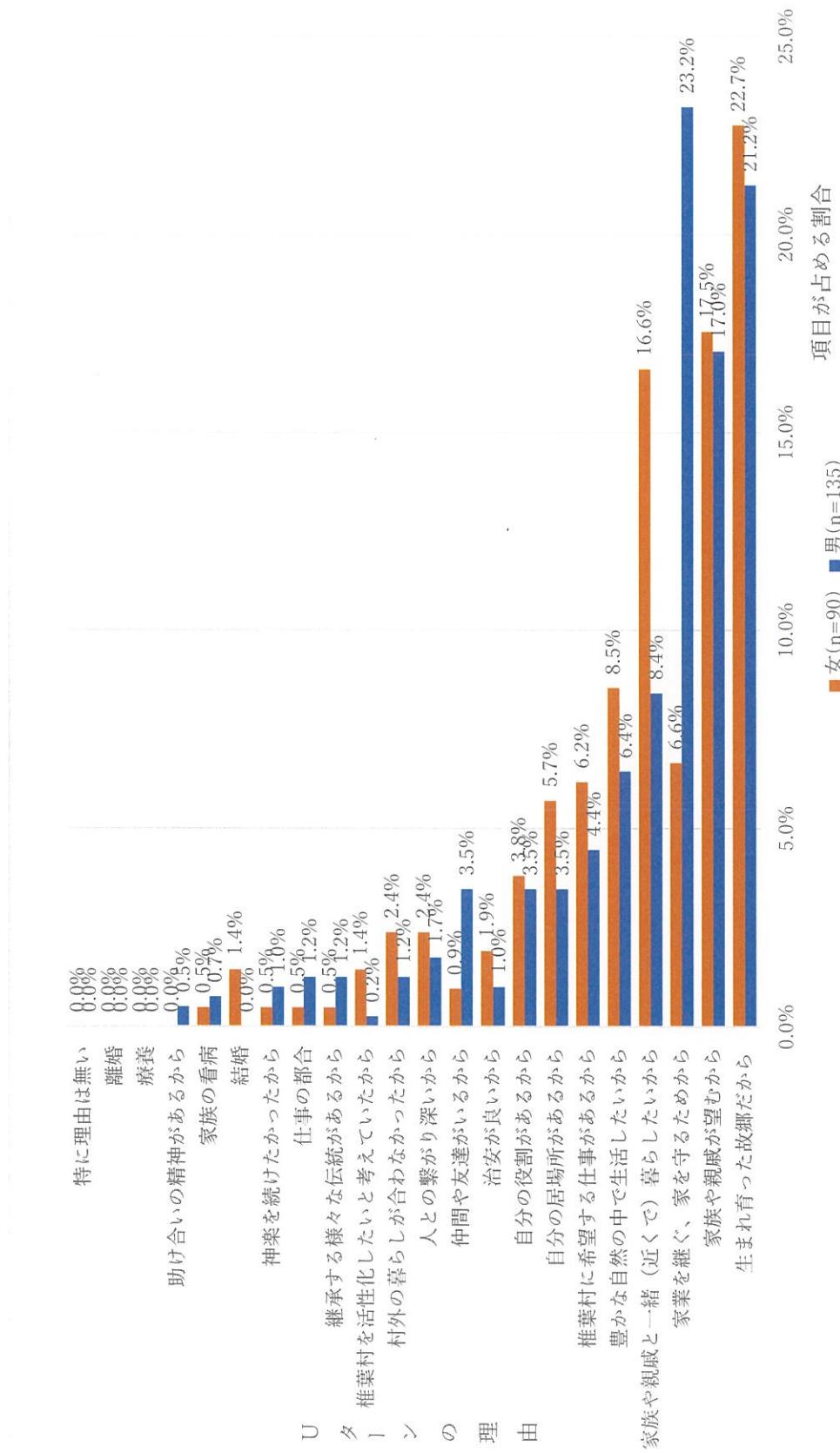


図 3-4 U ターンの意思決定に影響を与えたもの（上位 3 つを回答）

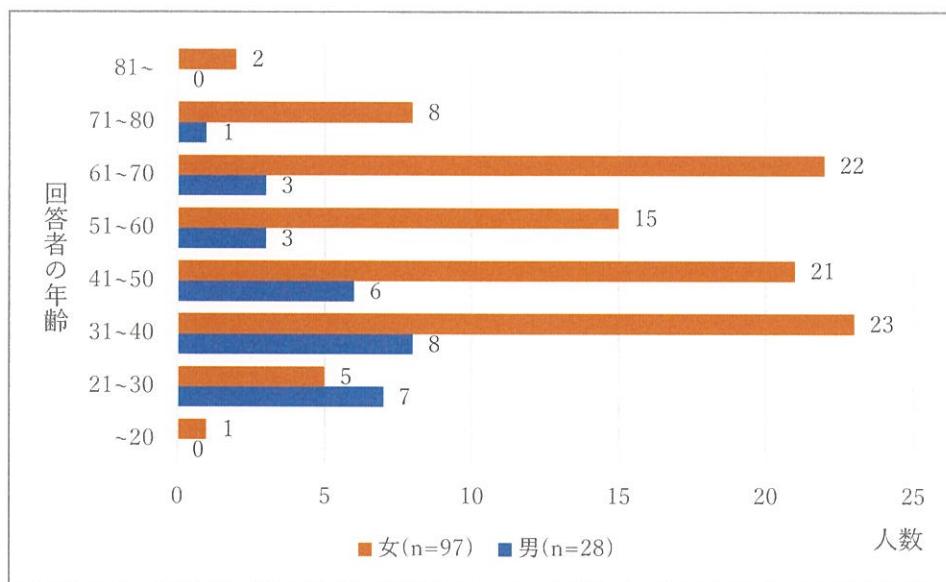


図 3-5 I ターン者の年齢分布

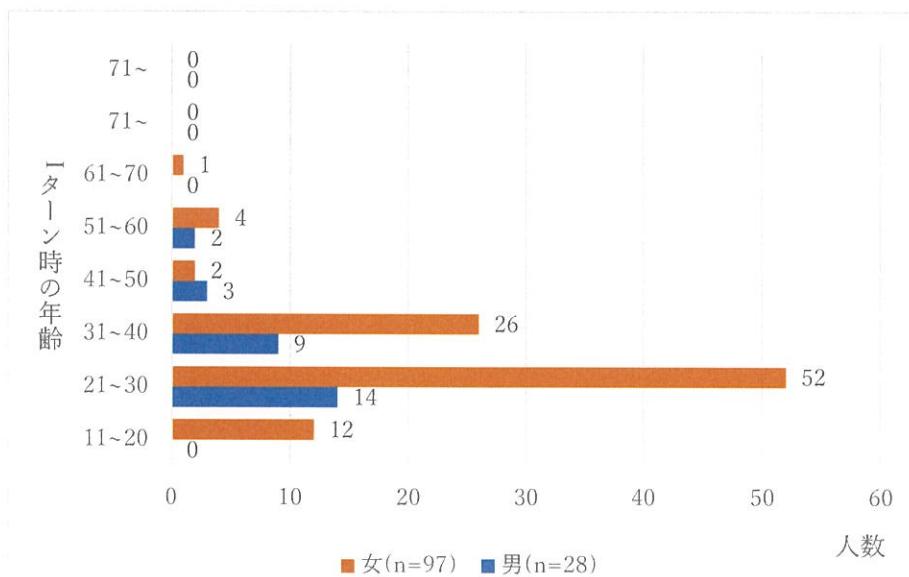


図 3-6 I ターン時の年齢

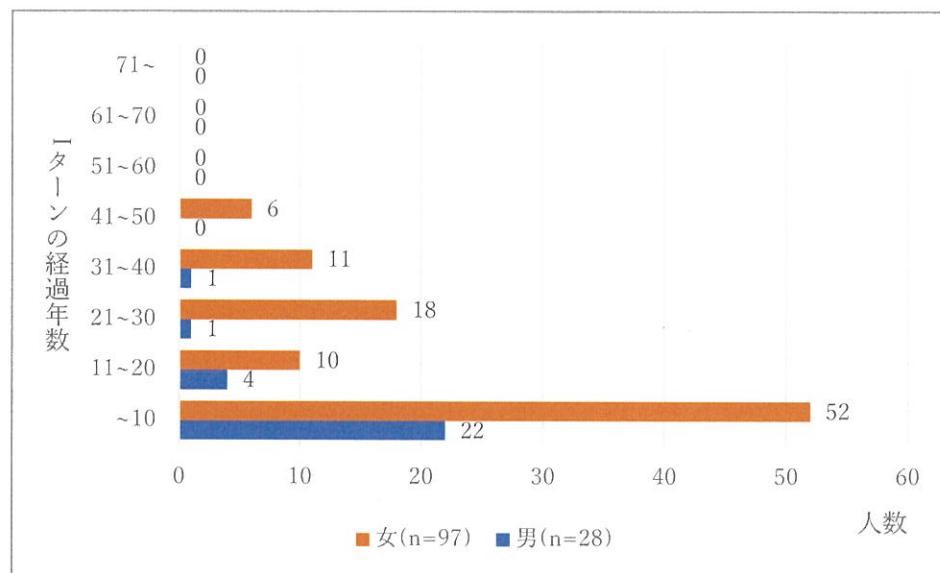


図 3-7 I ターン経過年数

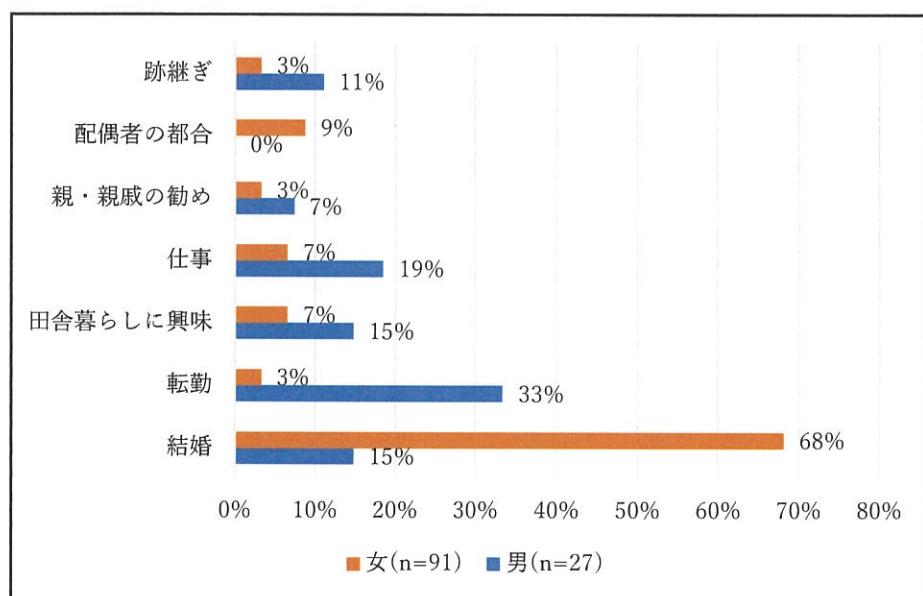


図 3-8 I ターン（移入）したきっかけ（動機）

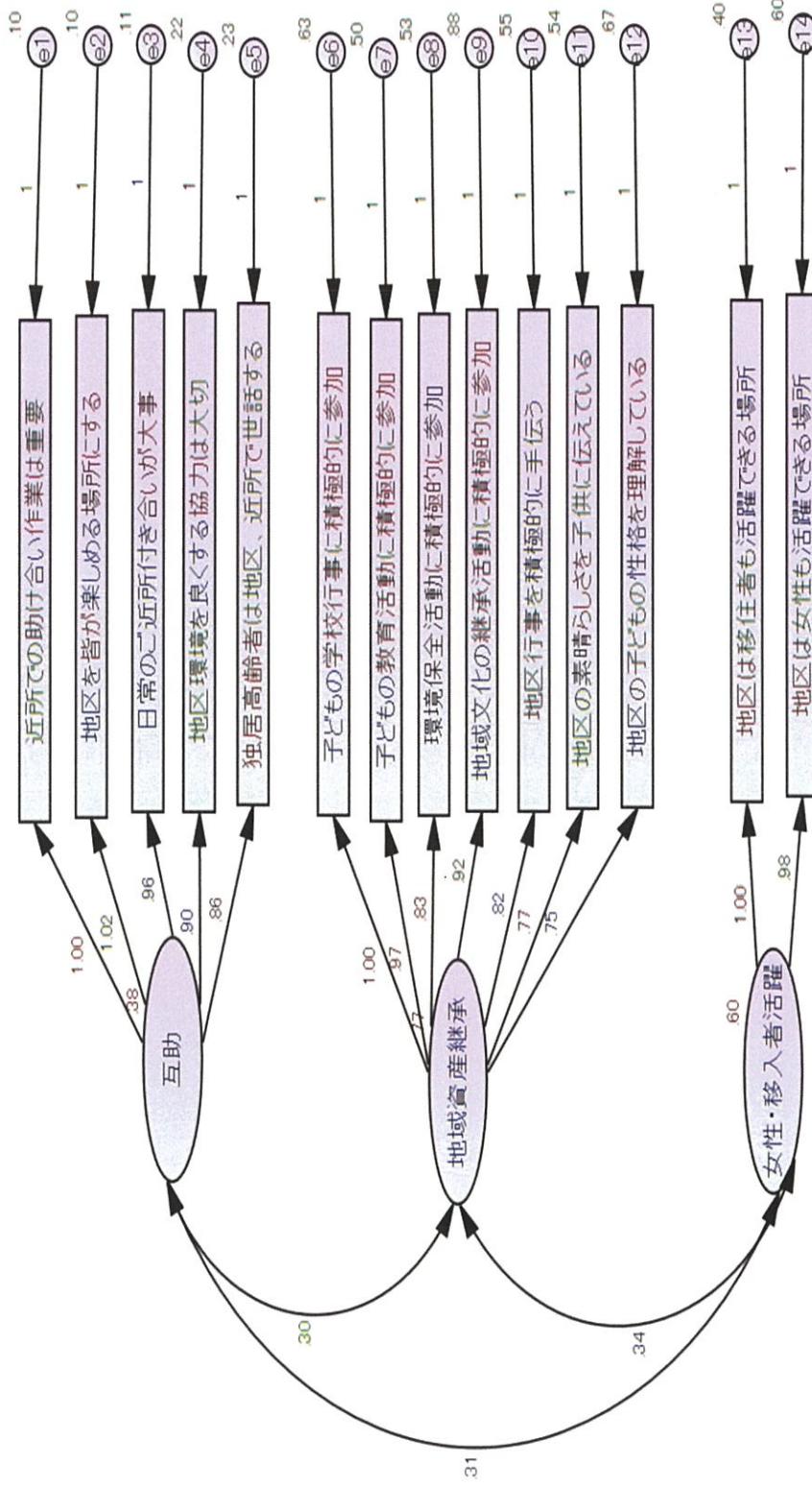
表 3-7 中山間地域振興尺度の因子分析の結果 (n=703)

	因子			Cronbach α
	I	II	III	
近所で助け合い作業は重要	0.956	-0.025	-0.075	
地区を皆が楽しめる場所にすることは重要	0.892	-0.017	0.013	
日常的なご近所お付き合いが大事	0.858	-0.018	0.027	0.920
地区的環境を良くする協力は大切	0.754	0.101	-0.067	
独居高齢者は、地区、近所で世話をする	0.649	-0.012	0.152	
子どもたちの学校行事に積極的に参加	-0.089	0.922	-0.128	
子どもの教育活動に積極的に参加	-0.067	0.896	-0.075	
環境保全活動に積極的に参加	0.087	0.620	0.014	0.867
地区文化の継承活動に積極的に参加	0.007	0.603	0.025	
地区行事を積極的に手伝う	0.184	0.563	-0.001	
地区的素晴らしいを子供たちに伝えている	0.010	0.481	0.32	
地区的子どもの性格は理解している	0.119	0.434	0.197	
地区は移住者でも活躍できる場所	-0.033	-0.017	0.821	0.722
地区は女性でも活躍できる場所	0.061	-0.054	0.655	

因子抽出法：最尤法 回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

因子相関		I	II	III
I	—	0.52**	0.51**	
II	0.52**	—	0.40**	
III	0.51**	0.40**	—	

**p<0.01



$\chi^2(2\text{MIN}) = 500.080$, $df(\text{自由度}) = 74$, $p < 0.001$, $GFI = .901$, $AGFI = .859$, $RMSEA = .091$, $AIC = 562.080$

図 3-9 中山間地域振興尺度 ハスコ

表 3-8 中山間地域振興下位尺度と個人属性の関連 (Spearman's r)

個人属性	互助	地域資産 継承	女性 移入者活躍
年齢	0.23 **	0.01	0.18 **
修学状況	-0.14 **	-0.04	-0.17 **
所得	-0.07 *	0.07	-0.10 **
結婚年数	0.22 **	-0.04	0.20 **
家族人数	-0.07	0.11 **	-0.03
子供数	0.13 **	0.09 *	0.04
家族の育児協力	-0.01	0.17 **	-0.05
家族以外育児協力	0.12 **	0.22 **	0.07
行事参加頻度	0.16 **	0.30 **	0.08 *
行事参加意欲（積極性）	0.39 **	0.39 *	0.29 **

*p<0.05 **p<0.01

表 3-9 中山間地域振興尺度得点に対する個人の社会的背景の影響（2値応答ロジスティックモデル）

	互助			地域資産継承			女性・移入者活躍			
	n	OR	(95%CI)	P	OR	(95%CI)	P	OR	(95%CI)	P
子供の有無	610	1.3	(0.8-1.9)	0.29	1.5	(1.1-2.1)	0.01	1.1	(0.8-1.4)	0.57
配偶者の有無	653	1.1	(0.8-1.6)	0.53	1.9	(1.4-2.4)	0.00	1.0	(0.8-1.3)	1.03
家族育児協力の有無	355	0.8	(0.5-1.4)	0.43	1.9	(1.4-2.7)	0.00	0.7	(0.5-1.0)	0.52
家族以外の育児協力の有無	447	1.1	(0.7-1.7)	0.73	1.5	(1.1-2.1)	0.00	1.0	(0.8-1.3)	0.81
地区行事の参加頻度の高低	644	1.2	(0.8-1.7)	0.46	2.5	(1.9-3.3)	0.00	0.8	(0.7-1.0)	0.08
地区行事参加意欲の高低	530	3.0	(2.0-4.6)	0.00	1.6	(1.3-2.2)	0.00	1.3	(1.1-1.7)	0.02
暮らしの困難感の有無	585	1.2	(0.8-1.8)	0.33	1.0	(0.8-1.3)	0.97	0.6	(0.4-0.7)	0.00

有無の場合（あり=1, なし=0）、高低の場合（高=1, 低=0）とし検定

表 3-10 居住移動歴別の中山間地域振興下位尺度得点

中山間地域振興 下位尺度	居住移動歴	n	平均値	標準偏差
互助	移動なし群	557	4.55	0.61
	Uターン群	238	4.43	0.71
	Iターン群	114	4.47	0.58
地域資産継承	移動なし群	416	3.74	0.81
	Uターン群	194	3.68	0.89
	Iターン群	90	3.61	0.81
移入者女性活躍	移動なし群	565	3.94	0.94
	Uターン群	234	3.79	1.01
	Iターン群	111	3.68	0.98

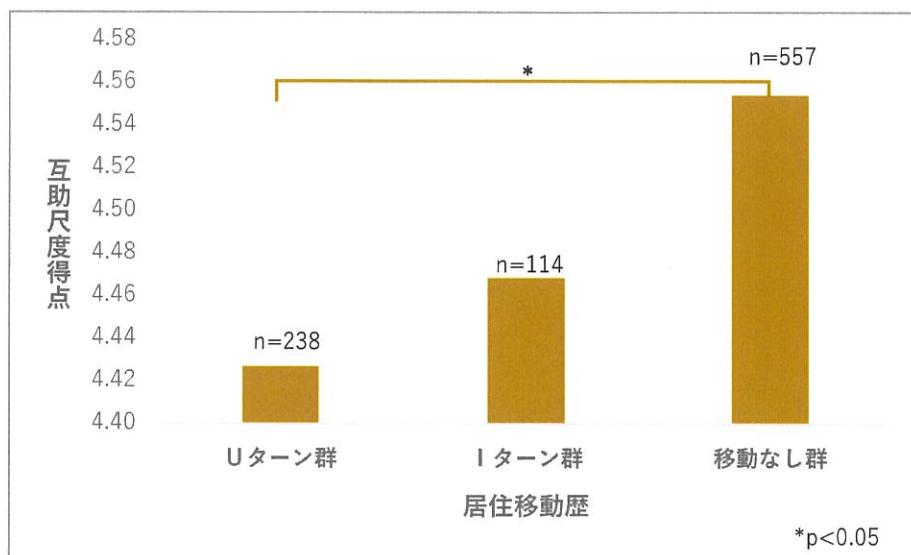


図 3-10 居住移動歴別の互助

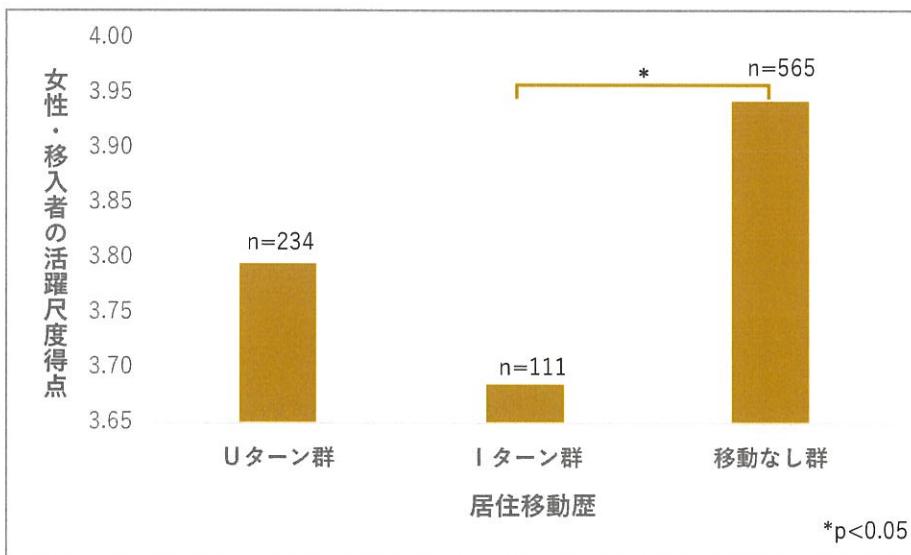


図 3-11 居住移動歴別の女性・移入者の活躍

表3-11 地区年少人口割合区別の性別・年齢別「中山間地域振興下位尺度得点」

「互助」

「地域資産継承」

「女性・移入者の活躍」

性別・年齢別		n	平均値	標準偏差	性別・年齢別		n	平均値	標準偏差
地区別年少人口割合					地区別年少人口割合				
19-49歳	男性	低位群	5	4.68	0.30	低位群	4	3.57	0.29
		中位群	74	4.27	0.72	中位群	62	3.46	0.89
		高位群	37	4.44	0.58	高位群	31	3.92	0.76
		合計	116	4.34	0.67	合計	97	3.61	0.86
		低位群	8	4.30	0.60	低位群	5	3.54	0.60
	女性	中位群	82	4.26	0.85	中位群	68	3.66	0.87
		高位群	30	4.60	0.57	高位群	28	4.20	0.61
		合計	120	4.35	0.78	合計	101	3.81	0.83
		低位群	14	4.71	0.37	低位群	8	3.39	0.55
		中位群	96	4.34	0.78	中位群	77	3.65	0.92
50-64歳	男性	高位群	43	4.66	0.48	男性	39	4.12	0.76
		合計	153	4.47	0.70	高位群	124	3.78	0.88
		低位群	10	4.62	0.65	低位群	7	3.80	0.75
		中位群	86	4.52	0.50	中位群	69	3.62	0.78
		高位群	41	4.51	0.65	高位群	31	3.52	0.84
	女性	合計	137	4.52	0.56	合計	107	3.60	0.79
		低位群	26	4.66	0.74	低位群	11	3.45	1.12
		中位群	108	4.57	0.54	中位群	84	3.74	0.73
		高位群	47	4.69	0.44	高位群	40	3.67	0.91
		合計	181	4.61	0.55	合計	135	3.70	0.82
65歳以上	女性	低位群	26	4.78	0.38	低位群	11	3.57	0.83
		中位群	97	4.66	0.53	中位群	70	3.77	0.71
		高位群	47	4.72	0.44	高位群	32	3.68	0.95
		合計	170	4.69	0.49	合計	113	3.72	0.79

性別・年齢別		n	平均値	標準偏差	性別・年齢別		n	平均値	標準偏差
地区別年少人口割合					地区別年少人口割合				
19-49歳	男性	低位群	97	3.92	0.76	低位群	5	3.90	1.19
		中位群	113	3.69	0.92	中位群	75	3.55	0.94
		高位群	113	3.57	0.79	高位群	33	3.97	0.79
		合計	305	3.66	0.82	合計	121	3.63	1.04
		低位群	77	3.52	0.98	低位群	11	3.82	0.78
	女性	低位群	113	3.52	0.98	低位群	97	3.76	0.98
		中位群	113	3.57	0.86	中位群	44	4.27	0.86
		高位群	113	3.57	0.96	高位群	152	3.91	0.96
		合計	305	3.63	1.04	合計	152	3.67	1.09
50-64歳	男性	低位群	113	3.52	0.98	低位群	12	3.67	0.98
		中位群	113	3.57	0.86	中位群	87	3.83	0.93
		高位群	113	3.57	0.96	高位群	40	3.96	1.05
		合計	305	3.63	1.04	合計	139	3.86	0.98
		低位群	113	3.52	0.98	低位群	22	3.68	0.99
	女性	低位群	113	3.52	0.98	低位群	108	4.03	0.90
		中位群	113	3.57	0.82	中位群	53	4.24	0.82
		高位群	113	3.57	0.90	高位群	183	4.05	0.90
		合計	305	3.63	1.04	合計	183	3.88	1.01

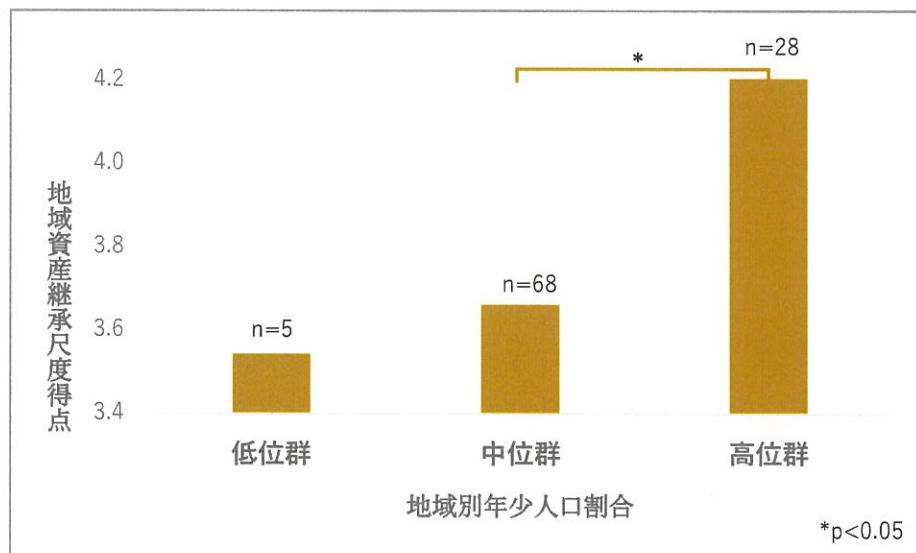
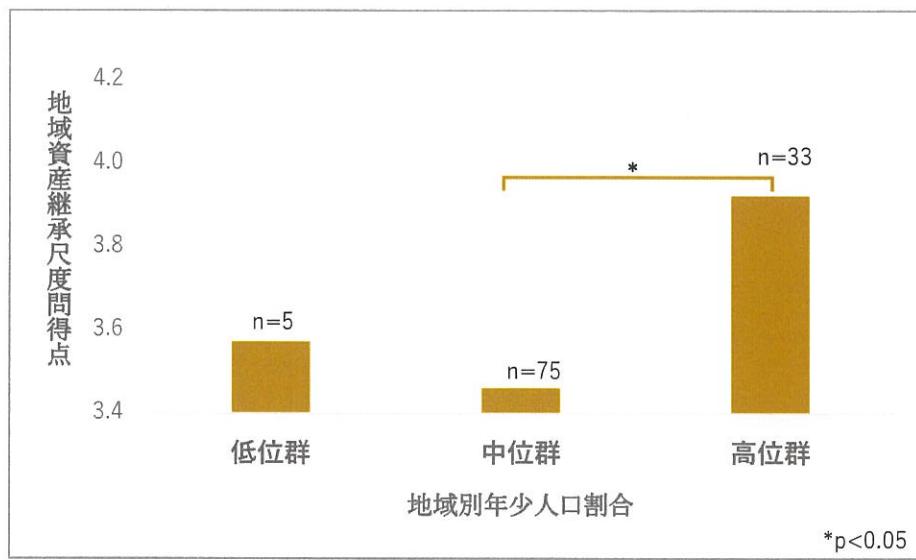


表 3-12 シビックプライド尺度得点の因子分析の結果

	因子			Cronbach α
	I	II	III	
好き	0.929	-0.049	-0.107	0.885
大切	0.819	-0.022	-0.008	
雰囲気や土地柄	0.817	-0.032	-0.074	
住みやすい	0.806	0.045	-0.125	
住み続けたい	0.691	0.075	-0.006	
変わって欲しくないもの	0.561	-0.033	0.193	
なくなると悲しい	0.459	-0.018	0.237	
「〇〇地区の人」は自分を説明	-0.080	0.894	-0.046	
「椎葉の人」を自分が説明	-0.020	0.806	0.036	
〇〇地区住民であることは重要	0.321	0.438	0.092	
人生が地区と結びついている	0.282	0.335	0.102	
地域社会で重要な役割	-0.050	0.009	0.837	
変化をおこすことができる	-0.162	0.075	0.649	0.736
地域の一員としての責任	0.310	-0.112	0.572	

因子抽出法：最尤法 回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

因子相関	I		
	I	II	III
I	—	0.57**	0.49**
II	0.57**	—	0.47**
III	0.49**	0.47**	—

*p<0.01

表 3-13 シビックプライド尺度得点と個人属性の関連 (Spearman's r)

個人属性	愛着	アイデンティティ	参画
年齢	0.22 **	0.29 **	0.04
修学状況	-0.20 **	-0.28 **	0.03
年収	-0.03	-0.12 **	0.19 **
結婚年数	0.20 **	0.27 **	-0.01
家族人数	0.06	0.01	0.09 **
子供数	0.14 **	0.15 **	0.02
家族の育児協力	0.03	-0.05	0.08
家族以外育児協力	0.20 **	0.05	0.14 **
行事参加頻度	0.16 **	0.09 **	0.18 **
行事参加意欲（積極性）	0.40 **	0.27 **	0.31 **

*p<0.05 **p<0.01

表3-14 シビックプライド下位尺度得点に対する個人の社会的背景の影響（2値応答ロジスティックモデル）

	n	愛着		アイデンティティ		参画	
		0R (95%CI)	P	0R (95%CI)	P	0R (95%CI)	P
子供の有無	819	1.2 (0.9-1.6)	0.14	1.3 (1.0-1.6)	0.04	1.1 (0.9-1.4)	0.39
配偶者の有無	863	1.1 (0.9-1.4)	0.52	1.0 (0.8-1.2)	0.68	1.5 (1.2-1.8)	0.00
家族育児協力の有無	461	1.1 (0.8-1.4)	0.68	0.8 (0.6-1.0)	0.06	1.2 (0.9-1.6)	0.12
家族以外の育児協力の有無	576	1.8 (1.3-2.4)	0.00	0.8 (0.6-1.0)	0.03	1.2 (0.9-1.5)	0.19
地区行事の参加頻度の高低	844	1.4 (1.1-1.8)	0.00	0.9 (0.8-1.1)	0.52	1.4 (1.2-1.8)	0.00
地区行事参加意欲の高低	755	2.5 (1.9-3.3)	0.00	1.1 (0.9-1.3)	0.52	1.6 (1.3-2.0)	0.00
暮らしの困難感の有無	763	0.6 (0.5-0.8)	0.00	0.9 (0.7-1.1)	0.26	1.1 (0.9-1.4)	0.30

有無の場合（あり=1, なし=0）、高低の場合（高=1, 低=0）とし検定

表 3-15 居住移動歴別の中山間地域振興下位尺度得点

中山間地域振興 下位尺度	居住移動歴	n	mean	SD
愛着	移動なし群	608	4.12	0.77
	Uターン群	237	4.01	0.84
	Iターン群	117	3.82	0.75
アイデンティティ	移動なし群	605	3.54	0.92
	Uターン群	241	3.39	0.94
	Iターン群	116	2.94	0.99
参画	移動なし群	620	3.23	0.91
	Uターン群	245	3.30	0.88
	Iターン群	119	3.13	0.83

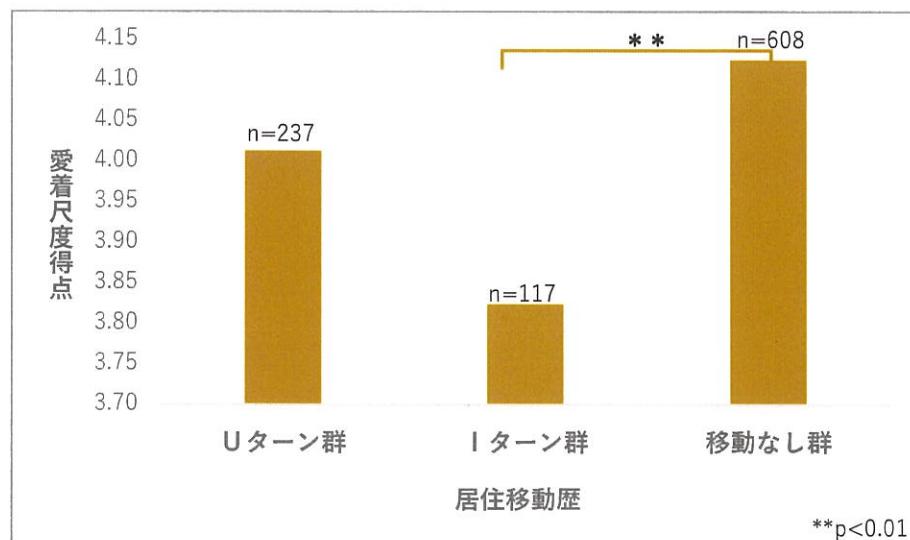


図 3-14 居住移動歴別の愛着

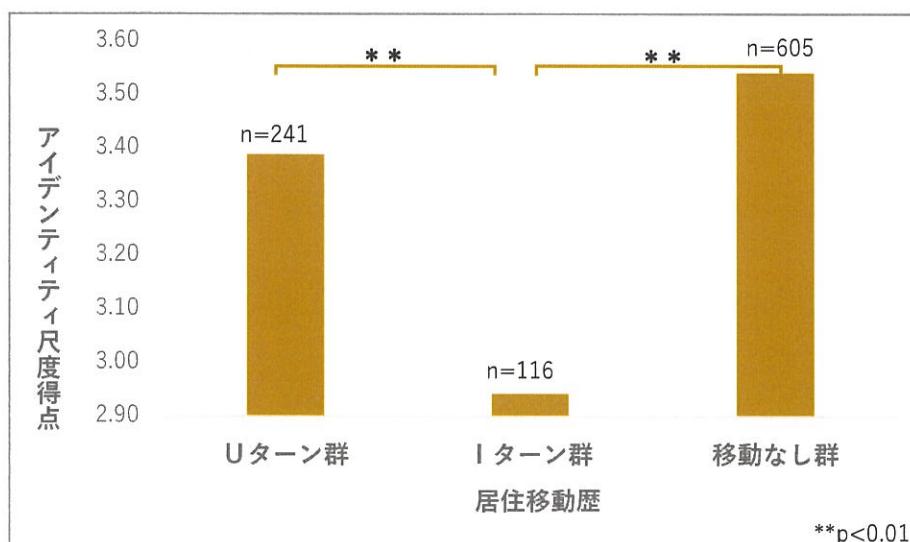


図 3-15 居住移動歴別のアイデンティティ

表 3-16 地区年少人口割合区分別の性別・年齢別「シビックプライド下位尺度得点」

「愛着」

性別・年齢別 地区別年少人口割合		n	平均値	標準偏差
男性	低位群	4	4.09	0.34
	中位群	76	3.81	0.86
	高位群	38	4.07	0.62
19-49歳	合計	118	3.90	0.79
女性	低位群	8	3.83	0.50
	中位群	87	3.79	0.79
	高位群	36	4.20	0.62
19-49歳	合計	131	3.90	0.75
男性	低位群	15	3.84	0.74
	中位群	99	3.89	0.95
	高位群	44	4.32	0.61
50-64歳	合計	158	4.00	0.86
女性	低位群	11	3.63	0.80
	中位群	86	4.15	0.74
50-64歳	合計	173	4.06	0.80
65歳以上	低位群	47	3.99	0.87
	中位群	144	4.06	0.80
	高位群	26	4.15	0.78
65歳以上	合計	197	4.18	0.78
女性	低位群	26	4.21	0.64
	中位群	106	4.19	0.71
	高位群	41	4.47	0.64
65歳以上	合計	173	4.26	0.69

「アイデンティティ」

性別・年齢別 地区別年少人口割合		n	平均値	標準偏差
男性	低位群	4	3.13	0.72
	中位群	76	2.88	1.00
	高位群	38	3.38	0.91
19-49歳	合計	118	3.05	0.99
女性	低位群	6	3.17	1.02
	中位群	87	3.11	0.96
	高位群	35	3.45	0.77
19-49歳	合計	128	3.21	0.92
男性	低位群	15	3.43	0.54
	中位群	96	3.26	0.94
	高位群	44	3.48	0.89
50-64歳	合計	155	3.34	0.90
女性	低位群	13	2.98	1.08
	中位群	87	3.34	0.88
50-64歳	合計	174	3.34	0.88
65歳以上	低位群	45	3.26	1.09
	中位群	145	3.28	0.96
	高位群	27	3.57	1.12
65歳以上	合計	199	3.77	0.88
女性	低位群	116	3.76	0.83
	中位群	56	3.86	0.85
	高位群	26	3.64	0.97
65歳以上	合計	199	3.77	0.88
女性	低位群	106	3.62	0.89
	中位群	42	3.85	0.92
	高位群	174	3.68	0.91
65歳以上	合計	181	3.26	1.00

「参画」

性別・年齢別 地区別年少人口割合		n	平均値	標準偏差
男性	低位群	4	3.60	0.43
	中位群	76	3.04	0.87
	高位群	38	3.32	0.70
19-49歳	合計	119	3.15	0.82
女性	低位群	8	3.42	0.50
	中位群	87	3.19	0.88
	高位群	36	3.25	0.72
19-49歳	合計	131	3.22	0.82
男性	低位群	14	3.74	0.83
	中位群	100	3.27	0.93
	高位群	47	3.52	0.89
50-64歳	合計	161	3.39	0.92
女性	低位群	13	2.54	0.73
	中位群	86	3.32	0.76
50-64歳	合計	174	3.34	0.88
65歳以上	低位群	48	2.79	1.00
	中位群	147	3.08	0.89
	高位群	30	3.27	0.92
65歳以上	合計	202	3.28	0.87
女性	低位群	108	3.22	0.95
	中位群	45	3.18	1.14
	高位群	181	3.26	1.00

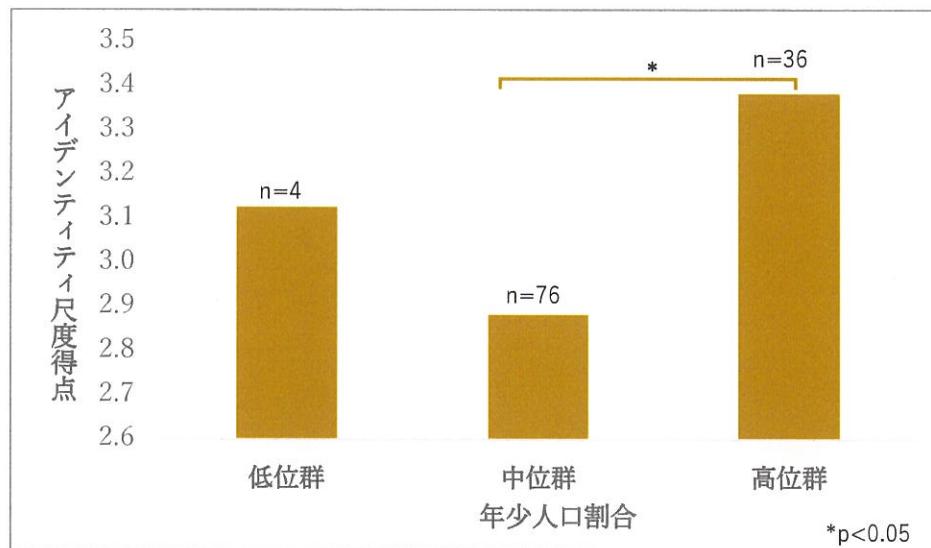


図 3-16 地域別年少人口割合とアイデンティティ（19-49 歳 男）

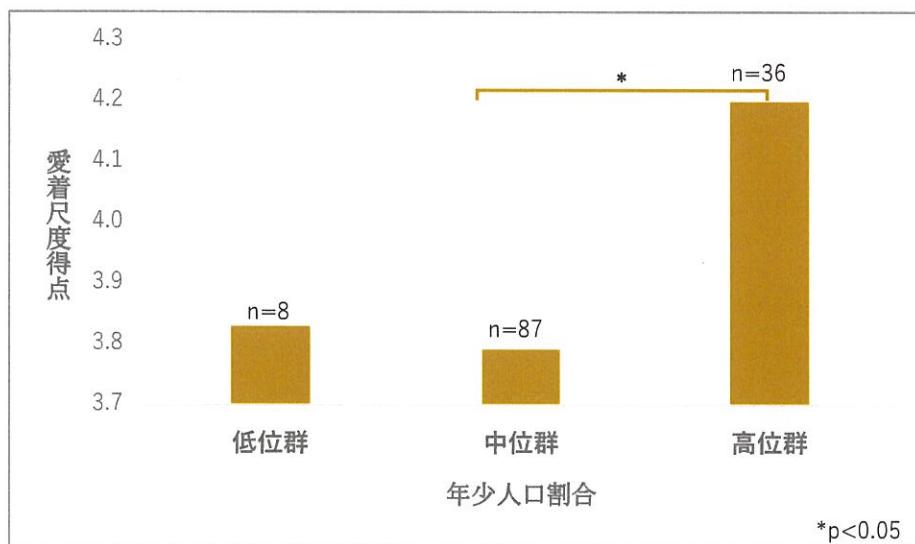


図 3-17 地域別年少人口割合別の愛着（19-49 歳 女）

第4章 結論および今後の展望

本研究は生物学的な視点と文化的な視点を重ね持つ人類生態学的手法から中山間地域の社会文化的特性、シビックプライドおよび再生産年齢女性人口に着目し、宮崎県椎葉村を対象に中山間地域の人口移動や少子化に影響を与える要因について、より多角的に検討することを目的とした。

第2章では椎葉村の中で人口減少率が低く出生数が多い尾向地区の社会文化的な地域特性についてエスノグラフィーに拠り質的に検討した。その結果、「地域資産継承と地域教育を軸に互助と愛着が廻る地域」という Main theme のもとに「互助」「地域資産継承」「子供の頃から地域教育」「女性・移入者の活躍」という 4 つの Domain が導出された。これは尾向地区の神楽などの地域資産の継承と地域社会の密接な繋がりが表れた結果であるとも言えるだろう。各々の自治体には地域特性や住民各個人の生活様式や価値観を有し、一括りにはできないという前提のうえで、現在中山間地域の中で人口減少率が低く出生数が多い一地域の現象を捉えたものであると考えられる。椎葉村内の他の地区、また近接した自治体においても神楽の継承は行われており、「地域資産の継承を有する」といった文化的環境が類似する地域では、本研究の結果は一般化できる可能性がある。人間の「生き方」に深く関係する現在の人口特性の検証は中山間地域の少子高齢化・人口減少社会に対する課題解決につながる基礎的研究なりうる。中山間地域が抱える少子高齢化・人口減少社会の課題を深く検討するには、研究者が現在そのような地域に暮らす者の声に耳を傾け、その暮らしを観察する質的研究の蓄積と議論が望まれる。

第3章では第2章で得られた 4 つの Domain を用いた中山間地域振興尺度を開発し、その尺度および既存のシビックプライド尺度（伊藤 2017）と人口移動と少子化との関連を検討するため、椎葉村の 19 歳以上の者を対象に質問紙調査を実施した。その結果、中山間地域振興尺度の下位尺度である【地域資産継承】の意識には年齢、居住移動歴、居住年数が規定因とならず、子供や配偶者の存在、育児協力、地区行事の参加が規定因となることから、地域での経験の長さではなく、結婚、出産、育児および家族や地域との繋がりといった現在の経験の質によってその意識が醸成される可能性がある。さらに 19-49 歳の者は男女ともに年少人口割合の高い地域に居住する者が【地域資産継承】の尺度得点が高いこ

とから、この年代の【地域資産継承】の意識は、子供が規定因である可能性がある。

一方中山間地域振興尺度の【互助】および【女性・移入者の活躍】の尺度得点、シビックプライド尺度の【愛着】および【アイデンティティ】尺度得点は年齢や居住移動歴によって差がみられることから、地域での経験の長さが規定因となりうる。またこれらの意識は実際の地区活動の参加頻度や意欲との関連することが示された。

シビックプライド尺度の【愛着】の意識には家族以外の育児支援、地区活動の参加頻度や意欲が規定因となり、さらに19-49歳の女性においては年少人口割合高が高い地域に居住する者が【愛着】の尺度得点が高いことから、結婚、出産および育児など地域との繋がりや地域での経験を通して【愛着】の意識が醸成される可能性がある。【アイデンティティ】の意識には子供の存在が規定因となり、19-49歳の男性においては年少人口割合が高い地域に居住する者が【アイデンティティ】の尺度得点が高いことから、男性にとって子供の存在と「アイデンティティ」は密接な関係があることが推察される。第2章での神楽継承に対する男性の語りを考慮すると男性にとって子供の存在や子供との神楽などの地域資産継承への参加が「アイデンティティ」を高める規定因となる可能性が示唆された。これらの結果は少子化だからこそ、子供が地域にいることの価値や重要性が示した可能性がある。

さらに年少人口割合高位の地域に住む19-49歳では、女性は婚姻による移入者が多く、居住年数が短いという条件にも関わらず【互助】、【地域資産継承】、【女性・移入者の活躍】、【愛着】および【アイデンティティ】の全てにおいて、男性に比べ女性の方が尺度得点は高かった。19-49歳の女性は過去の居住移動歴や居住年数にかかわらず、結婚、出産および育児など地域との繋がりや地域での経験を通して【中山間地域振興】および【シビックプライド】の意識が醸成される可能性がある。しかしながら椎葉村は今回の調査において19-49歳の女性で家族からの子育て支援があると回答した者が82%、家族以外（地域）の育児支援があると回答した者が60%に上る。全国と比べ家族および地域との繋がりがある椎葉村だからこそ、母親世代の女性が居住移動歴や居住年数に影響されずに中山間地域振興およびシビックプライドの意識が醸成されている可能性は否定できない。反対にそういった家族および地域の繋がりによる子育て支援が整った環境であれば、女性の中山間地域振興の意識およびシビックプライドは醸成される可能性があるのかもしれない。

【愛着】、【アイデンティティ】および【参画】の尺度得点はすべて実際の地区行事の参加頻度と参加意欲との間に正の相関をみられた。このことから自治体による定住・交流人口の増加を期待し住民のシビックプライドの醸成を掲げている取り組みは参画意識の向上という効果が得られるものと考えられる。さらに【互助】、【地域資産継承】および【女性・移入者の活躍】も同様の結果を得ていることから、これらの意識の醸成も参画意識の向上という効果が得られるものと考えられる。

中山間地域の人口移動および少子化との関連の検討に社会文化的な地域特性に注目し開発した中山間地域振興尺度および伊藤（2017）が開発したシビックプライド尺度を用いたのは今回が初めてである。各々の自治体では地域特性や住民各個人の生活様式は異なるため、他の地域でこれらの尺度を用い検討した結果は一様ではないことが予想される。今回用いた尺度が中山間地域の人口分析・評価の指標となるためには、他地域でも同様の検討を行い尺度の信頼性を検討し尺度の精度を高める必要がある。さらに今回得られた中山間地域振興尺度の意識およびシビックプライドの意識が今後、地区毎の出生数の増減・人口移動に影響するにしても、それが顕在化するのには時間がかかることが考えられるため、経時的な検討が必要であろう。そのためには長期的な視点で自治体と協働し人口分析を行っていくことが必要であると考えられる。

第1章で椎葉村地区別の人団動態で述べた通り、中山間地域に指定される椎葉村は10地区全てが人口減少過程にあった。また性比は高齢化が進むと女性の長寿を反映し、値が小さくなる傾向があるが、椎葉村においても高齢化率が6割を超えた地区は総人口の性比が低値であった。一方で再生産年齢人口における性比は総人口の性比の数値と大きな隔たりがあることが確認された。性比のアンバランスが未婚率に与える影響を検討する場合は、その点を留意する必要があるだろう。

わが国は世界に先駆け少子高齢化・人口減少社会が進行し、多くの中山間地域を含む自治体が現実の問題として直面している。それぞれの自治体が異なる人口構成や分布が存在し問題も異なる。各々の自治体が正確な人口分析を行い、問題解決のための対策を地域ごとに立案していくことが必要であるが、人口減少が進む中、中山間地域を含む自治体は抱える課題は多く、詳細な人口分析を各自治体で進めることは困難な場合もありうる。自地域の実情にあった対策を講じるには自治体と研究機関が領域をこえ協働し、多角的な視点

から議論し、正確なデータと知見を集めた人口分析への取り組みが望まれる。

最後に大塚ら（2012）は、人口特性が人間の「生き方」に深く関係しており、生物学的視点と文化的視点を重ね持った人類生態学な視点でみることの意義を述べている。これは Leininger（1995）が示した「看護の対象となる多くの人々に健康と安寧をもたらすために文化に適した看護ケアを提供する」ことを目標とした「文化ケア」理論に通じ、少子高齢化・人口減少社会が進行するわが国の地域看護および公衆衛生看護において重要な視点となると考えられる。その観点からも看護研究における人類生態学的手法による研究の蓄積と議論が望まれる。

謝辞

はじめに、3年間にわたり椎葉村での調査研究に参加いただいた皆様、フィールドワークでは見知らぬ研究者を受け入れ、快く接し話をしてくれた椎葉村民の皆様に心よりお礼を申し上げます。2017年には42名の方々にお忙しい時間を割いてスケジュールを調整し面接調査に協力していただきました。また2018年の質問紙調査の際には質問紙の配布及び回収にあたり、10自治公民館区の区長および組合長の皆様方に多大なご尽力を賜りました。厚く御礼申し上げます。そして調査研究にあたり支援を頂きました椎葉村村長椎葉晃充さんをはじめ椎葉村役場の皆様方に感謝を申し上げます。とりわけ地域振興課の皆様には面接調査の対象者選定のご助言から面接調査のスケジュール調整、場所の確保、質問紙調査の質問紙配布及び回収に関する助言や調整など、大変お世話になりました。本研究は椎葉村村役場のサポートがなければ成しえない調査であり、心から深謝申し上げます。多くの村民の方との出会い、交流は私に椎葉村への愛着を醸成させるものでした。出会った皆さんのお顔や言葉、椎葉村の食べ物や自然そして文化が脳裏に浮かび、それが本論をまとめ上げる中での励みとなりました。ここに記して、感謝の意を表します。

そして、人口支持力(carrying capacity)に関する人類生態学的研究を私にご教授いただき修士課程を含めた5年間研究を一から熱心にご指導いただいた東京医療保健大学大学院看護学研究科の今井秀樹先生に深謝いたします。

節目の発表で幅広くご助言を下さった東京医療保健大学大学院博士コロキウムの先生方、学生の皆様に厚く御礼申し上げます。東京医療保健大学の堀田昇吾先生、加藤知子先生には、貴重な意見をいただきました。深く御礼申しあげます。

また東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室の皆さんには、貴重なアドバイスやご指摘をいただき、大変お世話になりました。心より厚く御礼申し上げます。

最後にこれまでの研究生活を支えてくれた家族に、心より感謝の意を表します。本研究は、以上の皆様のご協力により完成いたしました。ありがとうございました。

2019年12月13日 日高未希恵

引用文献

- 天野馨南子 (2019). 人口減少社会データ解説「なぜ東京都の子ども人口だけが増加するのか」(上). ニッセイ基礎研究所, 2019/06/10 公表, <https://www.nli-research.co.jp/report/detail/id=61754?site=nli>
- 網野善彦 (2000). 日本とは何か 日本の歴史<00>. 講談社, 東京.
- Brown B, Perkins DD, Brown G (2003). Place attachment in a revitalizing neighborhood: Individual and block levels of analysis. *Journal of Environmental Psychology* 23, 259-271.
- Collins T (2016). Urban Civic Pride and the New Localism. *Transactions of the Institute of British Geographers*, 41(2), 175-186.
- D. F. ポーリット, C. T. ベック (著), 近藤潤子 (監訳) (2010). 看護研究第2版 一原理と方法. 医学書院, 東京.
- 江口貴康 (2002). 地方高校生の地域愛着意識とUターン—島根県の高校生調査から 一. 社会システム論集, 7, 55-70.
- Erikson, E. H (1950), 草野栄三良訳(1956). 幼年期と社会. 日本教文社, 東京.
- Erikson, E. H (1959), 小此木啓吾訳 (1973). 自我同一性. 誠信書房, 東京.
- Erikson, E. H. (1974): Dimensions of a New Identity. Norton, New York.
- 江崎雄治 (2007). 地方圏出身者のUターン移動. 人口問題研究, 63 (2), 1-13.
- 藤野哲生, 藍澤宏, 菅原麻衣子 (2010). 公立小学校廃校の要因とその課題に関する研究. 日本建築学会計画系論文集, 75, 579-585.
- Gastil J, Xenos M (2010). Of Attitudes and Engagement: Clarifying the Reciprocal Relationship Between Civic Attitudes and Political Participation. *Journal of Communication*, 60(2), 318-343.
- Groothuis P, Rotthoff KW (2014). Surveying the Literature and the People: The Economic Impact of Sports Teams and Civic Pride. Working

Papers from Department of Economics, Appalachian State University,
14-05.

原俊彦 (2009). 札幌市の少子化:人口移動と性比の変化. 人口学研究, 45, 21-33.

林玲子 (2018). 移動理由. 日本人口学会編者, 人口学辞典. 丸善出版, 東京.

Hidalgo M, Hernandez B (2001). Place attachment conceptual and empirical questions. Journal of Environmental Psychology, 21, 273-281.

引地博之, 青木俊明 (2005). 地域に対する愛着形成の心理過程の検討. 景観・デザイン研究講演集, 1, 232-235.

引地博之, 青木俊明, 大渕憲一 (2009). 地域に対する愛着の形成機構—物理的環境と社会的環境の影響—. 土木学会論文集D, 65 (2), 101-110.

櫃本真美代 (2009). 地元学に学ぶ地域づくりに向けた環境教育の一考察-東北タイ・ブア村の事例から. 環境教育, 18, 15-26.

平原園子 (2013). 村の「つきあい」, 八木透編, 新・民俗学を学ぶ-現代を知るために-, 昭和堂, 東京.

広田純一 (2001). 農業農村における伝統文化の継承と環境教育. 農業土木学会誌, 69 (1), 19-22.

Huddy L, Khatib N (2007). American patriotism national identity and political involvement. American journal of political science 51(1), 63-77.

兵庫県尼崎市 (2015). 尼崎版総合戦略平成ーひと咲き まち咲き あまがさきに向けてー. 検索 2019/10/30

http://www.city.amagasaki.hyogo.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/008/582/2710sougousenryaku.pdf

石井憲雄 (2013). 少子化における地域差の要因:合計特殊出生率をひも解く. 星雲社, 東京.

伊藤香織 (2017). 都市環境はいかにシビックプライドを高めるか. 公益社団法人日本都市計画学会 都市計画論文集, 52 (3), 1268-1275.

- 伊藤幹治 (1995). 贈与交換の人類学. 筑摩書房, 東京都.
- 岩澤美帆 (2002). 近年の期間 TFR 変動における結婚行動における結婚行動および夫婦の出生行動の変化の寄与について. 人口問題研究, 58, 15-44.
- 岩澤美帆 (2015). 少子化をもたらした未婚化および夫婦の変化. 高橋重郷, 大淵寛編著, 人口減少と少子化対策. 原書房, 東京.
- 加藤久和 (2018). 地方消滅. 日本人口学会編者, 人口学辞典. 丸善出版, 東京.
- 小池司朗 (2018). 人口移動の分析指標. 日本人口学会編者, 人口学辞典. 丸善出版, 東京.
- 国立研究開発法人科学技術振興機構 研究開発戦略センター環境・エネルギーユニット (2019). 中山間地域の持続可能性の維持・向上に向けた課題検討. 2019/06 公表, <https://www.jst.go.jp/crds/pdf/2019/RR/CRDS-FY2019-RR-01.pdf>.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2017). 日本の将来推計人口 -平成 28(2016)-77(2115)年-. Population Research Series, 336.
- 香坂玲, 内山倫太, 田代藍 (2018). 過疎化・人口減の縮小社会における伝統的生態学的知識の喪失とイノベーション. 日本健康学会誌, 84 (6), 214-223.
- 厚生労働省 (2015). 平成 27 年市区町村別生命表の概況, 2018/04/17 公表, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/ckts15/index.html>
- 厚生労働省 (2019). 平成 30 年国民生活基礎調査の概況, II 各世帯の所得等の状況. 2019/07/02 公表, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa18/d1/03.pdf>
- 厚生労働省 (2019). 人口動態統計 平成 30 年 (2018) 人口動態統計 (確定数) の概況, 2019/11/28 公表, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei18/index.html>
- 小塩真司 (2018). SPSS と Amos による心理・調査データ解析 第 3 版. 東京図書, 東京.
- 小谷仁務, 横松宗太 (2012). 地域資産の継承とアイデンティティ形成に関する基礎的考察. 土木学会論文集, 0, I-1, 1-8.
- 工藤豪 (2011). 結婚動向の地域性. 人口問題研究, 67 (4), 3-21.

Leininger M. M著, 稲岡文昭監訳 (1995). レイニンガー看護論—文化ケアの多様性と普遍性—. 医学書院, 東京.

Lutz W, Skirbekk V, Rita M (2006). The Low-Fertility Trap Hypothesis: Forces that May Lead to Further Postponement and Fewer Births in Europe. Vienna Yearbook of Population Research, 4, 167-192.

小田博志 (2014). エスノグラフィー入門 <現場>を質的研究する. 春秋社, 東京都.

前平泰志 (2007a). ローカルな知を学ぶこと. 日本社会教育学会第54回研究大会, 41-42.

前平泰志 (2007b). 私の身体はローカルな知である. 月刊社会教育 626, 5-13, 国土社, 東京都.

牧瀬穂 (2019a). 日本における「シビックプライド」の動向整理. 公共政策志林 7, 13-26.

牧瀬穂 (2019b). 注目を集める「シビックプライド」の可能性. 公益財団法人日本都市センター編集, 住民がつくる「おしゃれなまち」—近郊都市におけるシビックプライドの醸成—. 公益財団法人日本都市センター. 東京.

丸山東人, 衛藤隆 (2010). 過疎地に暮らす身体障がい者の生活や障がいに関する思いを把握する試み—health promotion の観点から—. 民族衛生学, 76 (1), 3-25.

増田寛也 (2014). 地方消滅-東京一極集中が招く人口減少. 中央公論新社, 東京.

三重県伊賀市 (2018). 伊賀市シティプロモーション指針. 検索 2019/10/30

<https://www.city.iga.lg.jp/cmsfiles/contents/0000004/4728/H30.3cp-shishin.pdf>

宮崎県みやざき統計 BOX (2019). 指標でみる宮崎県市町村人口世帯平成30年度版. <https://stat.pref.miyazaki.lg.jp/modules/stat/tkav001.php?search=1&fld=C>

宮崎県椎葉村 (2015). まち・ひと・しごと創生椎葉村人口ビジョン. 2017/10/29
公表, http://www.vill.shiiba.miyazaki.jp/promote/2015/10/post_53.php
宮崎県椎葉村 (2019). 椎葉村の概要. 検索 2019/12/01,
<http://www.vill.shiiba.miyazaki.jp/about/index.php>

みやざきの神楽魅力発信委員会 (2017). 宮崎の神楽ガイド. 鉱脈社, 宮崎.

門司和彦, 中澤港, 河野泰之, 梅崎昌裕(2014). ポスト人口転換社会における緩和策と適応策. 民族衛生, 80 (1), 60-67.

Moorman RH, Blakely GL (1995). Individualism-collectivism as an individual difference predictor of organizational citizenship behavior. *Journal of Organizational Behavior*, 16(2), 127-142.

長野県上田市 (2018). 上田市シティプロモーション推進指針. 検索 2019/10/30

<https://www.city.ueda.nagano.jp/shise/citypro/documents/shishinn.pdf>

内閣府 (2011). 平成 22 年度国民生活選好度調査. 2011/07/07 公表,
http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/10361265/www5.cao.go.jp/seikatsu/senkoudo/h22/22senkou_02.pdf

内閣府 (2019). 令和元年版高齢社会白書. 検索 2019/12/01,
https://www8.cao.go.jp/koureい/whitepaper/w-2019/zenbun/pdf/1s1s_01.pdf

内閣府 (2019). 令和元年版少子化社会白書. 検索 2019/12/01,
<https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2019/r01pdfhonpen/r01honpen.html>

中根千枝 (1967). タテ社会の人間関係. 講談社, 東京.

繩田康光 (2008). 戦後日本の人口移動と経済成長. 経済のプリズム, 54, 20-37.

二宮浩彰 (2010). プロスポーツ・ファンの地域愛着とスポーツ観戦者行動. スポーツ産業学研究, 20(1), 97-10.

西岡八郎, 江崎雄治, 大場保, 小池司朗, 小林信彦 (2002). 都道府県の将来推計人口-平成 12(2000)～42(2030)年- 平成 14(2002)年 3 推計. 人口問題研究, 58-99.

農林水産省 (2017). 平成 28 年度 食料・農業・農村白書. 2017/05 公表,
http://www.maff.go.jp/j/wpaper/w_maff/h28/attach/pdf/index-22.pdf

農林水産省 (2019). 農村振興（中山間地域等について）. 検索 2019/3/31

- http://www.maff.go.jp/j/nousin/tyusan/siharai_seido/s_about/cyusan/
- 大淵寛 (2002). 少子高齢社会の構造転換. 国民経済雑誌, 185 (1), 19-35.
- 大野晃 (2005). 山村環境社会学序説—現代山村の限界集落化と流域共同管理—. 農山漁村文化協会, 東京.
- 小田博志 (2014). エスノグラフィー入門 <現場>を質的研究する. 春秋社, 東京都.
- 大友篤 (1996). 日本の人口移動. 大蔵省印刷局, 東京.
- 大塚柳太郎, 河部俊雄, 高坂宏一, 渡辺知保, 阿部卓 (2012). 人類生態学 (第2版). 東京大学出版会, 東京.
- 作野広和 (2006). 中山間地域における地域問題と集落の対応. 経済地理学年報 52, 264-282.
- 作野広和 (2018). 過疎化と人口減少社会. 日本人口学会編者, 人口学辞典. 丸善出版, 東京.
- 清水浩昭 (2018). 性比と人口移動. 日本人口学会編者, 人口学辞典. 丸善出版, 東京.
- 総務省統計局 (2017). 平成27年国勢調査 人口等基本集計結果. 検索 2019/03/31, <https://www.stat.go.jp/data/kokusei/2015/kekka/kihon1/pdf/gaiyou1.pdf>
- 総務省 (2017). 平成29年版 情報通信白書. 検索 2019/03/31, <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h29/html/nc141110.html>
- 総務省統計局 (2019). 人口推計 (2018年 (平成30年) 10月1日現在) - 全国:年齢 (各歳), 男女別人口・都道府県:年齢 (5歳階級), 男女別人口. 2019/04/21公表 <https://www.stat.go.jp/data/jinsui/2018np/index.html>
- Spradley JP 著, 田中美恵子, 麻原きよみ監訳 (2010). 参加観察法入門 (第1版). 医学書院, 東京.
- 鈴木春菜, 藤井聰 (2008). 「消費行動」が「地域行動」に及ぼす影響に関する研究. 土木学会論文集D, 64, 190-200.
- 田所聖志 (2018). 地域包括ケアにおける「互助」概念と贈与のパラドックス—互酬性

- を手がかりに. 日本健康学会誌, 84 (6), 187-197.
- 鄭蝦榮, 松島格也, 小林潔司 (2012). アイデンティティと過疎中山間地域における
おつきあい行動一日南町を事例に一. 土木学会論文集 D3(土木計画学, 68, 499-
511.
- 栃木県足利市(2016). 足利シティプロモーション基本方針. 検索 2019/10/30
<https://www.city.ashikaga.tochigi.jp/uploaded/attachment/35108.pdf>
- 豊田尚吾 (2013). 「地域への愛着」が地域再生に果たす役割—地域アイデンティティ
確立に貢献. 日本経済研究センター「地域アイデンティティ」研究会報告書, 155-
168.
- R. D. Laing (1975). 自己と他者. みすず書房, 東京.
- 内野澄子 (1984). 女子人口移動の動向と特徴. 人口問題研究, 厚生省人口問題研究
所, 169, 1-16
- 梅崎昌裕, 中澤港 (2014). ポスト人口転換期におけるオプティマルな対処方策. 民族
衛生, 80(1), 4-5.
- 梅崎昌裕 (2018). 人類集団の生存戦略に影響する要因としての少子高齢化. 日本健康
学会誌, 84 (6), 257-263.
- 山下裕作 (2005). 伝統文化が息づく地域社会の維持・継承 (特集 農村の環境美学—
美の里づくりの考え方と進め方). 農村と環境/農村環境整備センター, 20, 76-87.
- 渡辺伸夫 (2012). 椎葉神楽発掘. 岩田書院, 東京.
- Wysong S, Rothschild PC (2009). 'Build It Here!' An Examination of
Pride Versus Economic Motivations of Citizens Voting for Public
Stadium Financing. Journal of Venue and Event Management, 1 (2), 78-
83.

Appendix

- ご本人に関する質問

椎葉村にお住まいの「すべての方」への質問です

回答日 () 月 () 日

a. 性別	1. 男性	2. 女性	3. その他
b. 年齢	平成30年4月1日現在 () 歳		
c. 居住地区	() 地区		
d. 修学状況	1. 中学校卒業	2. 高校卒業	3. 専門学校卒業
	4. 大学卒業	5. 大学院卒業	
e. 就業形態	1. 会社員	2. 公務員	3. 自営業・自由業・内職
	4. 農林漁業	5. 学生	6. 現在、働いていない
f. 年収	1. 50万円未満	2. 50万円~100万円	3. 101万~200万円
	4. 201~400万円	5. 401~600万円	6. 601万円以上
g. 家族関係	<p>あなたの配偶関係についてお聞きします。あなたには現在、配偶者（結婚している（「事実婚」も含む）相手のことを指します）がいますか。</p> <p>1. 配偶者がいる (結婚期間 年)</p> <p>2. 配偶者はいない (過去に結婚歴が、 a. ある b. ない)</p> <p><u>お子様はいらっしゃいますか。</u></p> <p>1. 子どもなし 2. 子どもあり () 人</p> <p><u>共働きをされていますか。</u> 1. はい 2. いいえ</p> <p><u>子育てにおいて、自分の親・配偶者の親による育児協力はありますか。</u></p> <p>1. 頻繁にある 2. たまにある 3. ほとんどない 4. ない</p>		
h. 同居者	<p>あなたは何人家族ですか () 人家族</p> <p><u>同居されている方を全て○をつけてください。</u></p> <p>1. 配偶者 2. 子ども 3. 配偶者の父親 4. 配偶者の母親</p> <p>5. 自分の父親 6. 自分の母親 7. 同居者はいない</p> <p>8. その他 ()</p> <p><u>同居はしていないが30分以内に行き来できる場所に家族が住んでいる。</u></p> <p>1. はい 2. いいえ</p>		
i. あなたが参加している地区活動について、 <u>当てはまる番号全てに○をつけてください</u> （複数回答可）	<p>1) 神楽・焼畠など伝統文化の継承・保存 2) 文化祭、祭り</p> <p>3) 自然環境保全活動 4) 清掃ボランティア</p> <p>5) 学校で行われる子どもの学校行事 6) 農業振興、地域振興活動</p> <p>7) 運動会などのスポーツイベント 8) 親子会行事</p> <p>9) 常会（地区懇談会） 10) 高齢者見守り活動</p>		

11) 消防・防災活動	12) 子ども見守り活動
13) 交通安全運動・講習会	14) 食文化の継承・保存活動 (狩猟含む)
15) その他 ())
16) どれにも参加していない (理由 :))
j. あなたの地区活動の参加の頻度について、当てはまる番号に一つ〇をつけてください	
1) 仕事を休んでも毎回参加する	2) 仕事がない日は毎回参加する
3) 予定あれば参加する	4) 予定の有無にかかわらず参加しない
k. 地区活動にどのように参加しているか、当てはまる番号に一つ〇をつけてください	
1) 企画段階から参加している	2) 練習・準備段階から参加している
3) 行事当日のみ参加する	
l. 地区活動への参加の理由について、当てはまる番号一つに〇をつけてください	
1) 当然のことだから	2) 皆参加しているから
3) 誘われたから	4) 本当は参加したくない
m. あなたと地区住民との交流の形について、当てはまる番号に全て〇をつけてください (複数回答可)	
1) 悩み相談	2) 子供や高齢者の見守り
3) 物の貸し借り	4) 地域活動を通じた交流
5) 食べ物などのお裾分け	6) 仕事を通じた交流
7) 家の作業・労働の手伝い	8) あいさつ程度
n. 子育てにおいて、家族以外の地区住民による育児協力はありますか。	
1. 頻繁にある	2. たまにある
3. ほとんどない	4. ない
o. あなたは、この地区での暮らしで困っていることはありますか 1) はい 2) いいえ	
1) はい と答えた方にお聞きします。具体的に困っていることを教えてください ()	

- シビックプライドに関する質問

椎葉村にお住まいの「すべての方」への質問です

「お住まいの地区に対する意識調査」

下の 1~22 までの質問に対し、それぞれ右の中から、あてはまる番号を

一つ選び、○でかこんでください。

	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらでもない	どちらかといふとそう思わない	そう思わない
--	------	--------------	---------	----------------	--------

1 地区が好きだ	5	4	3	2	1
2 地区は住みやすいと思う	5	4	3	2	1
3 地区の雰囲気や土地柄が気に入っている	5	4	3	2	1
4 地区に自分の居場所はない	5	4	3	2	1
5 地区にずっと住み続けたい	5	4	3	2	1
6 地区を大切だと思う	5	4	3	2	1
7 地区には、いつまでも変わってほしくないものがある	5	4	3	2	1
8 地区には、無くなってしまうと悲しいものがある	5	4	3	2	1
9 地域社会の一員としての責任を真剣に考えている	5	4	3	2	1
10 自分のような人間が地域社会で重要な役割を果たすと思う	5	4	3	2	1
11 地域社会を良い場所とするため、自分なりの貢献はできていない	5	4	3	2	1
12 自分は、地域社会に変化を起こすことができると思う	5	4	3	2	1
13 人生の大部分は、地区と結びついている	5	4	3	2	1
14 「椎葉村の人」という言葉は、自分がどんな人物であるかを説明している言葉 である	5	4	3	2	1
15 「〇〇地区の人」という言葉は、あなたがどんな人物であるかを説明している言 葉である ※〇〇地区=お住まいの地区のことです	5	4	3	2	1
16 「〇〇地区の住民」であることは、自分にとって重要なことである。	5	4	3	2	1
17 この地区は、他の地域よりも良い場所であると思う	5	4	3	2	1
18 地区を批判している人がいたら、地区を擁護する。	5	4	3	2	1
19 家族や友人に、この地区の特産品や製品を使うよう勧める	5	4	3	2	1
20 地区・又は地区出身のスポーツチーム・選手を積極的に応援する (小中学校のスポーツチームや、アマチュアチーム、運動会など)	5	4	3	2	1

● 中山間地域振興尺度に関する質問

椎葉村にお住まいの「すべての方」への質問です

「地区行事や住民の交流、暮らしについての調査」

下の 1~20までの質問に対し、それぞれ右の中から、あてはまる番号を

一つ選び、○でかこんでください。

	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらでもない	どちらかどいうとそう思わない	そう思わない
1 神楽など、地区文化の継承活動に積極的に参加している	5	4	3	2	1
2 地区の環境保全活動に積極的に参加している	5	4	3	2	1
3 学校で行われる、子どもたちの学校行事に積極的に参加している	5	4	3	2	1
4 学校では、地区の文化や歴史を大切にした教育をおこなってもらいたい	5	4	3	2	1
5 地区は、地域の歴史や自然環境が学べる場所だと思う	5	4	3	2	1
6 地区の子ども達の成長のため、教育活動には積極的に参加している	5	4	3	2	1
7 町や地区の環境をよくするため、清掃等で協力しあうことは大事である	5	4	3	2	1
8 地区で行われる、イベントや祭りの手伝いを積極的に行っている	5	4	3	2	1
9 近所で助け合って作業をすることは、大事である	5	4	3	2	1
10 地区を皆が楽しめる場所にすることは、重要だと思う	5	4	3	2	1
11 ご近所との日常的なお付き合いを続けることは、大事である	5	4	3	2	1
12 他人の悩みごとの相談にのってあげることは、大事である	5	4	3	2	1
13 1人暮らしのお年寄りを、近所や地区で世話することは、大事である	5	4	3	2	1
14 家族以外でも、地区の子どもたちの性格は理解している	5	4	3	2	1
15 先祖を大事にし、墓を守っていくことは、大事である	5	4	3	2	1
16 地区に住んでいる親戚との付き合いを、大事にしている	5	4	3	2	1
17 地区は移住者でも活躍できる場所だと思う	5	4	3	2	1
18 地区は女性も活躍できる場所だと思う	5	4	3	2	1
19 児童館に入る前の子どもの面倒を見るのは、母親がやるべきだと思う	5	4	3	2	1
20 地区の素晴らしいところを、子供たちに積極的に伝えている	5	4	3	2	1

ここからは、「U ターン」で椎葉村へ帰村された方への質問です

※高校入学で離村され、卒業後、帰村された方も含みます

p. U ターン時の年齢	あなたが U ターンされた年齢をおしえてください () 歳		
q. U ターン前の居住地区	※○県○市まで記載 []		
r. U ターン前の職業	下の中から当てはまるものに○をつけてください 1. 会社員 2. 公務員 3. 自営業・自由業・内職 4. 農林漁業 5. 学生 6. アルバイト・フリーター 7. 専業主婦 8. 働いていない		
s. U ターン前の年収	1. 50 万円未満	2. 50 万円～100 万円	3. 101 万～200 万円 4. 201～400 万円 5. 401～600 万円 6. 601 万円以上
t. U ターンの動機	<u>あなたの U ターンの動機として、あてはまるもの全てに○をつけてください</u> (複数回答可) 1. 生まれ育った故郷だから 2. 豊かな自然の中で生活したいから 3. 家族や親戚と一緒に（近くで）暮らしたいから 4. 治安が良いから 5. 家族や親戚が望むから 6. 仲間や友達がいるから 7. 椎葉村に希望する仕事があるから 8. 人との繋がり深いから 9. 家業を継ぐ、家を守るためから 10. 助け合いの精神があるから 11. 椎葉村を活性化したいと考えていたから 12. 自分の居場所があるから 13. 繙承する様々な伝統があるから 14. 自分の役割があるから 15. 神楽を続けたかったから 16. 村外の暮らしがあわなかったから 17. その他 ()		
u. U ターンの意思決定	<u>あなたの U ターンの意思を決定づけたものは何でしょうか</u> <u>上の 1～17 の項目から 3 つ選び、優先順位の高い順に番号を記入してください</u> () () ()		
v. 村外の暮らし	「c. U ターンの動機」で「村外の暮らしがあわなかった」と回答された方に質問です 「村外の暮らしがあわなかった」の具体的な事柄があれば、教えてください []		
w. 再ターン	あなたは再び離村したいと考えておりますか 1. はい 2. いいえ <u>「1. はい」と回答された方に質問です。その理由を教えて下さい</u> [] []		
x. 離村による気付き	一度、離村したことで良かったと思うことは、ありますか 1. はい 2. いいえ <u>「1. はい」と回答された方に質問です。その理由を教えて下さい</u> [] []		

ここからは、「移住」や「婚姻」で椎葉村へ移住された方への質問です

a. 移住時の 年齢	あなたが移住した時の年齢をおしえてください () 歳		
b. 移住前の 住居地区	※○県○市まで記載 []		
c. 移住前の 職業	あなたが移住する前の職業をおしえてください 1. 会社員 2. 公務員 3. 自営業・自由業・内職 4. 農林漁業 5. 学生 6. アルバイト・フリーター 7. 専業主婦 8. 働いていない		
d. 移住前の 年収	1. 50万円未満	2. 50万円～100万円	3. 101万～200万円
	4. 201～400万円	5. 401～600万円	6. 601万円以上
e. 移住の きっかけ	あなたの移住の意思を決定づけたものは何でしょうか []		
f. 地区参加	あなたは地域行事・地域組織に参加していますか 1. はい 2. いいえ <u>「1. はい」と回答された方、その理由を教えて下さい。</u> 1) 皆参加しているから 2) 誘われたから 3) なんとなく 4) 本当は参加したくない <u>「2. いいえ」と回答された方、その理由を教えてください</u> ()		
g. 生活	あなたが移住した地区での暮らしでの良い点で、 <u>当てはまるもの全てに○をつけてください</u> 1. 豊かな自然の中での生活 2. 治安が良い 3. 人との繋がりが深い 4. 助け合いの精神が良い 5. 自分の居場所がある 6. 自分の役割があるから 7. 繙承すべき様々な伝統があるから 8. その他 ()		
	あなたは、移住した地区の生活で困ったことはありますか 1. はい 2. いいえ <u>「1. はい」と回答された方に質問です。具体的な内容を教えて下さい</u> []		
	<u>相談相手はいますか</u> A. 配偶者 B. 地区の住民 C. 役場の職員 D. 家族・友人 E. その他		
h. 再ターン	あなたは再び離村したいと考えておりますか 1. はい 2. いいえ <u>「1. はい」と回答された方に質問です。その理由を教えて下さい</u> []		